

大 門 遺 跡

——大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書——

1 9 8 3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和57年度公民館建設に伴い袋井市教育委員会が実施した、大門^{だいもん}I遺跡の発掘調査報告書である。
2. 大門I遺跡は、昭和37年東海道新幹線建設工事に係る発掘調査があり、本書ではこれを第1次調査とし、今回の調査を第2次調査と整理した。
3. 本調査は、袋井市教育委員会社会教育課文化財係寺田義昭、松井一明を発掘担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
4. 本調査、本書刊行に係る事務について、袋井市教育委員会社会教育課文化財係が行った。
5. 本書の編集、執筆は松井が行い、高野由美子、寺田義昭各氏の助言を得た。
6. 挿図、図版の作成は、松井、高野が行い、進藤貴和子、早川保子各氏の協力を得た。
7. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 本書の作成にあたって、とくに第3章第1節に関して中野宥、長谷川秀厚、向坂鋼二、羽仁生保、梶田博之、丹羽博の各氏、同第3節については向坂鋼二、浜松市博物館、渋谷昌彦坂巻隆一、仲野泰裕、松本すが子の各氏より有益な御教示、資料の提供をしていただきました。また下記の方々にも多くの協力を頂き記して感謝の意を示したいと思います。
平野吾郎、瀬川裕市郎、松本一男、篠原修二、栗野克己、栗原雅也、山崎克己、鈴木節司、鈴木基之、大石佳弘、高山優、松本健、扇浦正義（以上敬称略）
9. 本調査、資料整理参加者、協力者は次の方々です。
浅井征江、寺田せつ子、寺田ひで子、仲根世始子、鈴木咲子、名倉保子、早川里美、山下悦子、志村国子、寺田松枝、早川保子、横山いち、松浦まつゑ、鈴木まさ子、窪野志奈子、仲根わか、塚本清、山崎喜美枝、木村弘之、高野由美子、進藤貴和子、吉岡伸夫（以上敬称略）

凡 例

1. 挿図のうち陶磁器関係では、釉薬に関して以下のとおりのスクリントーンを使用した。



御深井釉系
灰



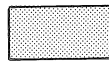
呉須釉系
(コバルト釉)



鉄釉系



銅緑色釉系
青磁外面



長石白色釉系

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制	1
i) 調査の方法 ii) 経過 iii) 調査整理体制	
第3節 太田川・原野谷川中、下流域の弥生時代遺跡群の動態	3
第2章 遺 跡	7
第1節 基 本 層 位	7
第2節 遺 構	7
i) 掘立柱建物 ii) 竪穴状遺構 iii) 方形周溝墓 iv) 溝状遺構	
v) 土拵・小穴	
第3節 遺 物	20
i) 縄文時代の遺物 ii) 弥生時代の遺物 iii) 古墳～近世初頭の遺物	
iv) 近世末～近代の遺物	
第3章 考 察	36
第1節 弥生時代から古墳時代前期の掘立柱建物について	36
i) はじめに ii) 平面プランの基本形式 iii) 1間×1間掘立柱建物の検討	
iv) 1間×2間、1間×3間掘立柱建物の型式分類 v) その他の掘立柱建物に	
についての検討 vi) 大門遺跡検出の掘立柱建物の検討 vii) まとめ	
第2節 大門遺跡周辺の古代～近世初頭期における歴史的動向	47
第3節 遠江における近世～近代初頭期における陶器生産の様相	48
i) はじめに ii) 志戸呂焼について iii) 水ヶ谷焼について	
iv) 瀬戸窯について v) おわりに	
付 篇 第3次調査出土の遺物概要	55
第1節 は じ め に	55
第2節 遺 物 の 概 要	55
i) 縄文時代の遺物 ii) 弥生時代の遺物 iii) 古墳時代～近世の遺物	
第3節 お わ り に	60

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と付近の弥生時代遺跡群	2
第2図	発掘区、試掘トレンチ配置図	3
第3図	周辺遺跡と地形図	4
第4図	S B 1、2 遺構実測図	8
第5図	遺構全体図	9・10
第6図	S B 3、4 遺構実測図	11
第7図	S B 5、6 遺構実測図	12
第8図	S I 1～4 遺構実測図	13
第9図	S X 1 遺構実測図	14
第10図	S D 3、4、6、7、9 遺構実測図	15
第11図	S D 13、S K 15、P 157 遺構実測図	16
第12図	S K 9 遺構実測図	17
第13図	S K 1、2、4、6、8、14、16、17 遺構実測図	18
第14図	縄文時代の遺物	20
第15図	第1次調査及び表採品土器実測図	21
第16図	S B 1、S I 1、S K 1 出土土器実測図	24
第17図	S K 5、S K 9、小穴出土土器実測図	25
第18図	土器拓影図(1)	26
第19図	土器拓影図(2)	27
第20図	土器拓影図(3)	28
第21図	奈良～近世初頭の遺物実測図	30
第22図	近世末～近代の遺物実測図(1)	33
第23図	近世末～近代の遺物実測図(2)	34
第24図	水ヶ谷窯出土遺物実測図(1)	34
第25図	水ヶ谷窯出土遺物実測図(2)	35
第26図	弥生(後期)～古墳時代(前期)の掘立柱建物分析図(1)	39
第27図	弥生(後期)～古墳時代(前期)の掘立柱建物分析図(2)	41
第28図	志戸呂焼変遷図	50
第29図	瀬戸窯出土遺物実測図	52

付 篇 挿 図 目 次

第1図	石器実測図	55
第2図	南区土拡出土遺物実測図	56
第3図	北区拡張区土拡遺物実測図(1)	57
第4図	北区拡張区土拡遺物実測図(2)	58
第5図	古墳時代～近世の遺物実測図	59
第6図	嶺田式土器組成図	60

図 版 目 次

図版1	1 遺跡遠影 2 遺跡遠影 3 調査前状況
図版2	1 完掘状況 2 完掘状況
図版3	1 SB1、2 2 SB1 3 SB2、3、4
図版4	1 SB1、P1 2 SB5 3 SB6
図版5	1 SI1、2 2 SI3、4 3 SX1
図版6	1 SK9 2 SK9 3 P100
図版7	1～5 SK1出土土器、6 SK9出土土器 7 P157出土土器 8 P100出土土器
図版8	1 SK9出土土器棺 2 採集土器 3 第1次調査出土土器
図版9	1 SB1、2出土遺物 2 SB2、3、4出土遺物 3 SI1出土遺物
図版10	1 竪穴状(SI)遺構出土遺物 2 方形周溝墓(SX)、土拡(SK)出土遺物 3 土拡(SK)、溝状遺構(SD)出土遺物
図版11	1 小穴(P)、表採遺物 2 確認調査出土遺物(1) 3 確認調査出土遺物(2)
図版12	1 確認調査出土遺物 2 縄文時代、奈良～中世遺物 3 近世末～近代遺物

第 1 章 序 説

第 1 節 調査に至る経過

袋井市において、各地区の公民館建設が進むなかで南地区の公民館建設が昭和57年度に着工されることとなった。建設計画が進むなかで、建設予定地域（旧市役所跡地）に埋蔵文化財（大門Ⅰ遺跡）が所在しており、その取り扱いが問題となった。

教育委員会は、急きょ試掘調査を実施し遺構の広がりを確認したうえで本調査の実施計画を策定することとした。試掘調査は昭和57年9月25日～同10月10日までの14日間実施した。試掘調査は市役所跡地全域に巾1mの試掘トレンチを10mおきに東西方向に設定し、必要におうじて拡張区をもうけた。その結果、試掘範囲全面に弥生時代～中世にかけての遺構、遺物の所在が確認された。

試掘調査の結果、本調査は公民館建設予定地域と、その付属施設について実施することとし、駐車場予定地については未舗装のうえ掘削工事をともなわないことから調査対象からは除外した。本調査は、11月上旬より実施し、公民館建設工事が開始される12月上旬までの約1ヶ月間で調査が終了するように実施計画を立案した。

第 2 節 発掘調査の方法・経過・調査整理体制

i) 調査の方法

公民館建設範囲を基準として、測量用基本杭を10m方眼に設定し、東西方向を東より1、2、3……、南北方向を北よりA、B、C……とした。遺構の実測図は20分の1縮尺を基本とし、遺物の出土状況や土拡等必要に応じて10分の1縮尺図を作成した。また、遺構確認面において、1m間隔で絶対標高を測定し、微地形が復元できるようにした。

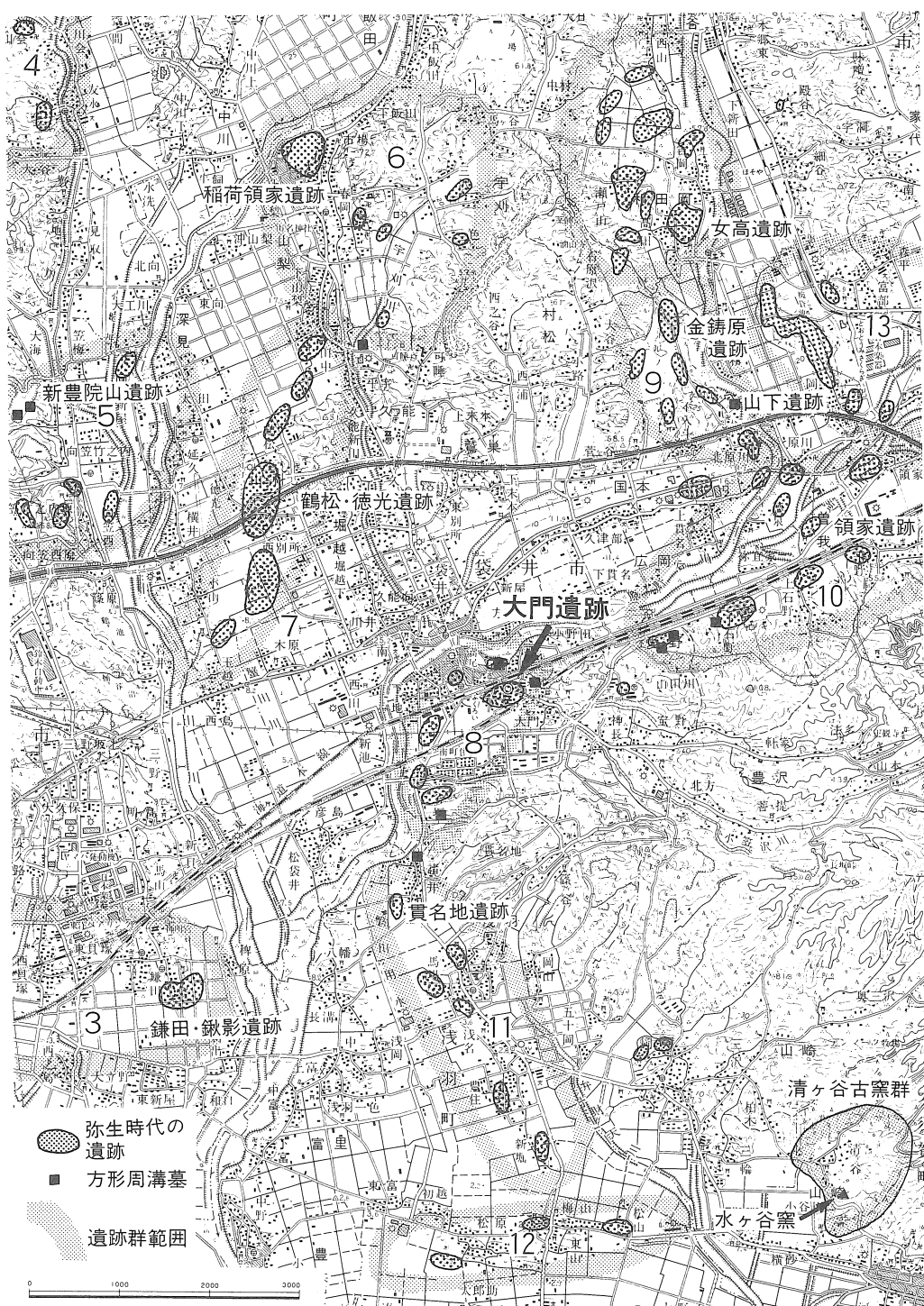
写真撮影にはブローニーサイズ原画（白黒）と35mmサイズ原画（白黒、カラーリバーサル）を併用した。

ii) 経 過

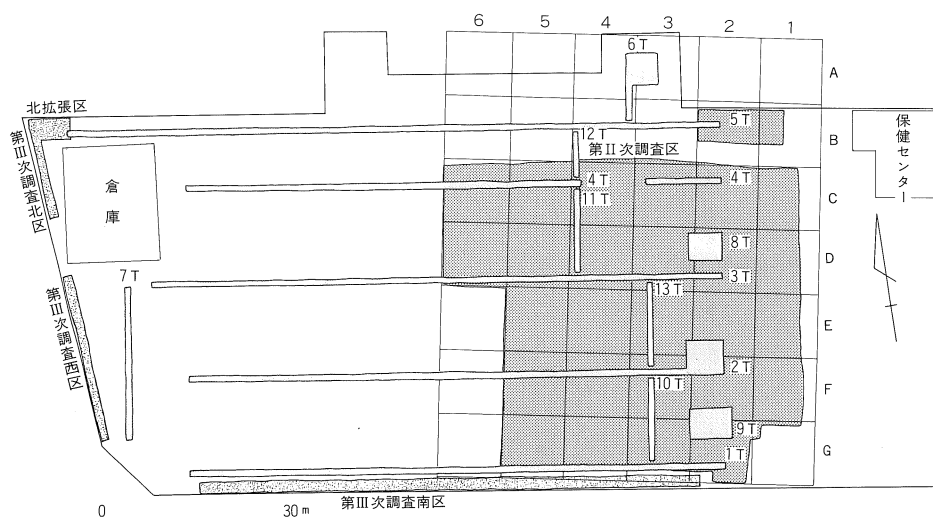
昭和57年11月4日～11月7日 発掘調査対象区域が、旧市役所建物はすでに取りこわされ整地がなされていたものの、各所に建物や測溝などのコンクリート基礎部分が多数残存していると予想されたため、表土、基礎建造物の除去を重機により行った。

同11月8日～11月15日 重機による表土の除去作業が完了した後、遺構確認作業に入ったが確認面に小笠山礫層の再堆積層と思われる礫層面が広がり確認作業に手間どったが、遺構の覆土が黒色土であったために土色確認は容易であった。

同11月16日～11月25日 遺構は発掘区域全面にわたり確認され、とくに西端では弥生時代の掘立柱建物を含む住穴群が密集して、また東端では中世の掘立柱建物を中心として弥生時代の竪穴状遺構なども検出された。この頃、豪雨があり発掘区域が水没するなど予想外の障害に見舞われた。



第1図 遺跡の位置と付近の弥生時代遺跡群



第2図 発掘区・試掘トレンチ配置図（トレンチは試掘トレンチ名）

同11月25日～12月12日 調査面積の割に調査期間が短時間であったことや、豪雨などの予想外の障害により調査予定期間内終了が危ぶまれたが、関係諸氏の協力、作業員さん方の献身的な御努力により、飛躍的に調査が進行した。全体写真撮影後、実測作業に取りかかり、調査を無事終了することができた。

iii) 調査整理体制

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査実施機関 静岡県袋井市教育委員会 教育長 鈴木勲一

社会教育課長兼文化財係長 永田新作

指導主事 寺田義昭（調査担当者）五島康司

文化財係 吉岡伸夫 永井義博 松井一明（調査担当者）

第3節 太田川、原野谷川中、下流域の弥生時代遺跡群の動態

袋井市は、太田川、原野谷川などの中小河川により形成された沖積平野と、それらの河川により開析を受け複雑な地形を呈し北方に分布する可睡丘陵、また南方には小笠山を中心とする小笠山丘陵西山麓が広がっている。

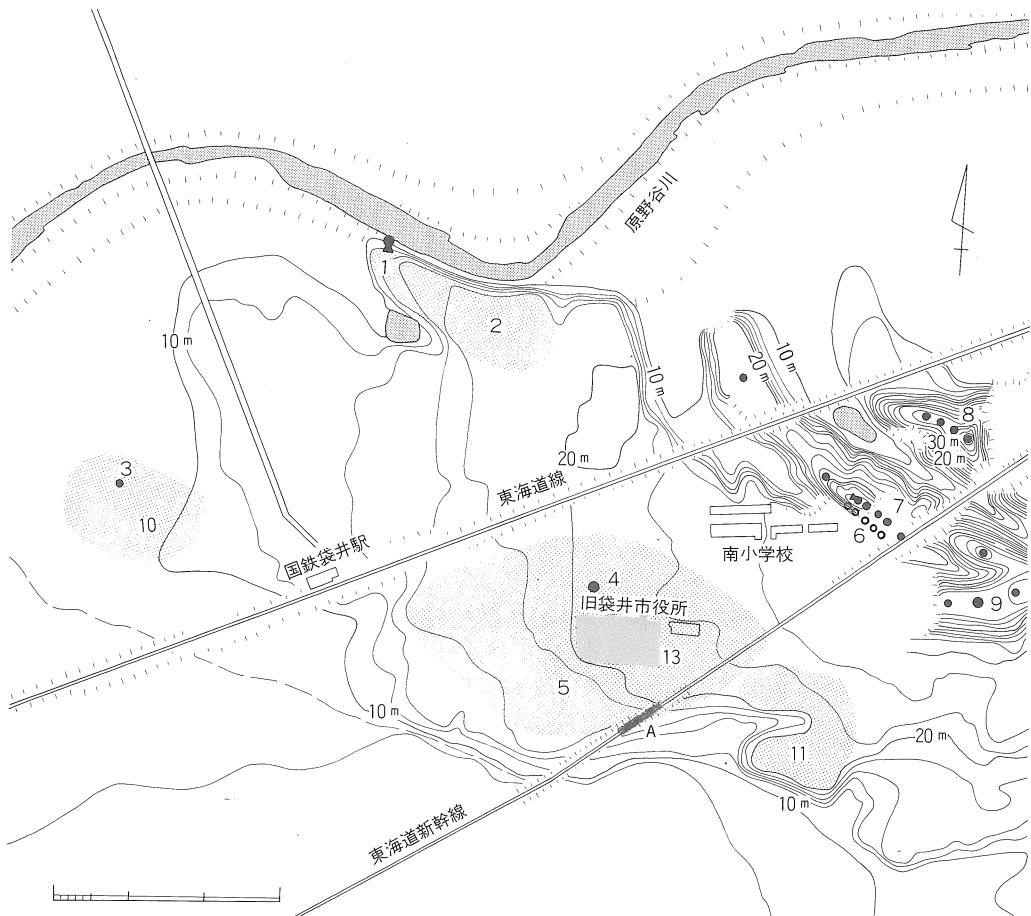
大門遺跡は、原野谷川が北方より流れ出し小笠山丘陵により西方に流路を転じ、さらに小笠山丘陵がとぎれる西山麓部分からさらに南方に流路を変えるが、この南方に流路を変える部分に形成された段丘上に立地する。この段丘は、原野谷川と小笠山西山麓を水源とする小笠沢川が合流する部分に形成されているが、小笠沢川が形成し長者平遺跡（縄文中～後期初頭）が立地する段丘にくらべると大規模であり、原野谷川あるいは太田川により形成された段立ではない*

*) 長者平遺跡の調査を担当された吉岡伸夫氏の指摘による。

かと思われる。

この大門遺跡が立地する段丘上には、弥生時代中期後半～後期にかけての方形周溝墓の発見があった掛の上遺跡(2)、古墳時代を中心とする大門Ⅲ遺跡(11)などが知られている。さらに今回の調査で判明したように大門遺跡では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良、平安時代さらに鎌倉から近世、近代といった長期間の遺構、遺物が発見され、この段丘上は各時代にわたって幅広い人々の生活の痕跡が見られ、原始、古代より現在にいたるまでの袋井市域での人々の生活の中核地域として利用されていたことが判明した。

さて、今回報告する資料については、弥生時代についてもっとも充実しており、本節では大門遺跡が太田川、原野谷川中、下流域においてどのような位置づけがなされるのか考えてみたい。以前に太田川、原野谷川中、下流域の遺跡群の概観について触れたことがあるが(文17)、付近の遺跡の調査例や発見例が若干増加したためそれも含めて再考してみたい。



第3図 周辺遺跡と地形図

1 弧塚古墳 2 掛の上遺跡 3 御所森古墳 4 大門大塚古墳 5 大門Ⅰ・Ⅱ遺跡 (A 1次調査地点 B 2次～3次調査地点) 6 地蔵ヶ谷横穴群 7 地蔵ヶ谷古墳群 8 井守塚古墳群 9 大門山古墳群 10 三門遺跡 11 大門Ⅲ遺跡

1、2については磐田原台地西端にグループされるもので、今回図示していないが1グループは馬坂遺跡を含む勾坂上遺跡群で中期中葉からの出発が、2グループは広野遺跡、加茂東原遺跡などの遺跡群で中期後半からの出発が考えられる集落群である。

3グループは御殿・二ノ宮遺跡、野際遺跡、鎌田・鍬影遺跡などの2グループと対比しうる大規模集落群で、磐田原台地南端に発達した舌状台地の末端が沖積平野に接する平坦地に立地する。2グループなどと同様にそれぞれ、古墳時代初頭まで存続し、出発も野際遺跡、御殿・二ノ宮遺跡で中期後半の遺構、遺物が確認されている。

4グループは山田、豆塚遺跡などの敷地川に面した小河岸段丘上に立地し、比較的小規模な遺跡を中心とする。後期の土器片が採集され、中期にまで遡る遺跡は発見されていない。

5グループは新豊院、向笠遺跡などを中心とするグループである。新豊院山墳墓群などの調査が進行し集落の動向は不明な点が多いが、中期中葉の土器や中期後半～後期の方形周溝墓、前期古墳が発見されていることから、向笠小学校校庭遺跡や中村遺跡などの集落跡が付近に存在したその時期について中期中葉～後期、古墳時代初頭にかけての存続が考えられる。

6グループは稲荷領家遺跡を中心とするグループである。稲荷領家遺跡は太田川の自然堤防上に立地し、後期～古墳時代初頭期の遺物が採集されている規模の大きな遺跡であるいは中期まで遡りうるとも考えられる。ほかには宇刈川の自然堤防上や可睡丘陵上に立地し、後期後半～古墳時代初頭まで存続する一色前田遺跡、三沢遺跡などがある。一色前田遺跡では丘陵線をV字溝で切断しその間に3～4軒の住居跡が営まれた遺跡で、沖積面に立地する遺跡群との係り合いを知るうえで重要である。

7グループは鶴田、鶴松、徳光、土橋遺跡などの太田川自然堤防上に立地する大規模な遺跡群で、鶴松遺跡では中期中葉から出発し古墳時代初頭まで経続して営まれるほか、鶴田、土橋遺跡などは後期から成立し古墳時代初頭まで営まれている。

8グループは掛の上、大門遺跡などの段丘上に立地し中期中葉～後期、古墳時代初頭まで存続する大規模なものと、沖積面の原野谷川自然堤防上に立地しおそらく後期を中心とする関口・三門、柳原遺跡などの遺跡を含むグループである。

9グループは、境前、東山、久能山、金鑄原遺跡などの各和原段近上に立地するグループである。それぞれ中期からの土器を出土し、後期まで存続する遺跡群で7、8グループとは状況が異なる。金鑄原遺跡は中期後半よりはじまる大規模な遺跡である。

10グループは、領家、梅橋遺跡などの家代川、垂木川、逆川が合流する自然堤防上に立地するグループで、図示はしなかったが、細田、前坪遺跡あたりまでをグルーピングしたい。愛野遺跡などは段丘上に立地するほかは、肥沃な沖積平野に展開した大規模な集落群である。原川遺跡で中期前半、領家、梅橋北遺跡では中期後半の出発時期が見られ、古墳時代に継続するかは不明である。

11グループは十二所、貫名地遺跡などの太田川下流域の自然堤防上に立地するグループである。今のところ中期の遺跡はないが、王子遺跡では中期中葉の墳墓が発見されており十二所遺跡などが中期までさかのぼりうる可能性がある。それぞれ古墳時代初頭まで存続している。

12グループは、権現山、松山、宮西遺跡などの太田川下流域に形成された砂丘列上に立地する集落群である。それぞれ中期から出発し古墳時代初頭まで存続する集落群である^{*}。

13グループは、岡津原遺跡群、山崎、二反田遺跡などの丘陵部あるいはその丘陵の裾部に形成された自然堤防上に立地するグループ。図示していないが赤渕桶田遺跡までを含めたい。岡津原遺跡群は前～後期の長期間営なまれた遺跡群であり古墳時代初頭まで存続する。

14グループは、高田上ノ段、瀬戸山、女高遺跡などの吉岡原に形成された集落群である。瀬戸山Ⅱ遺跡、女高遺跡などで中期中葉の土器が採集されている。そのほか後期～古墳時代初頭まで存続する遺跡が多いようである^{**}。

以上のように再分類したが、いくつか気づいた点をあげてみよう。

① 比較的大規模な遺跡群として確認され沖積平野の自然堤防上に展開する、3、7、10グループ（Ⅰ類a）台地上、段丘上に展開した大規模な集落群として1、2、9、14グループ（Ⅰ類b）いくつかの中核村落を中心として小規模な集落を構成する6、8、13グループ（Ⅱ類）比較的小規模な遺跡群を中心とする4グループ（Ⅲ類）などに分別しえる。実像の不明な、5、11、12グループについては、5はⅡ類またはⅢ類、11、12についてはⅠ類aに含めて考えても良いのだろうが保留したい。

② 集落群の存続時期の問題について、おおむね前期の遺物を出土する遺跡を含むものもあるが、Ⅰ類、Ⅱ類の中核村落では中期中葉から出発し、中期後半に遺構、遺物量ともに増加し後期～古墳時代初頭まで安定的に営なまれている。また、9、12のように中期中葉～後半にかけて複数の集落から出発し、後期に若干の集落数の増加をみるグループもある。Ⅲ類は現状の中では後期の集落により構成されるが、古墳時代初頭まで存続するかは不明である。

Ⅰ類型集落群は、立地条件にて2つに分別したが、Ⅰa類としたもののほうが生産構造を高めていくための有利な地理的条件をⅠb類にくらべもちえていたであろう。しかし、その動態に関してはさほどの差を見い出せないことから、Ⅰb類型集落群についてもⅠa類型集落群に匹敵しうる生産構造体を内包していたといえる。

Ⅱ類型集落群については、中核集落の規模はⅠ類型集落群に見られる中核集落に匹敵するものの、そこから分派するであろう後期集落群の規模に若干の劣勢化現象が見られる。おそらく、中核集落での生産力がⅠ類集落にくらべて低かったことや、その共同体内部での分村計画の質的な相異に根ざすためであろうが、中核集落と分村集落の関係について十分検討しうる調査例が少ないため傾向の提示にとどめておく。

Ⅲ類型集落群については、現状の資料の中では後期集落群として認識されることから、付近のいずれかの（ⅠあるいはⅡ類型）集落群から分派して新たな集落群を形成した新興集落群として位置づけたい。しかし小規模な中期集落を内包する劣勢集落群としての位置づけも可能かもしれない。

*) 浅羽町の遺跡群については柴田稔氏の御教示による。

**) 掛川市の遺跡群については、佐藤由紀男氏、松本一男氏らの御教示、論考を参考とした。

第2章 遺 跡

第1節 基 本 層 位

遺跡の層位は、旧市役所建物の造成などによる攪乱のために、約20～40cmほどの褐色土を中心とする攪乱層下の大部分で包含層は認められず、直下より基盤である小礫混りの黄色粘土層や、さらにその下層に見られる礫層が所々で露呈する現状であった。

しかし、確認トレンチでは旧市役所域の西端はやや地形が低くなるせいか、造成時の盛土が厚く、攪乱層、表土の下に厚さ20～30cmの黒褐色土が認められ、弥生時代の包含層と思われた。また、北方の旧市役所と民家との境のカッティング面にやはり厚さ20～30cmの黒褐色土が観察され、弥生時代の土器を包含しており、さらに包含層が北、西へ広がる可能性が強く、従来別遺跡と認識されていた大門Ⅱ遺跡は、本遺跡に含まれることが判明した。

また、各時期別の遺構の覆土については以下の通り識別することができ、出土遺物とも矛盾することはなかった。

弥生時代中～後期	黒褐色土（径1～2cmの礫や土器片が摩滅して細片化したと思われる赤色粒子を多く含む締った層）
中世	黒色土（径1～2cmの小礫を少量含み、赤色粒子はほとんど含まない層）
近世～近代	褐色土（柔らかくしまりのない層）

第2節 遺 構

本調査で検出された遺構は、弥生時代中～後期・中世・近世末～近代の3期に大別しえたが、あくまでも各遺構出土遺物や覆土の土層により判別しており、遺物量の少ない遺構については他時期に含まれる可能性を残している。

i) 掘立柱建物（SB）

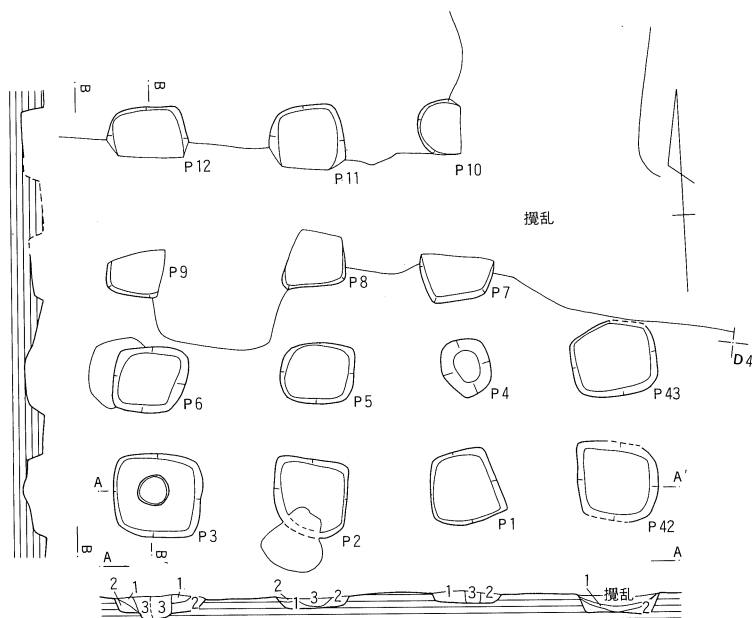
SB1（第4図）

4C区にて検出された3間×3間の柱間の建物で、北東隅の2本の柱穴を攪乱により失われていた。柱穴は約1m40cm×約1m40cmの方形の掘り方をもち、P3や掘り方の断面観察より径50cm前後の柱痕が見られた。柱間規模は東西方向2m50cm、南北方向1m80cmになり、桁行規模7m50cm、梁行規模5m40cmを測り、主軸方向（梁方向）はほぼ北向である。

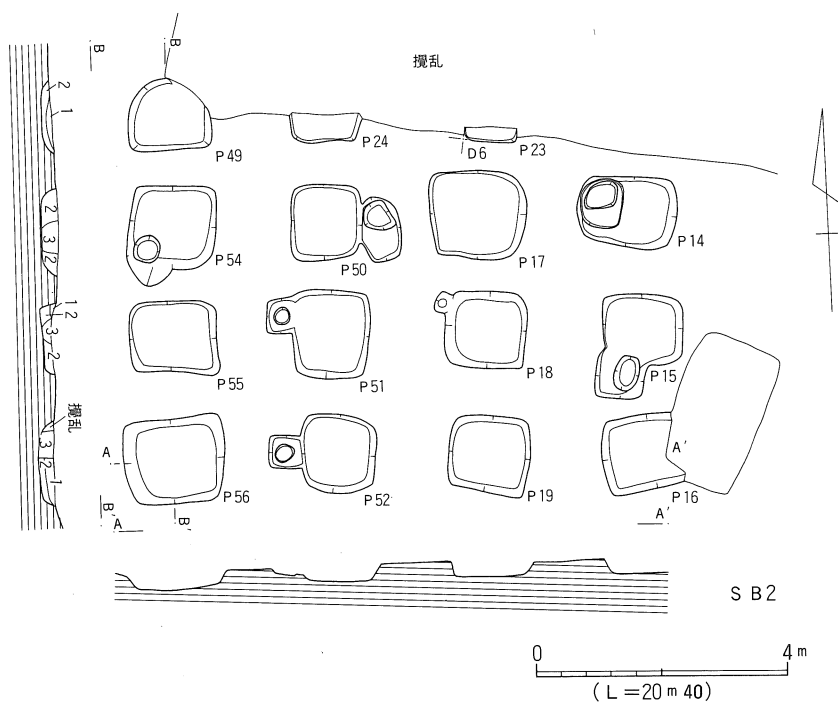
柱間の短い総柱の建物であることから、高床の建物で柱痕規模から倉庫と考えたい。また、掘り方内より弥生時代中～後期の遺物が、また覆土についても他の弥生時代の遺構とは明確に識別しえず、あるいは弥生時代後期とも考えられるが、後章にて検討する。

SB2（第4図）

6C区にて検出された3間×3間の柱間の建物で、北東隅の1本の柱穴を攪乱により欠われていた。柱穴は約1m50cm×約1m50cmのSB1よりやや規模の大きい掘り方形をもつが、



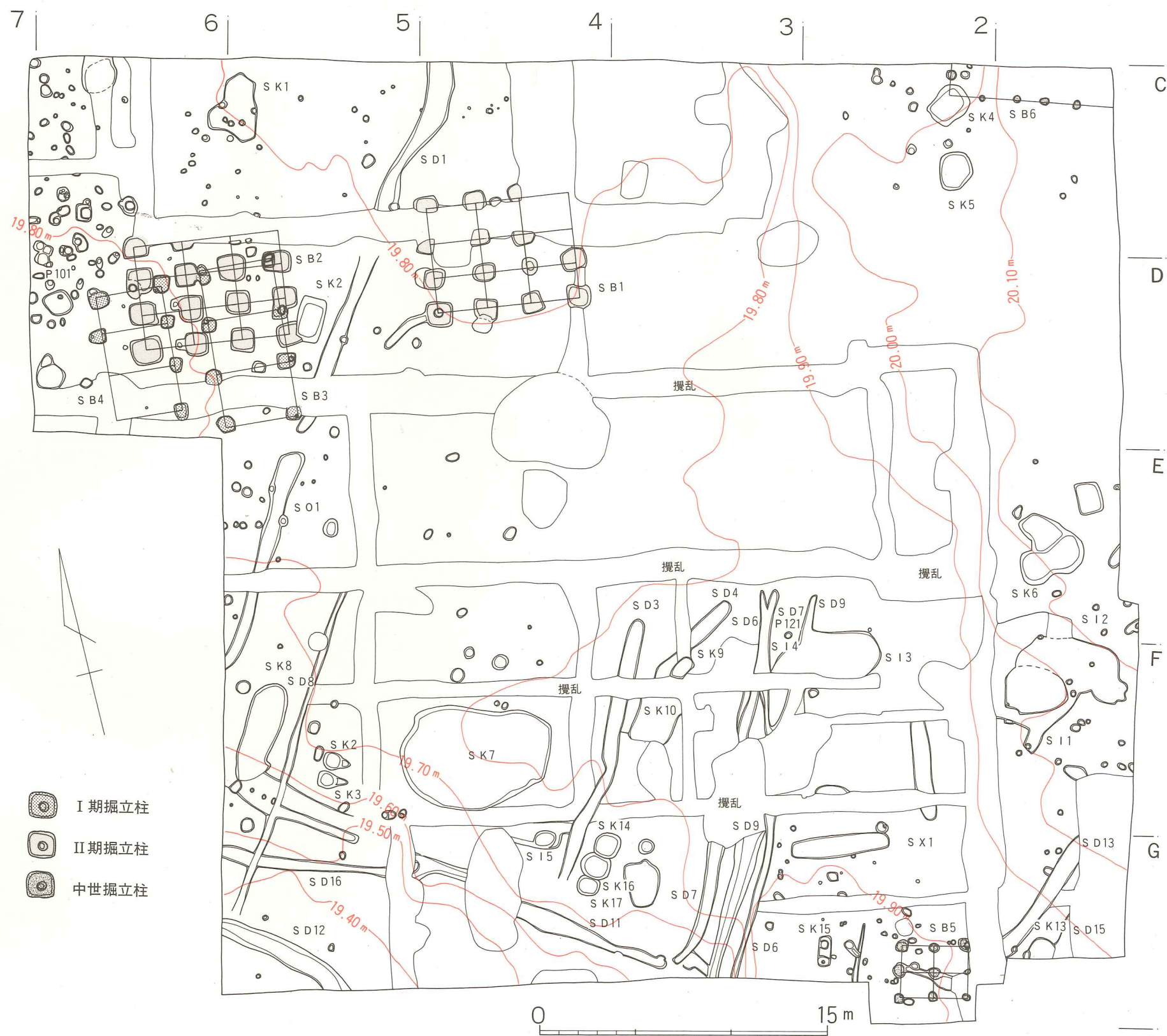
S B 1



S B 2

0 4 m
(L = 20 m 40)

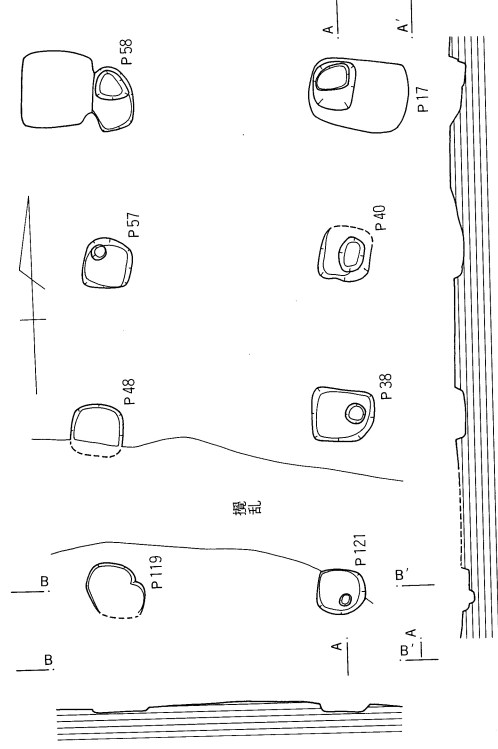
第4図 S B 1、2 遺構実測図



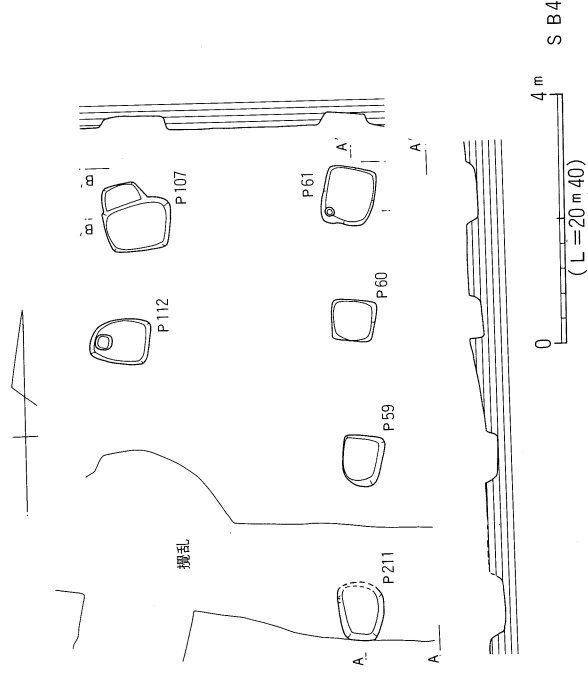
第5图 遺構全体図

柱痕はS B 1と同様に径50cm前後のものが観察しえた。柱間規模は東西方向2 m50cm、南北方向1 m80cmになり、桁行規模7 m50cm、梁行規模5 m40cmを測り、主軸方向（梁方行）はほぼ北向である。

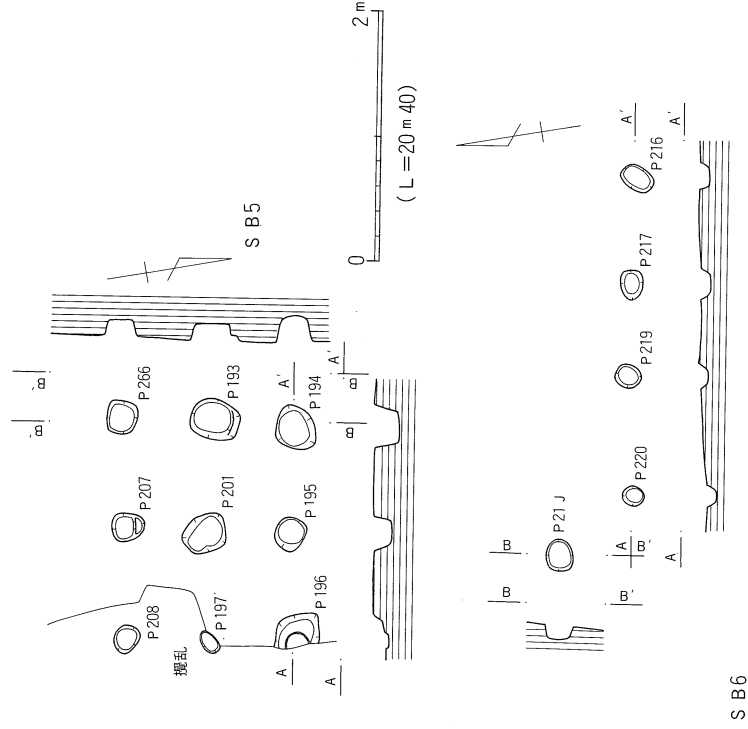
建物規模や主軸方向、またS B 1の桁行方向延長上6 mの位置に計画的に建られている点、S B 1と強い関係のある倉庫と考えられ、同種の建物がまだ付近に発見される可能性がある。時期については、掘り方内より弥生時代中～後期の土器が、また覆土についてもS B 1と同様



SB3



第6図 S B 3・4 遺構実測図



第7図 S B 5 ・ 6 遺構実測図

に弥生時代のものとは識別しえず、弥生時代後期とも考えられるが後章にて検討する。

S B 3 (第6図)

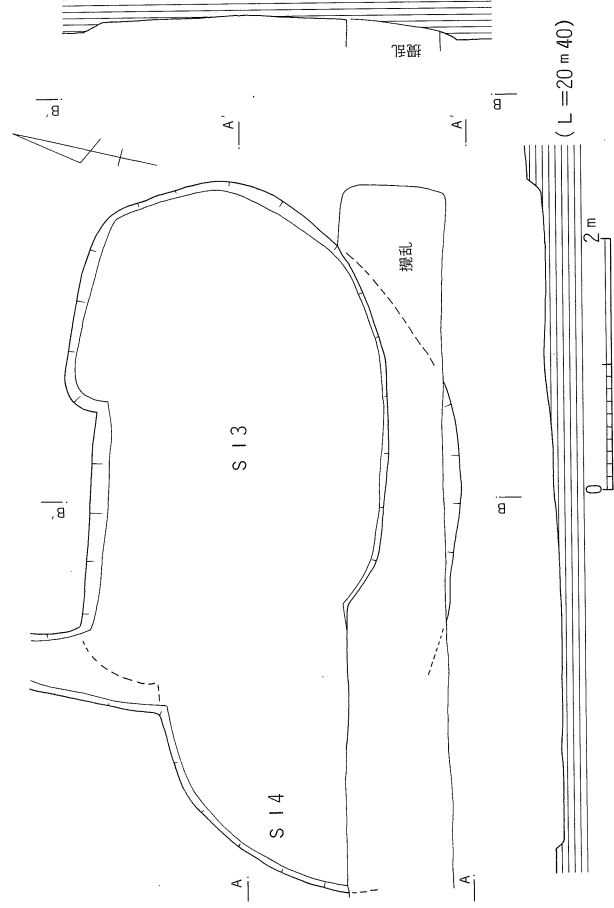
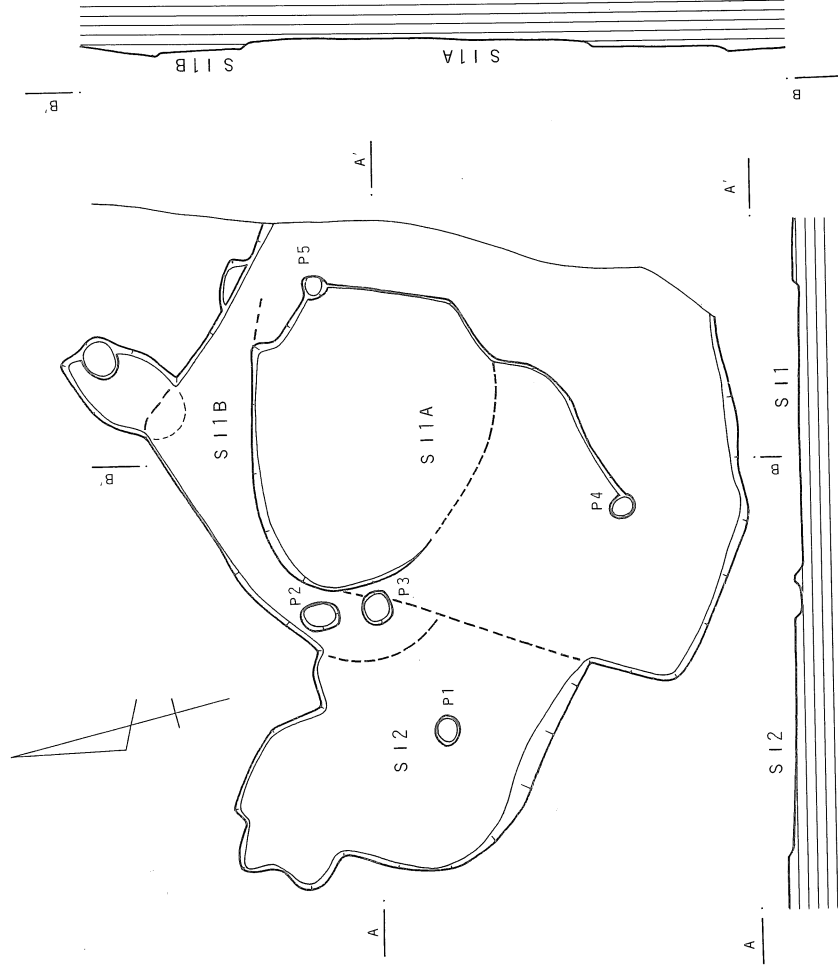
S B 2 とほぼ重複して検出された、1 間× 3 間の柱間の建物である。柱穴は約80cm× 80cm 前後の方形、隅丸方形の掘り方をもち、径30cm前後の柱痕が観察された。柱間規模は南北方向約 2 m80cm、東西方向約 4 mで、桁行規模 8 m40cm、梁行規模 4 mを測り、主軸方向（桁行方向）N—3°—Eを示す。時期については、掘り方内よりいずれも弥生時代後期の土器を出土しているが、後章にて位置づけは検討する。

S B 4 (第6図)

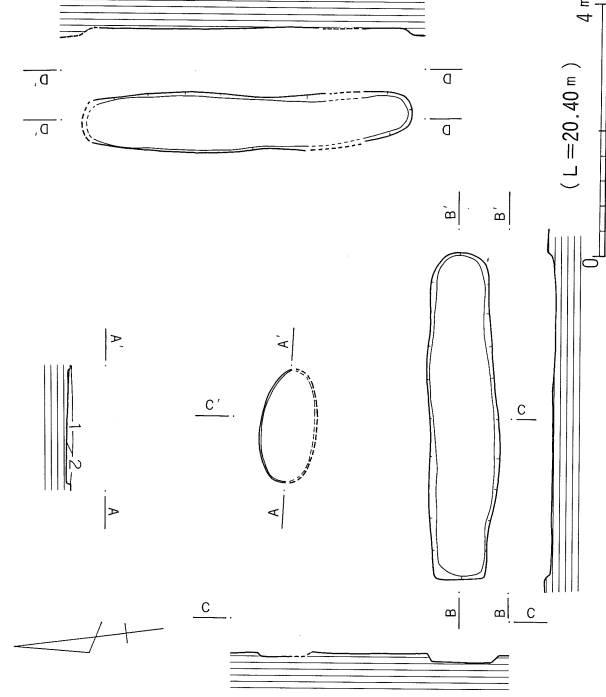
S B 3 の西 1 mにはほぼ平行するように検出された 1 間3 間の柱間の建物であり、南西隅の柱穴 2 本を攪乱により失っている。柱穴は約80cm× 80cm前後の方形、隅丸方形の掘り方をもち、径30cm前後の柱痕が観察された。柱間規模は南北方向約 2 m20cm、東西方向 3 m50cmで、桁行規模 6 m60cm、梁行規模 3 m50cmを測る。主軸方向（桁行方向）N—3°—Eを示す。S B 4 よりひとまわり小さな建物であるが、建物構造、主軸方向とともに S B 3 と強い関係が見られる。時期については、掘り方内よりいずれも弥生時代後期の土器を出土しているが、後章にて位置づけは検討する。

S B 5 (第7図)

2 G区で検出された 2 間× 2 間の間口をもつ総柱の建物である。直径30cm前後の柱穴からな



第8図 S I 1 ~ 4 遺構実測図



第9図 SX 1 遺構実測図

り、間口規模は東西方向約90cm、南北方向約70cmで、桁行規模1 m80cm、梁行規模1 m40cmを測る建物である。主軸方向はN—10°—Eを呈す。

時期はP208より13世紀の山茶碗が出土していることや、柱穴の覆土が中世のものである点から鎌倉時代（13世紀）の倉庫風建物と考えたい。

SB 6（第7図）

1 C区にて検出された建物で、南桁行の一部が検出されたのみで大部分は発掘区域外となっている。直径10～20cmの小柱穴からなり、間口規模も70cm～1 mと不揃いである。遺物はないうが、柱穴の覆土から中世（13世紀）の建物と考えられる。

ii) 竪穴状遺構

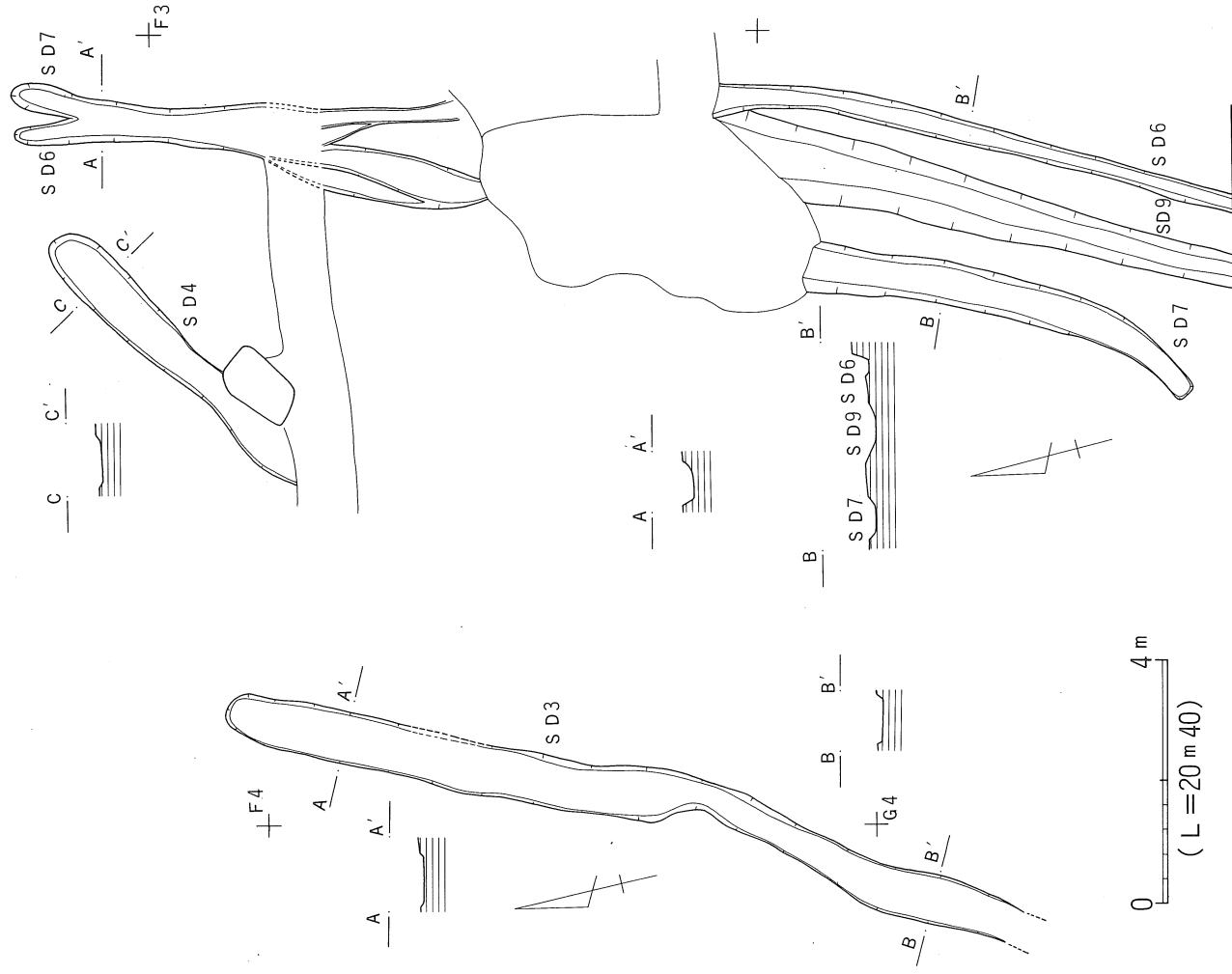
SI 1 A・B、2（第8図）

1 F区で検出されたもので、複数の竪穴状遺構が切り合ったものと考えられるがほとんど上半部を削平され不明な点が多い。大まかなプランを確認しえたものを報告する。

3基の竪穴状遺構はいずれも一辺4～5 mの方形あるいは隅丸方形を呈すと思われる。柱穴状のピットもP 1、P 3、P 4、P 5などが見られるがいずれも浅い、はり床、焼土とも検出されず住居跡といえる資料はえられなかったが、ほとんど床面まで失なった住居跡と考えてもよいと思われる。時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉～後半と考えられる。

SI 3・4（第8図）

2 F区で検出され、2基の竪穴状遺構が切り合ったものと考えられ、一部SD 9（近世溝）により切られている。いずれも3 m×4 mの楕円形のプランをもった竪穴状遺構と思われるが削平が激しく本来のプランが疑わしい。はり床、焼土とも検出されず、いかなる性格の遺構か



第10図 S D 3、4、6、7、9 遺構実測図

推定しない。時期は出土土器から弥生時代中期後半と思われる。

iii) 方形周溝墓

S X 1 (第9図)

2 F 区で検出されたが、大半は削平され南、東溝のみの検出で、検出された溝も浅く底付近と思われる。四隅の切れるタイプで、各溝の規模は巾約 1 m、長さ約 5 m を測る。全体規模は

不明であるが、各溝を対称形とし推定するなら台状部規模は約 6×6 m を呈すると思われる。

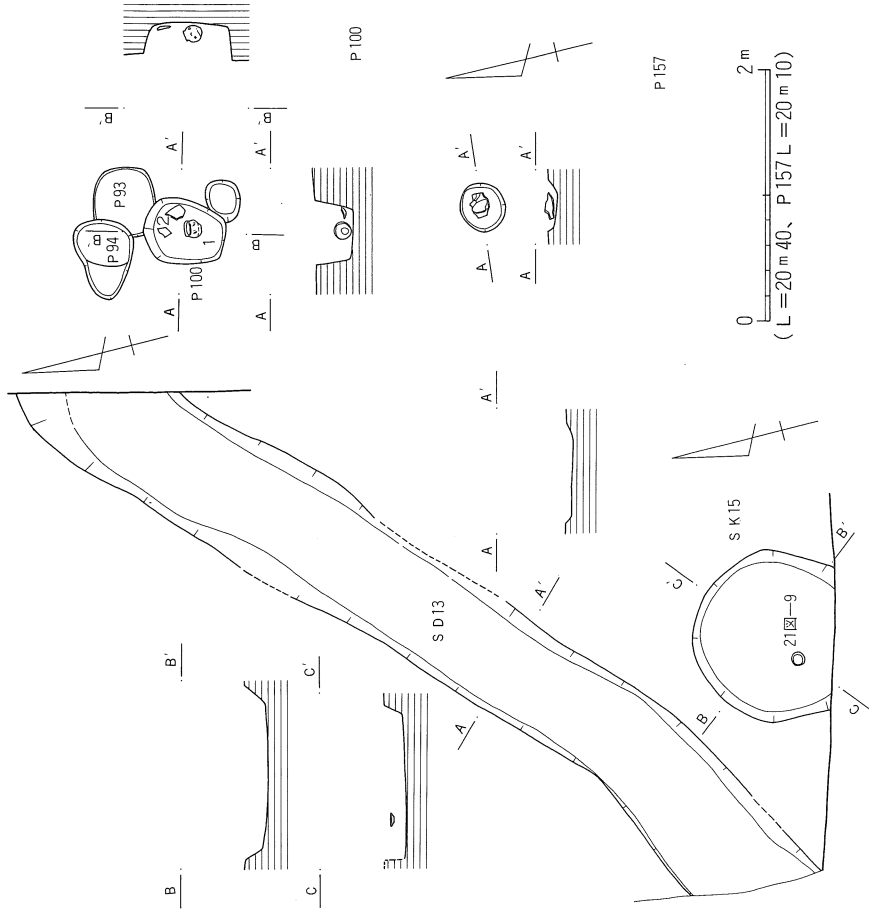
主体部は中央よりやや南溝に よった所に検出されたが大半は攪乱により失なわれていた。長さ 1 m 80 cm を測る。覆土は 1 黒色土、2 黒色土（ロームブロック多く含む）で 2 が木棺の掘り方の土とも考えられるが、明確な木棺の痕跡はとえられなかった。

時期は出土土器から弥生時代中期中葉と考えられる。

iv) 溝状遺構

SD 3、4（第10図）

いずれも弥生時代後期の溝状遺構と思われる。SD 4 は出土土器が小破片なので判別が不可能であるが、山茶碗等他時期の遺物は含まれなかった。主軸方向は、SD 3 $N-30^{\circ}-E$ 、SD 4 $N-50^{\circ}-E$ と北東より南西への流路をとり、自然地形の高位地から低位地へ溝が掘削されていることから排水用の溝と思われる。ほかに出土土器はないが、覆土の状態から SD 13、SD 15 などが弥生時代の溝と思われる。



第11図 SD 13、SD 15、P 100、P 157 遺構実測図

SD 1、SD 6～9 (第10図)

いずれも北東方向から南西方向に流路をとる近世末～明治初頭期の溝状遺構である。主軸方向は、SD 1 N—30°—E、SD 6 N—25°—E、SD 7 N—30°—E、SD 8 N—35°—E、SD 9 N—30°—Eと30°前後東方向よりとなり、弥生時代同様な地形に合わせて溝を掘削しているようである。

SD 11、12、16 (第5図)

いずれも北西方向から南東方向に流路をとる近世末～近代初頭期の溝状遺構である。主軸方向は、SD 11 N—60°—W、SD 12 N—50°—W、SD 16 N—70°—Wと先のSD 1、SD 6～9 とほぼ直交するように掘られた溝であり、地形に依りなく設定されていることから、排水の意味をもたされたSD 1、SD 6～9 とともに畑地や屋敷地の区画割の溝と考えられる。

v) 土坑・小穴

土坑は弥生～中世のものも若干含むが、ほとんどが近世末～近代所屬のものと考えられ、おもなものの報告にとどめたい。

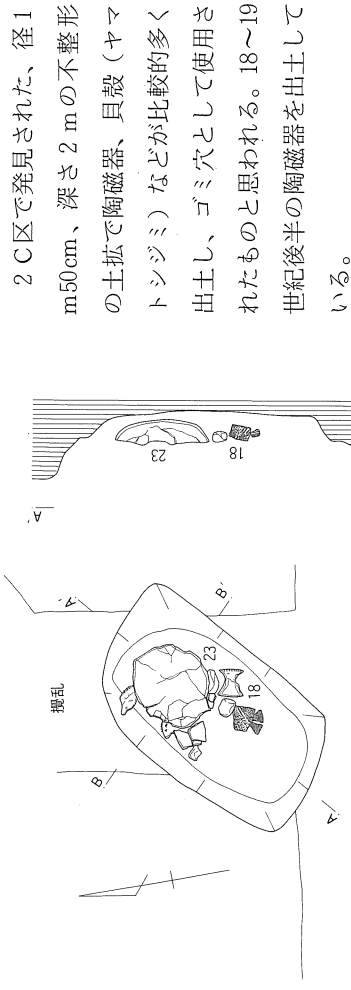
SK 1 (第13図)

5 C区にて検出された南北方向 1 m 90 cm、東西方向 1 m 50 cmを測る土坑状遺構であるが、削平をうけた竪穴状遺構の残存したものかもしれない。P 1～P 5の小穴が認められたが、本遺構に伴うものが不明である。P 4付近より比較的まとまって土器の出土をみた。時期は弥生時代後期前半である。

SK 2、4、6、8 (第11図)

方形ないし楕円形をなす長軸 2 m 前後、短軸 1 m 50 cm 前後の規模の土坑で、SK 2のように礫や陶磁器の破片を上層に含むものもあり、一部ゴミ穴的に使用されたものがあるが、出土遺物は少ない。SK 2は18世紀～19世紀前半の陶器を出土している。

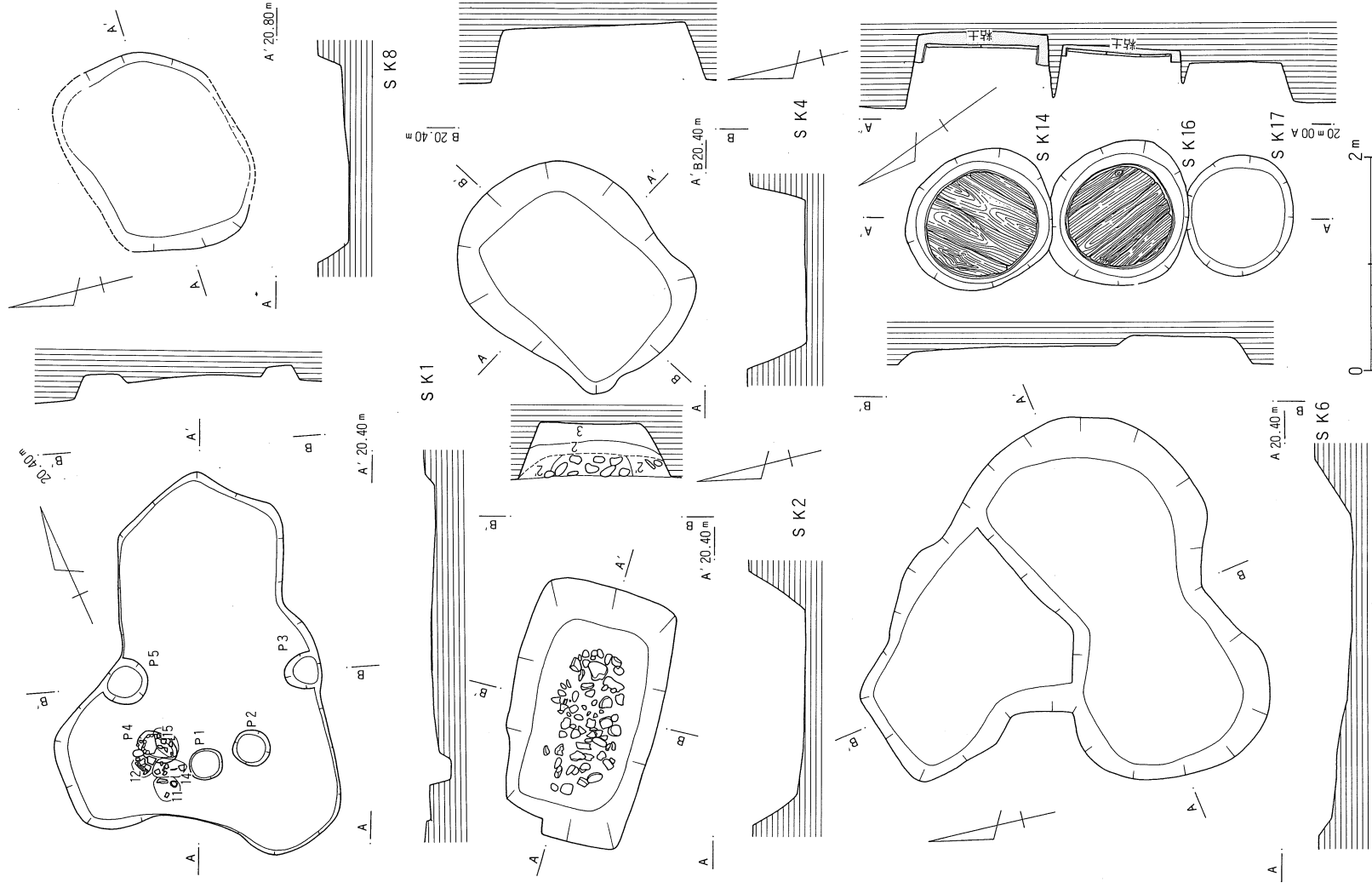
SK 5



SK 9 (第12図)

3 F区で検出された長軸 2 m 60 cm 短軸 1 m 50 cm の長方形を呈する土坑で、底より 10 cm ほど浮いた状態で大形の

第12図 SK 9 遺構実測図



第13图 SK1、2、4、6、8、14、16、17遺構実測図

壺形土器が出土した。攪乱のため上半部を大部分欠損するが、口をやや南西方向に傾け 口縁部の大形破片が土抔底面に見られるため、口縁を意図的に割り取った後に埋納した壺形棺と推定される。また、18の中形壺の破片も見られるが、あるいは壺形棺の口蓋に使用されたものかもしれない。時期は弥生時代後期前半である。

SK 7、8、12 (第5図)

長軸 8 m 以上の大形土抔である。SK 7 などは礫層を掘り込むなど大がかりなものが多く、宅地、畑地などに用いる採土抔の可能性を指摘したい。また、いずれも陶磁器など多く出土していることからゴミ穴に転用しているものと考えたい。SK 7 は中世の遺物が多いが、18～19世紀の陶磁器片を、SK 8 は18～19世紀前半、SK 12は18世紀の陶磁器を出土した。

SK 15 (第11図)

1 Gで検出された、径 1 m 30 cm を測る円形土抔で一部調査区域外となる。土抔のほぼ中央底面より 10 cm ほど浮いた状態で完形品山皿 1 枚が出土している。墓的要素が強い土抔である。

SK 14、16、17 (第13図)

4 G 区で検出された径 1 m ～ 1 m 30 cm の円形の土抔で、一部切り合いながら SK 14、16、17 と南北方向に連なっていた。SK 14、16 には桶の底と思われる底板が残存し、側板は竹あるいは木の皮のようなもので作られていたらしい痕跡が観察された。また、この桶の底、測面の掘り方内には粘土をつめ耐水の機能をもたせてあることから畑地の中の肥溜桶と思われる。時期は出土遺物が少ないが、木桶であることと溝状遺構との関連より近世末期と思われる。

小穴

各時期のものが数多く検出されたが、弥生時代のもものは SB 2 付近の 6 C、6 D 区、SI 1、2 付近の 1 C 区で、鎌倉時代のもものは SB 5 付近で多くなくなる傾向がある。また、古墳～奈良時代の須恵器を出土するものも 2 ～ 3 見られたが、建物として把握しうるものものはなかった。

柱穴状の深いものが大半であるが、P 100、P 157 のように完形率の高い土器が納入されているものがあり、貯蔵穴のように使用されていたものも見られる。

小 結

弥生時代の遺構は大きく中期と後期に分別しえた。中期の遺構は、SI 1、2 などの中～後葉の住居跡と思われる遺構、SX 1 の中葉期の方形周溝墓などが知られる。後期前葉の遺構は SK 9 の土器棺、SK 1 の土抔などが知られ、後葉では掘立柱の建物が見られる。

古墳～平安時代の明確な遺構は見出しえなかったが、近世末～近代の遺構から遺物の出土をみえるため付近に遺構の存在を示している。

中世については、SB 5 のような倉庫風建物や、SK 15 のような土抔墓が知られそれぞれ13世紀代を中心として発見されている。

近世末～近代にかけては、SK 14、16、17 などの肥溜土抔や溝状遺構から畑地として使用されていた可能性が高いと思われる。また SK 2、5 や溝状遺構内に多量の陶磁器類が投棄されている状況から、付近に屋敷地が存在すると思われる、農村集落の一面であったと推定される。

第3節 遺物

i) 縄文時代の遺物 (第14図)

縄文時代の明確な遺構は発見されなかったものの、表土中あるいは近世～近代の遺構中より縄文時代の土器、石器が出土している。定形的石器はないが、弥生時代での報告例は少ないものについて本項では縄文時代の遺物として報告する。

土器 (第15図 1)

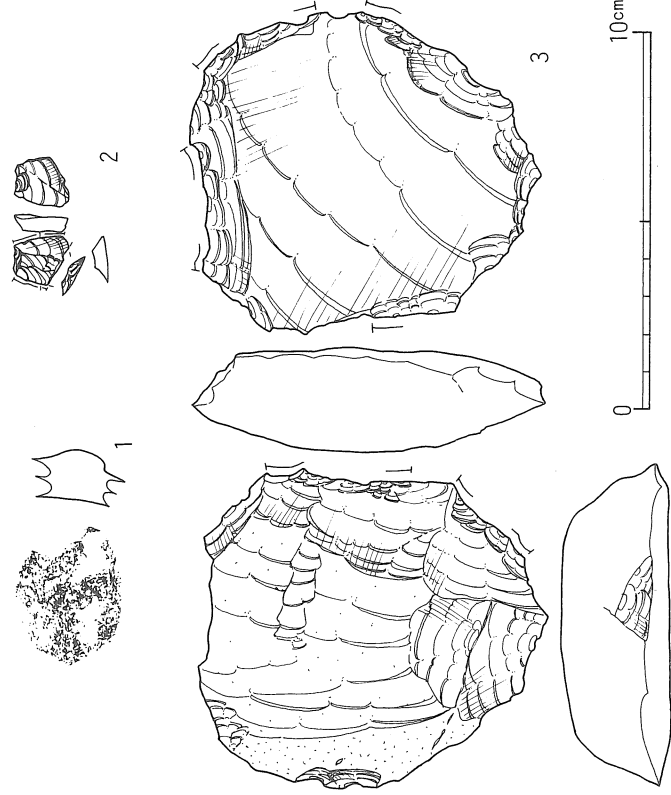
SK13 (近世～近代) より出土している。隆帯文が観察されるほかは小破片のため不明である。色調は茶褐色で、胎土に頁岩、石英、砂岩や多量の金雲母を含む。以上の点から、中期中～後葉初頭 (勝坂～會利Ⅱ式併行) の時期が想定でき、なお検討の余地を残す。

削器 (第15図 2)

黒曜石製で巾広の縦長剥片を利用している。下端をやや欠損するが長さ1.5cm、巾1.3cmを計る。定形的ではなく、あるいはUFに分類したほうが良いのかもしれないが両側面に微細な剥離痕が観察でき、明らかに削器の機能を果たしていたと考えられる。

石斧 (第15図 3)

安山岩の肉厚剥片を利用したもので、一部自然面を残す。荒い剥離が表面のみに認められ片面加工に近いが、所所に細かい剥離が表裏ともに認められ、あるいは削器的な用途に使用されていたとも考えられる。



小 結

今回の調査では、中期中葉以降の土器片と若干の石器が発見された。遺構は発見されなかったものの、石器に削器や石斧などの工作具を中心とすることから小規模な生活域 (集落?) と推察され、長者平遺跡 (中期) などの母村との関連が注目される。

第14図 縄文時代の遺物 (SK13・1、表採・2～3)

ii) 弥生時代の遺物（第15図～第20図）

今回の調査にて当期の遺物は土器のみで、数少ないが完形率の高いものが数点図示した。段階設定については、中期中葉～後期後葉まで幅広く見ることができているが土器組成の決定、個別段階の設定及び様式設定を行いうる一括資料についてえることができたため、本項では各遺構出土の土器を大きな暫定段階を設定し記述を進めるにとどめた。

中期中葉

S I 2、S X 1 などから比較的まとまって出土しているが量は少なく、壺と甕が見られる。

壺形土器

器形、口縁部形態のわかるものはない。第18図21、48、第19図74、75、76、81、105、106などの、竹管状工具による楕円文や波状のモチーフをなす沈線文、押引文により飾られるものがある。おそらく細頸壺の系譜にあたるものである。

甕形土器

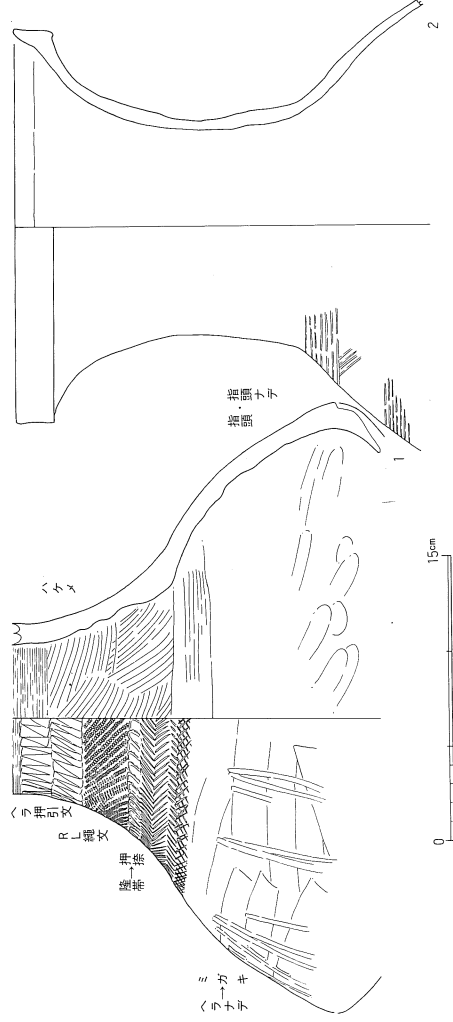
外面調整を草の茎のようなものを束ねた工具により施された条痕仕上げとし、おそらく口縁を大きく外反させた深鉢形を呈すると思われる。口縁部はキザミ目の施されるものが多い。端部は面をつくるものが多数であるが、（A類）第19図78のようにやや丸く仕上げるものもある。（B類）キザミ目を施す手法は、第19図77、78の口唇部内外のもの、外面のみの第21図67～70、82、83に細分できる。

中期後葉

S I 1 や確認第2トレンチ西端（溝？）などですべて出土し、他の弥生後期～近代の遺構中にも混在し、中葉期にくらべると遺物量は増加する。壺と甕が知りえた。

壺形土器

完形を知りえるものはないが、第17図20のような細頸壺と、第16図6、第15図2（参考資料



第15図 第1次調査及び表面採集土器実測図—参考資料

大門遺跡表採品)のような太頸の広口壺がある。細頸壺は第19図73のような小受口状口縁なもの(A1類)、やや外反した単純口縁で口唇部を丸くおさめる第18図46(A2類)、やや内彎1気味の口縁をもつ第18図45(A3類)がある。広口壺は受け口状口縁をなす第15図2、第19図110、第20図130、(A1類)、大きく外反した単純口縁で口唇端部に面をつくりキザミ目や列点文を施す第18図10、第19図116、117(A2類)に分類した。

肩～頸部文様のバラエティを見てみると、櫛描文が施されるグループ(第18図54、59、60、61、第19図62、63、102、103、第20図132～135、155、156)とへう描文が施されるグループ(第18図49、50 第19図99、第20図137、149、154)に大別しう。

櫛描文は横線文を連らねたもの(第19図62)、波状文を連らねたもの(第19図102)、波状文+横線文を連らねたもの(第19図103)のほかに、横線文へうや櫛状工具に縦位に施文するもの(第20図134)や横線文の1単位ごとに縦位施文をするもの(第20図132、133)、縦位にへう状工具で横線を区切った後、その間の横線をナデ消したもの(第20図156)が特徴的に見られる。へう描文は、複合鋸歯文の施されたもの(第20図154)、格子目文のもの(第18図41)、重圈四角文(第18図49、50)などのほかに、櫛描文の第20図156の手法をへう描文にて模倣したもの(第20図149)も見られ興味深い。頸部文様として横位の列点文を施すもの(第18図51、第20図126、153)があり、中期中葉段階細頸壺の頸部に施される円文の細密化したものと考えられる。

甕形土器

大きく外反したキザミ目をもつ口縁の、深鉢形を呈すると思われる。外面調整は中期中葉段階のものにくらべると刷毛目調整に近く細密化しているが、条痕仕上である。第19図64、65、66などがあげられ、口唇部はやや尖らせへう状工具によるキザミ目が施される。

後期前葉

SK1や土器棺墓(SK9)出土土器があげられる。壺、甕、高坏、鉢がある。

壺形土器

完形の知りえるものがないが、第16図11のように細い頸部をなし、大きく外反し小さな折り返し口縁をもつ広口壺(A1類)、A1類と同じ形であるが折り返し口縁でなく口唇端部に面を作る第17図18の広口壺(B3類)、単純口縁で細い頸部をなし、あまり外反した口縁をもたない第16図13の広口壺(B2類)、第16図12の口縁をやや内彎させ口唇端部に面をつくる広口壺(C2類)、また太頸で大きく外反させた口縁をもち、口唇端部に広い面を作る第17図23の大形広口壺(E類)などがある。ほかに受け口状口縁をなす第19図11、112などが考えられるが(広口壺D類)、細片のため鉢、高坏(B類)との区別がなかった。

胴部については器形を知りうるものは少ないが第16図14などから最大径が胴部下半にあり、肩の張らない無花果形を呈するものがあり、A～C類の器形を推定させる。

文様としては第16図14のように横刺突文を数条施すもの、第18図23、第20図145のような横刺突文と胴部全体に縄文を施すものが特徴的である。また、第17図23の大形広口壺(E類)の肩部に断面三角形の凸帯が見られ、竹管刺突文が施される、第17図18のように1～2条の羽

条刺突文が施されるものがあり、横刺突文や縄文などと組み合わせて施文する。

甕形土器

完形を知りえるものはなく、少量の小破片のみ出土した。くの字状にやや外反した口縁で、口唇端部に面をつくる第19図94～95、120、第20図147などが該当しうる。

高 坏

ほとんど小破片であることと、甕形土器の口縁と類似するものを含むため抽出に不安を残すが、口縁内面にミガキ調整を施し壺にくらべてややや簿手の土器の口縁部破片を高坏と考えた。全形は知りえないが、鐔状口縁をなした鉢状の坏部をもち、脚部は第16図3、17、第17図21、22などのように下方にやや開いた筒形で、下端部で屈折した形態を呈すると思われる。(A類) A類は単純口縁で、口唇部に面をつくりそこにキザミ目や縄文などを施文する第19図89 (A1類)、小さな折り返し口縁をなす第19図87 (A2類) に分別しうる。また第19図112のような受け口状口縁をなすもの (B類) がある。

脚部文様として第15図3のような櫛状工具による横刺突文、第17図21、22のような三角凸帯文など甕形土器の頸部文様と類似するものが多いほか、無文のものも目立ち特徴的である。

鉢形土器

今回は直線的に開いた口縁をもつ第16図15のようなもの (B類) のほか、受け口状口縁をなすものがあるが (A類)、小破片のため壺D類、高坏B類との区別がつかなかった。

後期後葉

S B 1～4の掘立柱建物の柱穴内より出土するが、小破片のみで多くは論及できない。壺と甕、高坏がある。

壺形土器

全形が知りえるものはない。口縁部形態としては、前葉期にくらべて肉厚な折り返し口縁となる第18図3、5、16、17、38、39などが特徴的である。また、第18図26～28、43など羽状刺突文が肩部文様の主体となる。また、第16図1、2のような広口の単純口縁の壺もあるが、前葉期との比較は難しい。

甕形土器

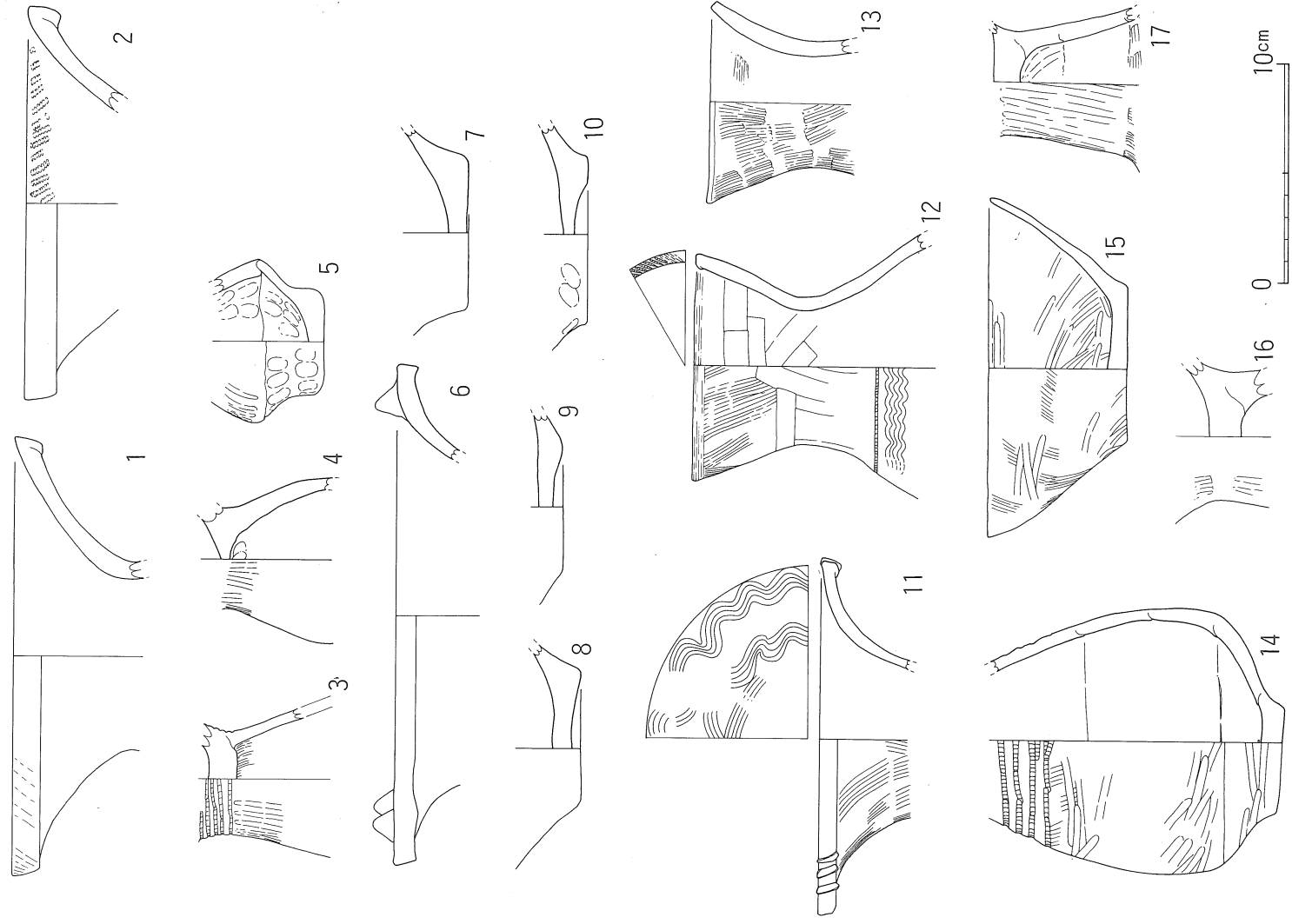
第18図9などの口唇部に面をつくらず、口縁の折曲も緩やかなものがあげられよう。

高 坏

折り返し口縁が主体となり、第17図17の羽状刺突文が施される脚部が見られる。

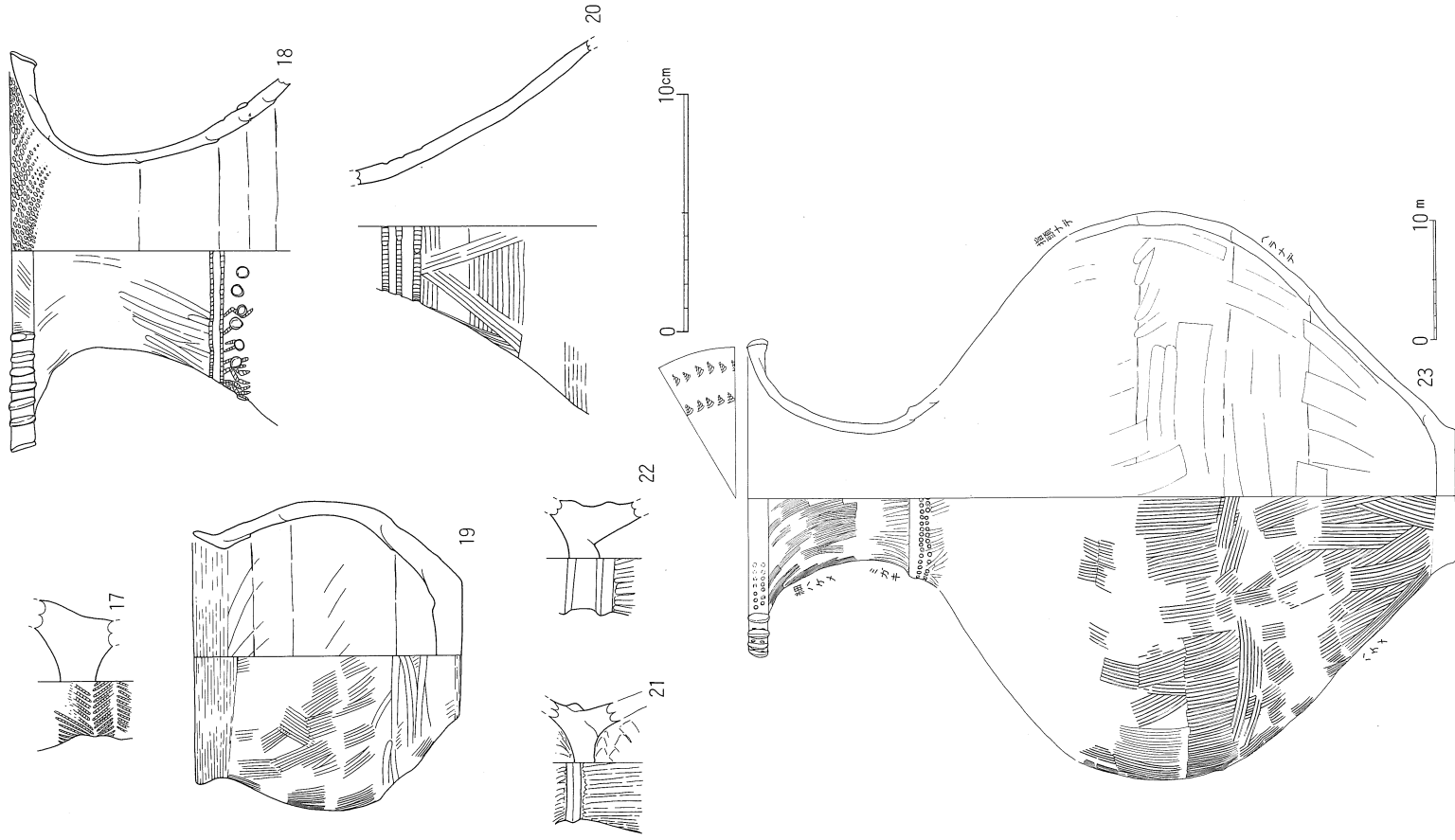
小 結

以上のように4期に分別しえた。従来型式にあてはめると、中期中葉嶺田式、同後葉白岩式後期前葉二ノ宮式、同後葉については菊川式とされた範疇に含まれるものと考えられる。今回報告した資料では、従来型式における器種組成の内容、細別段階の検討等についてはできないが、大略の傾向についての提示はなしえたと思われる。



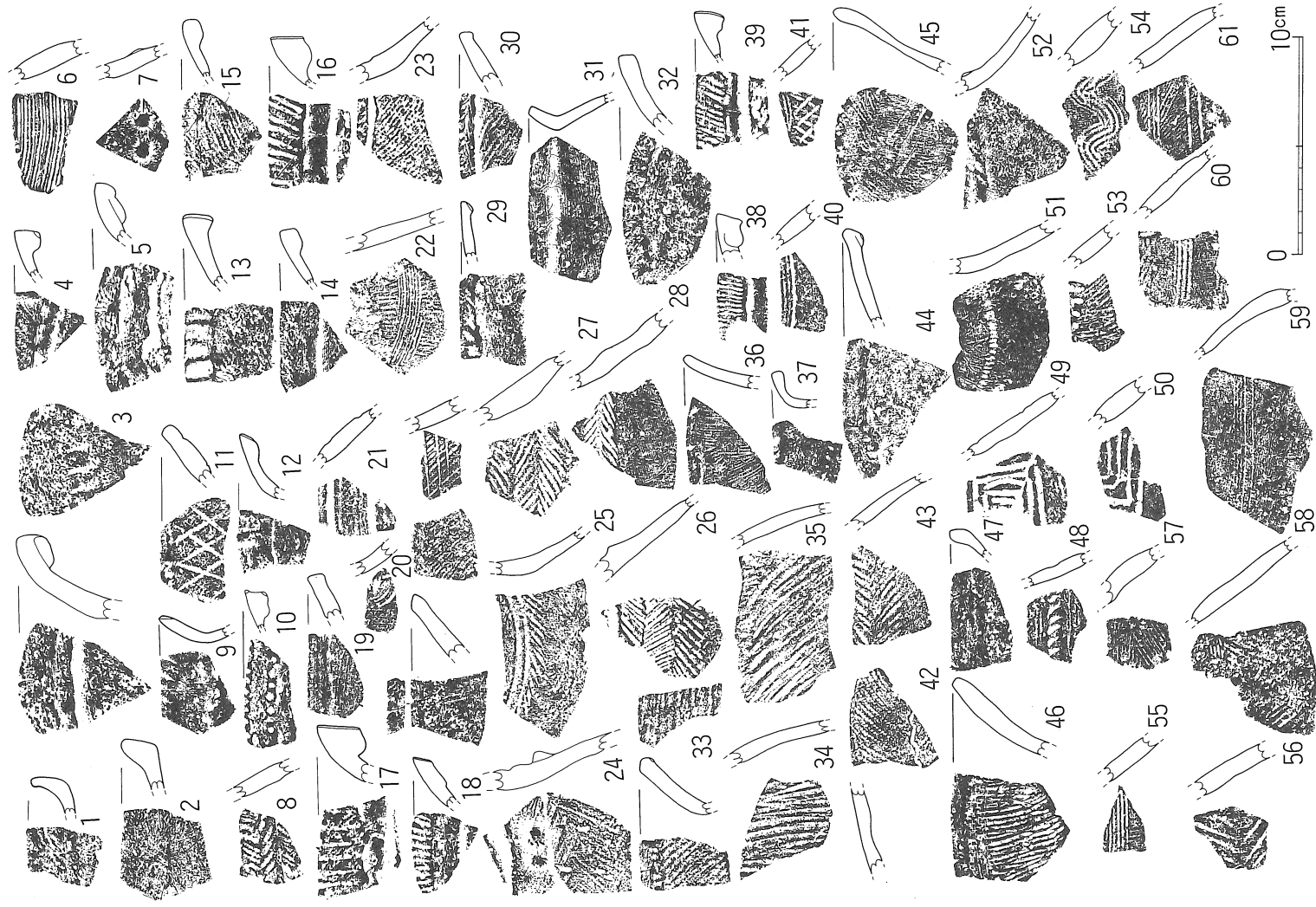
第16图 SB1、SI1、SK1出土土器实测图

(SB1・1~5、SI1・6~10、SK1・11~16)



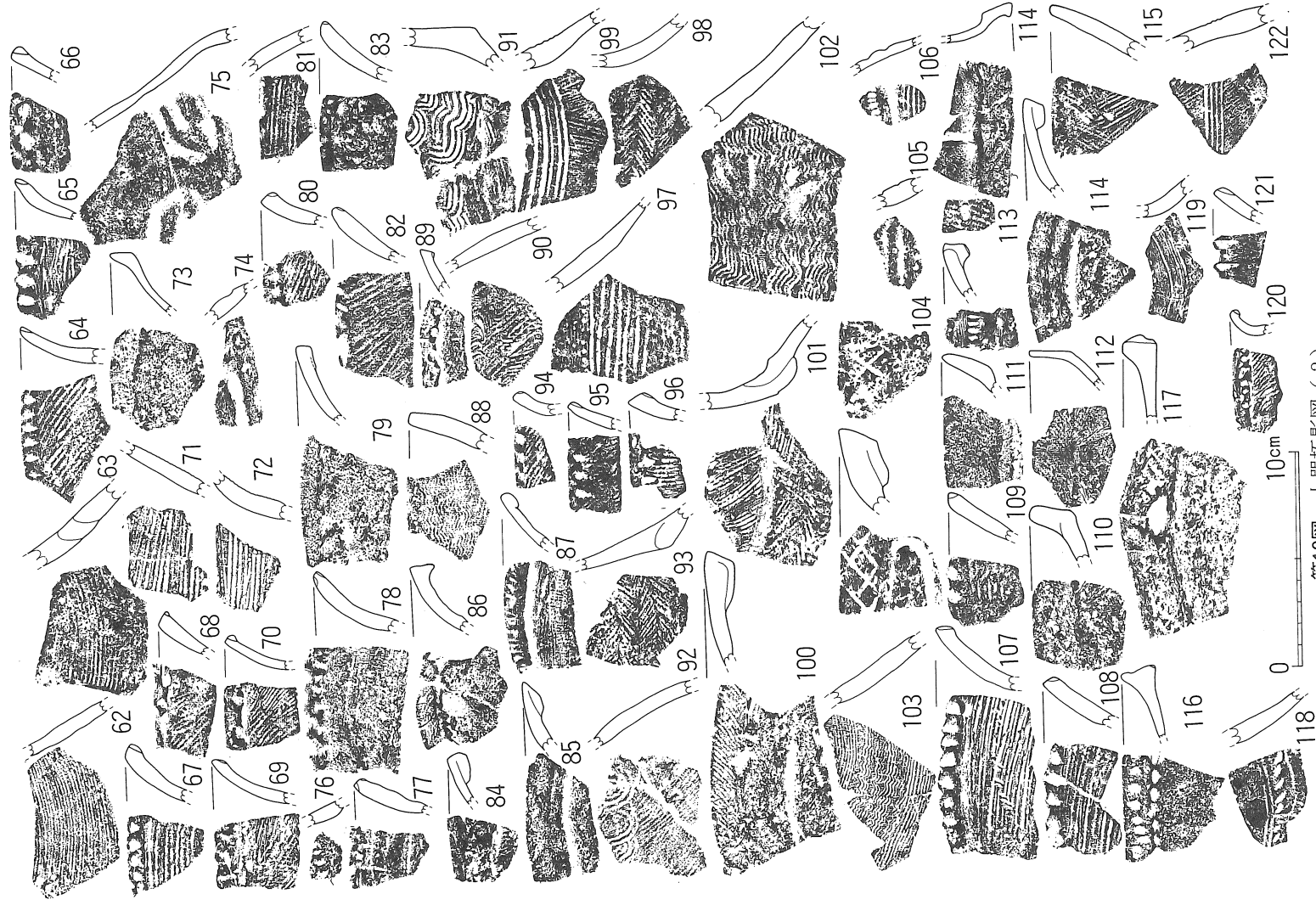
第17図 土器拓影図(1)

(SB 1・1~8、SB 2・9~35、SB 3・36~39、SB 4・40~43、S I 1・44~61)



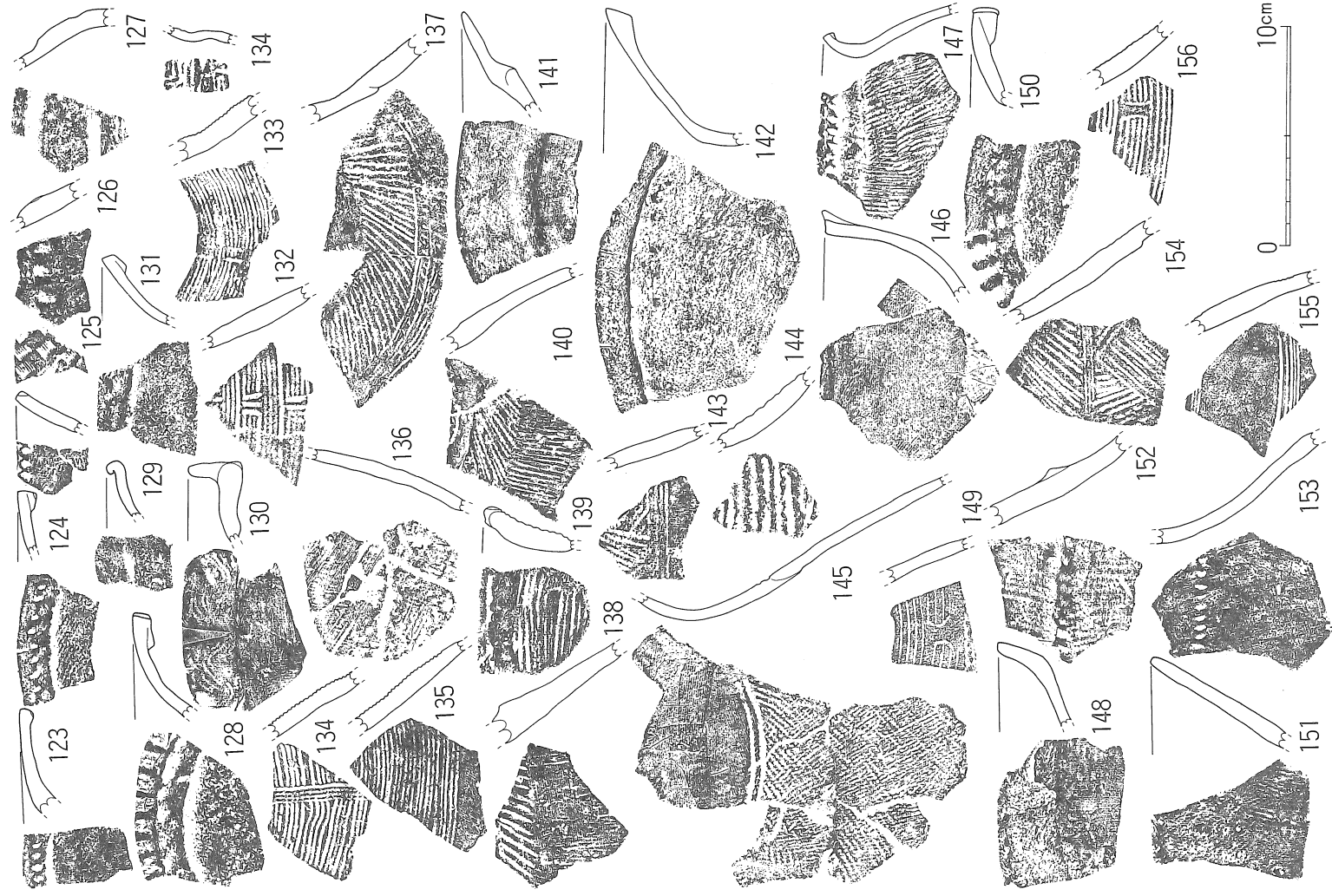
第18图 SK 5、SK 9、小穴出土土器实测图

(SK 5・7、SK 9・18、23、P100・19、P157・20、4 T西端21、5 T西端22)



第19图 土器拓影图(2)

(S I 1 • 62~73, S I 2 • 74~76, S I 3 • 77~78, S I 4 • 79~80, S X 1 • 81~83, S K 1 • 84~96, S K 3 • 97~98, S K 5 • 99~101, S K 8 • 102, S K 12 • 104, S K 10 • 105, S K 15 • 106, S K 13 • 107~108, S D 3 • 109~111, S D 4 • 112, P 109 • 4, P 63 • 114, P 109 • 116, P 27 • 117, P 102 • 118, P 100 • 119, P 10 • 120, P 53 • 121, P 92 • 122)



第20図 土器拓影図(3)

(P100・123、表採124～127、150～156、確認トレンチ1 T128～129、2 T130～137、3 T138～141、4 T142～143、5 T144～147、6 T148)

iii) 古墳～近世初頭の遺物 (第21図)

明確に遺構を確認しえたのは13世紀代のみで、他は近世末～近代等の遺構よりの混在遺物であるが、本遺跡における当該時期の生活痕跡は読みとれる。

古墳時代前葉

第27図17に図示した1点がある。複合口縁の壺形土器と思われる。

奈良～平安時代

奈良時代の遺物は、1～3の坏、坏蓋がある。奈良の後葉期を主体とする。

4、5は平安時代灰釉陶器である。4は淡緑色の灰釉が施された段皿、5は三日月高台に近い高台をもつ漬けがけ施釉のもので、4は尾張産の黒笹14号窯期、5は遠江産の折戸53号窯期古様併行と思われる。

15の須恵器は壺または甕の口縁で奈良期のものと思われる。

中世

山茶碗、小皿、おろし小皿の13世紀代のもものと、15世紀代の常滑焼大甕の2期に大別される。

山茶碗はいずれも底部のみで、全形をしりえるものはない。16のようなやや高い高台をもつものもあるが、大部分は7、10、14、17などのつぶれた高台で、13世紀代の渥美、湖西産の山茶碗と思われる。6の山茶碗は三角形に近い高台と暗灰色の須恵器質の焼成をもった山茶碗である。これは、菊川町皿山古窯、榛原町土器谷古窯、金谷町釜ヶ谷古窯などで確認されている東遠江系中世窯製品と思われる。この東遠江系中世陶器については、編年的にも不明な点が多いが、6の製品などは13世紀におさまるとみてよいだろう。

9の小皿は口径8.2cm、高さ1.7cmで器高が減少したものである点、13世紀前半の渥美、湖西産と思われる。8のおろし小皿は、白色の緻密な胎土を呈し異質なものである。器高も高くやや内彎しながら口縁が立ち上ることから、12世紀末～13世紀前半美濃産のものと思われる。

11は常滑焼甕の口縁で、口縁部の形態からは15世紀代のもものとされている。

18は外面縄目タタキ、内面ナデの平瓦、19は内面布目痕を残す丸瓦で色調は灰白色～明灰色を呈することなどから、平安時代のもとも考えられるが中世まで含めて考えておきたい。

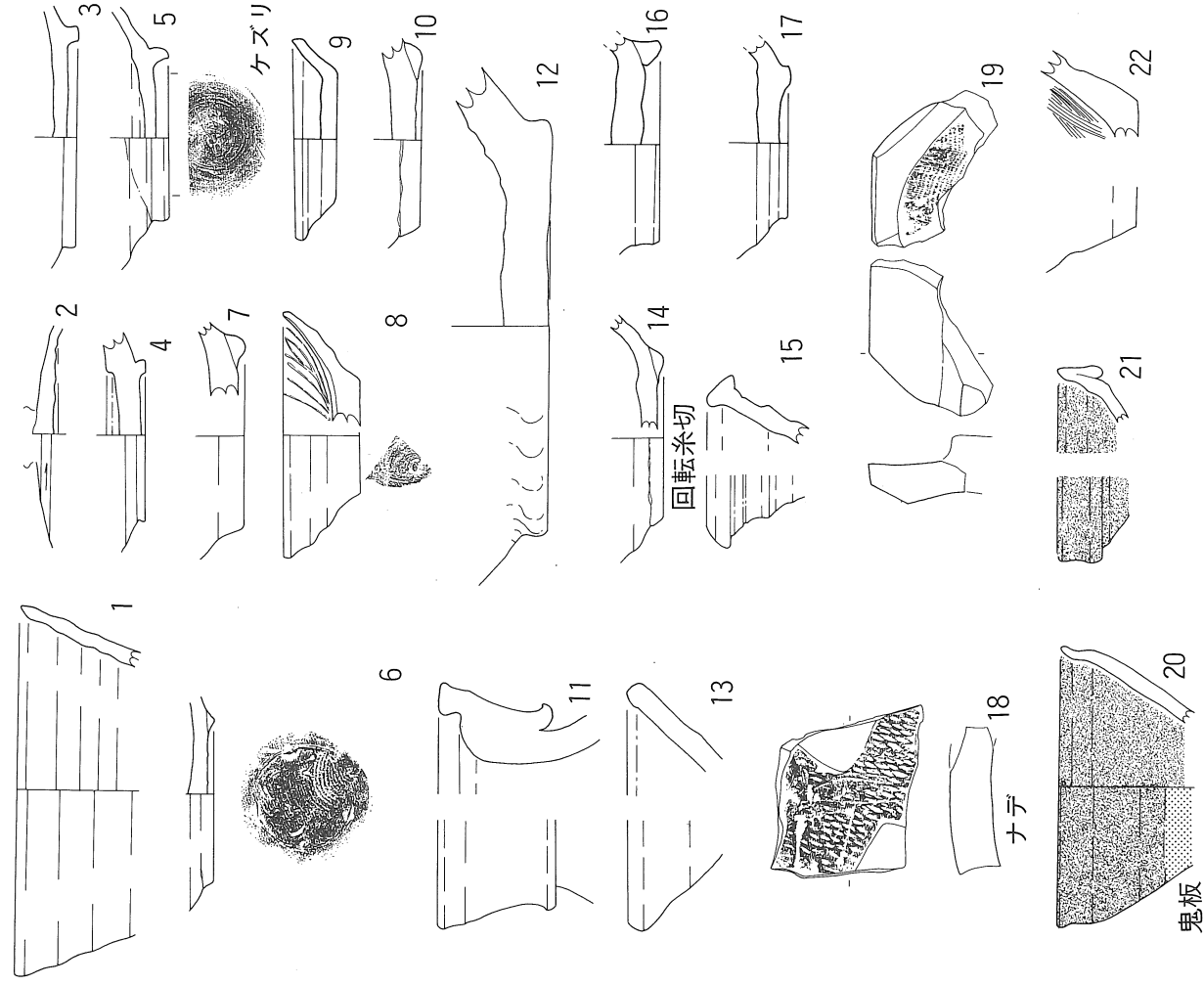
近世初頭の遺物

天目茶碗とスリ鉢があり、いずれも大窯期に属すると思われる。

20は口径11.5cm、高さ6cm以上を測る器高の高い天目茶碗で、体部下露胎部には鬼板が施されている。大窯Ⅰ～Ⅱ期が考えられる。21、22は、暗紫色の発色をする鉄釉の施されたスリ鉢で、21の口縁部形態などは大窯Ⅱ～Ⅲ期あたりに多いものである。

小 結

古墳時代～近世初頭期の遺物は、4世紀代、8世紀代、10世紀代、13世紀代、15世紀代、16世紀代のものが確認され、古墳時代中期、平安時代前葉期、南北朝時代の資料は見ることできなかったが、おおむね全期間にわたって人々の生活痕があったとみて大過なからう。量的に



第21図 奈良時代～近世初頭期の遺物実測図

(SK 2・18、SK 5・1・3・9・12・19・20、SK 7・7・8・11、SK 8・4・21、SK 12・22、SK 15・9、SD 11・6・10、SB 5・14、P 213・13、P 159・15、表採 2・16・17)

は全般的に少ないながらも、遺構の確認しえた13世紀代のものやや集中する。

なお、1次調査では、弥生土器の中期中葉、後期後葉のほかには古墳時代前期、奈良末平安初頭期の遺物の報告がある。このことは、古墳時代前期や奈良末の時期にさらに南方に遺跡の広がりがわかるばかりでなく、他の時期の遺物もさらに広範に分布するものと推察しうる。

iv) 近世末～近代の遺物（第22図、第23図）

溝状遺構、土拡から出土しており、とくにSK 5、SK 8、SK 12、SD 7から比較まとまった陶磁器、土師質土器が出土している。

陶磁器

瀬戸、美濃産、肥前産、在地産のものが見られた。器種も碗、皿、鉢、香炉、瓶類、仏飼器などがある。

碗

1はいわゆる瀬戸美濃産の鎧茶碗で、口縁外面、内面全体に縁釉が施されている。刺突文は荒く器壁も厚い作りの素雑なものであることから、鎧茶碗の中でも後出なものと考えられ19世紀前葉期のものと考えられる。19、27は呉須釉、筆絵による陶器の丸碗で18世紀代の瀬戸美濃産、17、18、25の呉須釉、筆絵による筒形茶碗は、磁器で器壁も薄手に作られている17、25が肥前産磁器、18は瀬戸美濃産の半陶半磁質茶碗である。17、25は18世紀後葉、18は19世紀前葉のものと思われる。28は外面青磁の筒形碗で、見込にコンニャク判と思われる五弁花文が施されている。18世紀後葉の肥前産磁器である。2はいわゆる「御深井釉」の施された鉢形碗（向付？）で、18世紀代瀬戸美濃産である。26は白磁のぐい呑碗で、縦位の沈線文が数本単位で施され、その間に呉須釉にて寿などの文字がくずれたような文様が施されている。肥前産磁器で17世紀代に多い器種であるが文様は後出的であるいは18世紀に降る可能性もある。

ほかに、4、24の幕末～明治期に降る製品も見られる。4はやや外反する口縁の飯茶碗で、コバルト釉系、筆絵による施文がされ19世紀中～後葉の瀬戸美濃産磁器である。24は、コバルト釉、筆絵によるぐい呑小碗で、瀬戸美濃産19世紀後半～20世紀のものと思われる。

少量ではあるが、胎土が茶褐色を呈する在地産の志戸呂焼と思われる鉄釉茶碗が見られる。

5は鉄釉丸碗と思われ、共伴資料から18世紀～19世紀前葉のものと思われる。

皿

3はいわゆる石皿といわれる大形の陶器皿で、19世紀前葉瀬戸洞系と称されるものである。13、20、21は口径10～12cmの黒鉄釉の施された小皿で、あるいは灯明皿の一種かもしれない。全形を知りうるものは21で、時計回りのへう割り高台をなし、内彎した口縁をもつ。13なども同形になると思われる。20は口縁をつまみ出すように外反させるもので、おそらく21と同様な削り出し高台をもつと思われる。18世紀～19世紀前葉志戸呂焼である。

火 鉢

内彎した口縁で鉄釉の施されたもので、19世紀代の瀬戸美濃産である。

瓶

6、19の小形の陶器質のものと、9の青磁がある。6は灰白系釉、29は御深井釉が施され、6は19世紀の瀬戸美濃産、18は18世紀の瀬戸美濃産、9は19世紀代の肥前系青磁である。

仏飼器

7は御深井釉が施された18世紀～19世紀前葉の瀬戸美濃産、8は18世紀後半～19世紀前葉の肥前産磁器と思われる。

香 炉

鉄釉系の31と御深井釉系の33がある。鉄釉系のものは32、35のような削り出し高台をなすものと思われる。31、32、35は志戸呂焼、33は瀬戸美濃産で、18世紀～19世紀前葉までのものと思われる。

その他陶器

15は鉄絵の施された急須口縁と思われ、19世紀前葉瀬戸美濃産、16はやはり瀬戸美濃産の御深井釉の施されたエサ入れ小鉢である。12は口縁が鐔状をなす茶系鉄釉の施されるスリ鉢で、志戸呂焼である。14は暗茶色系の光沢のある発色を示す鉄釉の施された、太頸の花瓶のようなものと思われる。胎土の色調は志戸呂焼よりやや灰色味がかかり、鉄釉の発色は大須賀町水ヶ谷焼に類似する。

土師質土器

10、34は内耳鍋、23の把手付鍋？などの煮沸器のほか、11、12のかわらけが見られる。内耳鍋は小破片のため全形を知りえないが、口縁を直線的に開く鉢形を呈するものと思われ、いわゆる「ほうろく」とは形態を異にする。

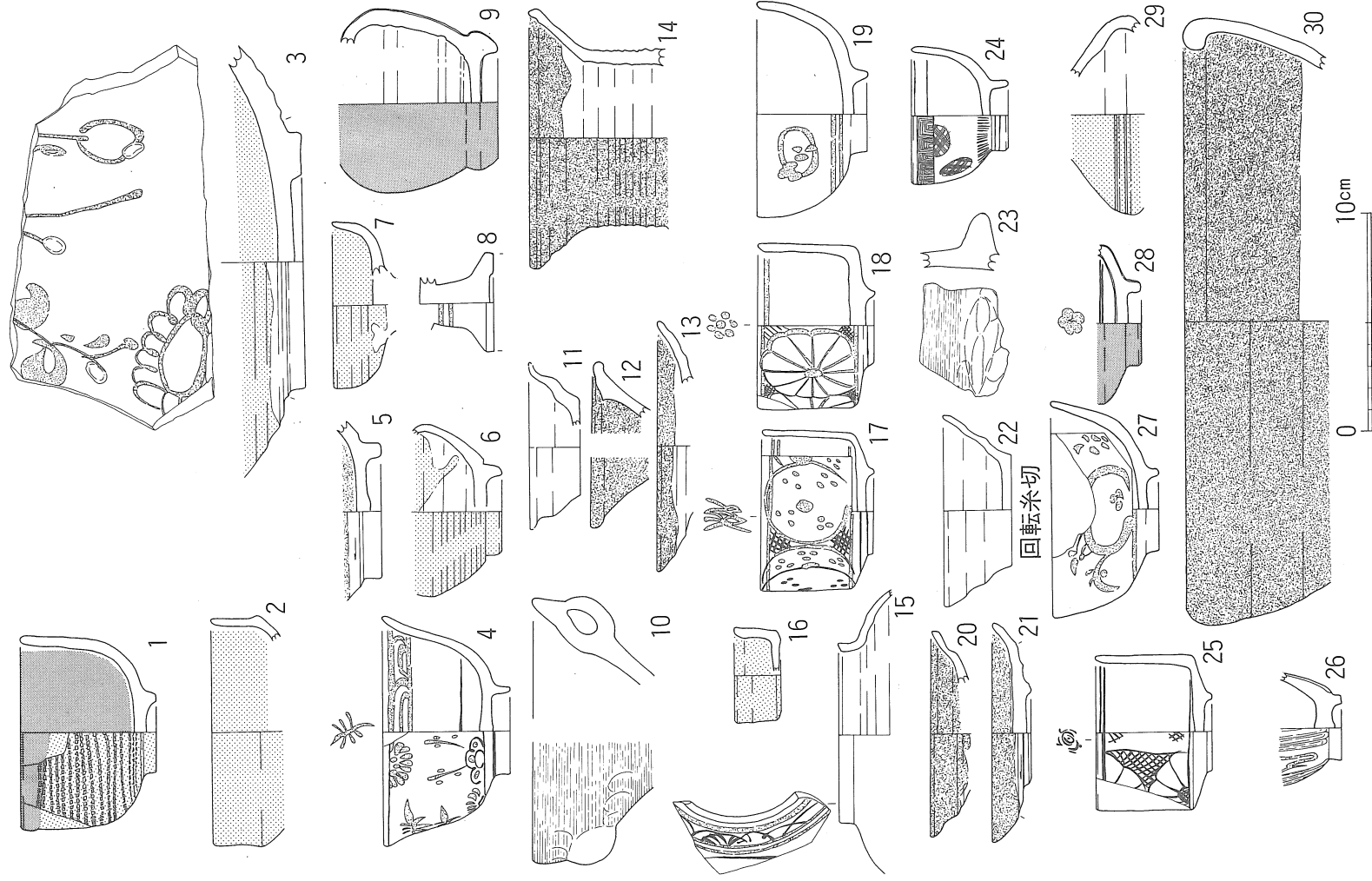
かわらけは、回転糸切を残すもので、底径が大きく深めの22と、口縁が大きく外反し浅めで口径の小さい11がある。11はさらに硬質で22より新出の要素が見られるが、いずれも18世紀～19世紀前葉期に属すると思われる。

小 結

S K 2 出土資料はいずれも18世紀後半～19世紀前葉、S K 5 は7の仏飼器、5の志戸呂焼丸碗について問題を残すが、19世紀前～後葉期の製品が主体である。S K 8 は在地産製品が多く時期決定が難しいが、15の瀬戸美濃陶器からは、18世紀代には廻りえないと思われる。S K 12 については、瀬戸美濃産、肥前産ともに18世紀後葉～末に中心をおくと考えられるが、18のよな瀬戸美濃産半陶半磁質の製品の成立時期が問題となろう。S D 7 については、26の肥前系磁器が17世紀代に廻りうること、30の火鉢が19世紀代に降るものを含むが、おおむね18世紀代を中心としよう。

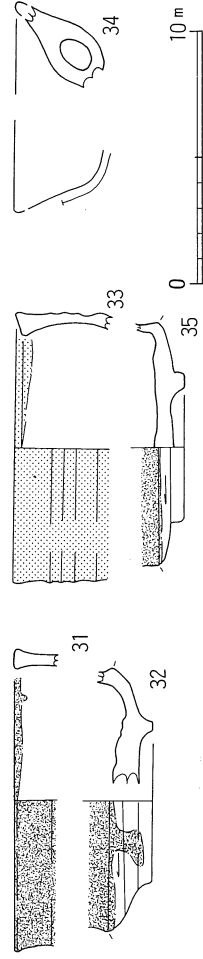
以上のように、近世末～近代の資料については、18世紀代を中心とするS K 12、S D 7、幕末前後のS K 2、幕末以降のS K 5 出土資料に分別できそうであるが、それぞれ重複するものも若干含むため検討を要する。また出土遺物は、日常雑器がほとんどで使用限界や伝世率は比較的短かったと思われる、これらの時間幅はむしろ遺構の性格によるものと考えたい。

陶磁器類の生産地別出土量は、圧倒的に瀬戸美濃産が多く、次いで肥前産磁器と少量の在地産陶器がある。在地産の志戸呂焼、水ヶ谷焼については後章で触れてみたい。

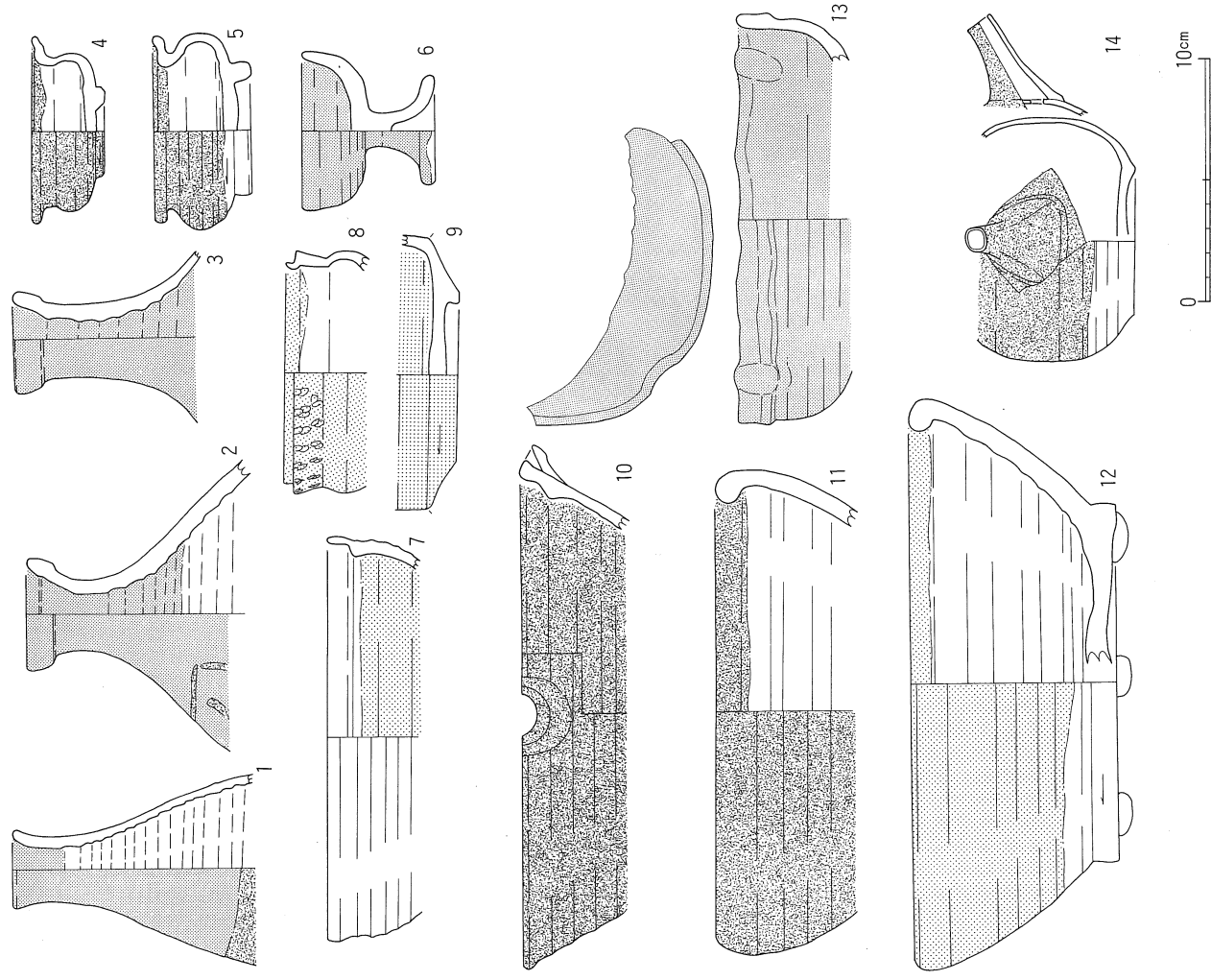


第22図 近世末～近代の遺物 (1)

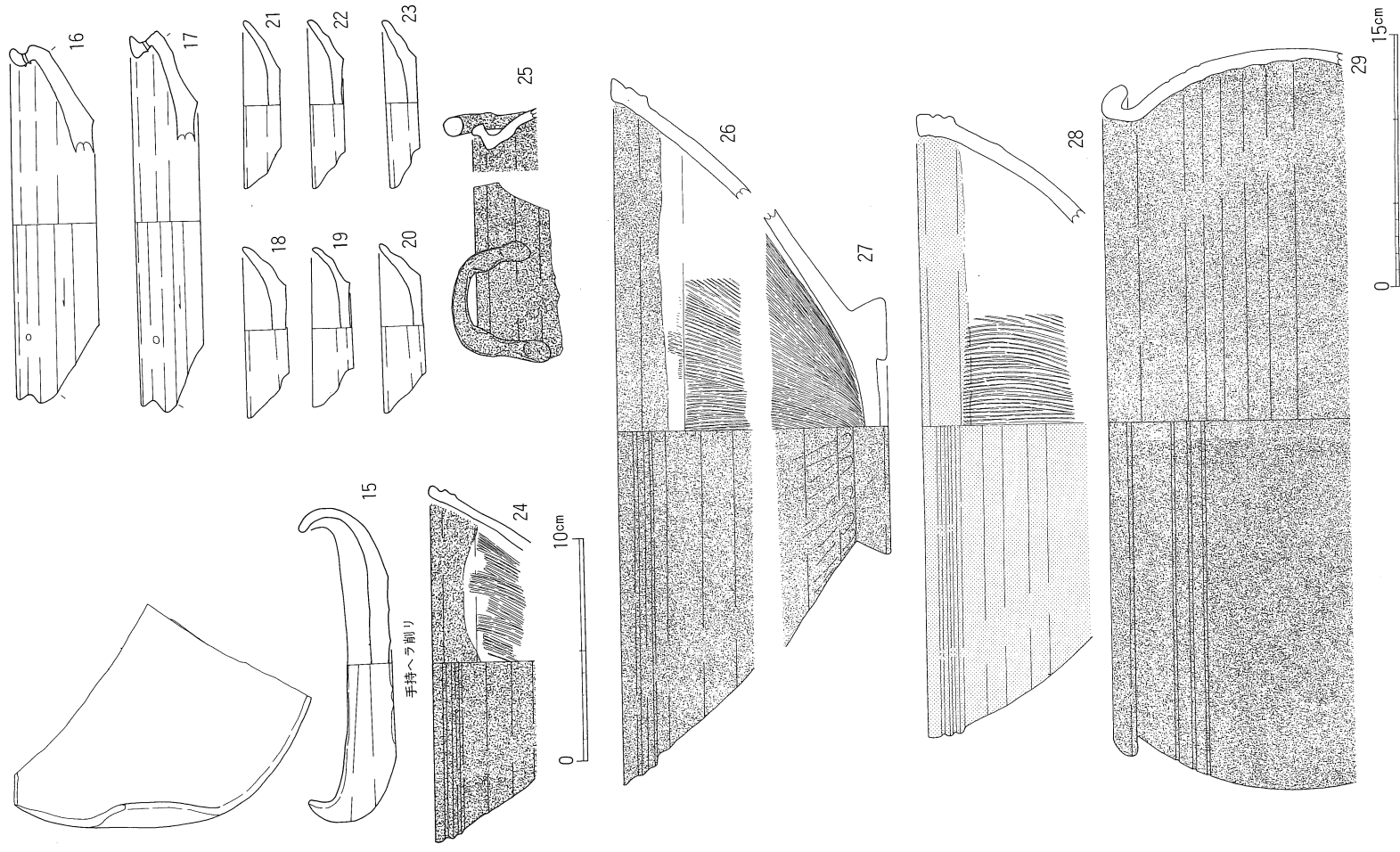
(SD 9・1、SK 2・23、SK 5・4～11、SK 8・12～15、SK 12・16～23、SK 14・24、SD 7・25～30)



第23図 近世末～近代の遺物実測図（2）
（SD 9・31～32、SD 11・33～34 表採35）



第24図 水ヶ谷窯出土遺物実測図（1）



第25図 水ヶ谷窯出土遺物実測図(2)

第3章 考察

第1節 弥生時代から古墳時代前期の掘立柱建物について

i) はじめに

静岡県内での掘立柱建物については、戦後間もない頃調査が開始された登呂遺跡にて高床倉庫が確認され、弥生時代において稲倉と思われる掘立柱建物が注目された。以後、西日本を中心として弥生時代の掘立柱建物の報告例が、少ないながらも増加してきている。東海地方でも愛知県下の勝川遺跡、朝日遺跡などで掘立柱建物が確認されてきている。

今回報告することのできた、大門遺跡での掘立柱建物は掘り方内出土遺物で見えるかぎり弥生時代後期後半とされようが、静岡県内でこのような掘立柱建物がはたして弥生時代に存在する可能性があるのか、県内掘立柱建物の特徴を分析することにより検討してみたい。

ii) 平面プランの基本形式

県内にて確認された弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物をあげてみよう。

弥生時代中期

- ①掛川市原川遺跡 前葉（丸子式期）1間×1間掘立柱建物（以下1×1間と記述）1棟、
1×2間2棟 1×3間4棟

弥生時代後期

- ①沼津市八兵衛洞遺跡 1×1間1棟 1×2間1棟（文2）
②沼津市伴名田遺跡 1×2間1棟（文3）
③富士宮市月の輪上遺跡 1×2間3棟（文8）
④静岡市登呂遺跡 1×1間2棟 1×3間2棟（文9）
⑤静岡市汐入遺跡 1×1間3棟 1×2間3棟 1×3間1棟
⑥藤枝市稻ヶ谷遺跡 1×1間1棟 1×2間1棟 2×2間1棟（文10）
⑦藤枝市萩ヶ谷遺跡 1×1間1棟 1×2間2棟 2×2間2棟（文10）
⑧掛川市女高遺跡 1×2間3棟（文11）
⑨浜松市国鉄工場内遺跡 1×3間6棟（文23）

古墳時代前期

- ①沼津市藤井原遺跡 1×1間3棟 1×2間3棟 1×3間1棟 2×3間1棟
2×2間（総柱）1棟（文4）
②沼津市目黒身遺跡 1×2間1棟（文3）
③沼津市御幸町遺跡 3×3間1棟（文5）
④富士宮市月の輪平遺跡 1×1間2棟（文7）
⑤富士市天間沢遺跡 1×1間1棟（文6）
⑥静岡市小黒遺跡 1×1間 1×3間2棟
⑦静岡市宮川遺跡 1×4間1棟？

⑧焼津市小深田遺跡	1 × 1 間15棟	1 × 2 間2棟	(文12)
⑨焼津市小深田西遺跡	1 × 1 間2棟	1 × 2 間3棟	(文13)
⑩袋井市土橋遺跡	1 × 2 間2棟		
⑪浜松市小平遺跡	1 × 1 間1棟	1 × 3 間1棟	2 × 2 間 (総柱) 1棟 2 × 3 間 (総柱) 1棟 (文22)

以上、弥生時代10遺跡、古墳時代前期11遺跡を数える。(本遺跡はのぞく)

第27図の1に示したとおり弥生時代後期のものは、1間×2間掘立を中心とし(41%)、1間×3間掘立(26%)、つづいて1間×1間掘立(24%)が見られる。古墳時代前期では、1間×1間掘立(50%)が基本で、つづいて1間×2間掘立(25%)、1間×3間掘立(10%)となる。このように、弥生時代後期では1間×2間掘立を中心とするのに対して、古墳時代前期については1間×1間掘立が中心となり1間×3間建物は少ない^{*}。しかし、両時期とも梁行1間で桁行1間～3間の掘立柱建物が主流で、その他の形式の建物は両時期あわせても8棟しか報告されていない。このように、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての県内掘立柱建物の基本形式は梁行1間、桁行1～3間なす点について言えば、画期は見出せない。しかし、細別型式、建物規模のうえではどうか検討してみよう。

iii) 1間×1間掘立柱建物の検討

まず、第26図1、2に示したとおり、各時期別に代表的なデータのえられた登呂遺跡(弥生時代後期)、小深田遺跡(古墳時代前期)について検討してみた。

登呂遺跡では1軒の桁行、梁行内面積(竪穴住居の全体の床面積でない)が9㎡以上になる大型住居1棟と、それ以下になる住居群に分かれ、1間×1間掘立は後者の規模内におさまる。小深田遺跡での住居群は、9㎡を境にして2グループに分かれる傾向が見られ、1間×1間掘立も2グループに分かれるが、9㎡以下のグループは少ない。

さて県内全体の1間×1間掘立の規模を見てみると、第26図の3に示したとおり、弥生時代後期には大型のものは見出せない。また、第26図10に示した面積対比グラフを見ると、弥生時代後期では6㎡前後に集中するが、古墳時代前期では4㎡以下のものと、8～10㎡に集中するものがありバラツキ傾向を示したり、10㎡以上の大型のものも出現する。

設計規格画の上では、梁行1に対して桁行は1～1.5の比率をなすものがほとんどで、正方形や若干長方形をなすものが見られる程度で、明瞭な型式差は見出せなかった。

以上1間×1間掘立についてまとめてみると、①弥生時代後期は大型のものはないが、古墳時代前期になると大型化する傾向がある点、②古墳時代前期では4㎡以下の小型のものが多く見られるようになり、建物規模にバラツキが生じている。

^{*}) 焼津市小深田遺跡では、1間×1間掘立の検出例としては15棟と多く、県内古墳時代前期1間×1間掘立の半分以上を検出しているため、基本形式の傾向を大きく左右している遺跡である。今後他の同様の例が確認される必要を感じるが、一定の傾向は示していると思う。

iv) 1間×2間、1間×3間掘立柱建物の型式分類

第27図に示したとおり、規模や梁行と桁行比率のうえでいくつかの型式差を見ることができた。以下型式基準を列記する^{*}。

A型式 梁行1に対し桁行1～1.4の比率になるもの。平面積 20m^2 以下のものをA—1型式、 20m^2 以上のものをA—2型式とした。平面形は正方形に近いもの。

B型式 梁行1に対し桁行1.5～1.8の比率になるもの。平面積 20m^2 以下のものをB—1型式、 20m^2 以上のものをB—2型式とした。平面形はやや長方形になるもの。

C型式 梁行1に対し桁行1.9～3.0ぐらいの比率のもの。平面積 20m^2 以下のものをC—1型式、 20m^2 以上のものC—2型式とした。平面形は細長い長方形になるもの。

1間×2間掘立は、第26図7に示したとおりA—1、B—2、B—1、B—2、C—1型式がある。弥生時代では1間×2間掘立A—1型式は80%でもっとも多く、古墳時代前期においても50%あり両時期通じて1間×2間掘立の主流型式とみてよいだろう。また大型掘立に属するA—2型式の掘立は、古墳時代前期になり出現している。B—1型式は今のところ1例しか報告されていないが、古墳時代前期に大型掘立のB—2型式や掛川市原川遺跡（弥生時代中期前葉）でも認められているため型式設定可能であろう。C—1型式も1例のみでない。

以上の点から、1間×2間の掘立柱建物の型式的流れをまとめるとA—1型式が弥生後期～古墳時代前期の主流型式であるが、古墳時代前期になると大型掘立のA—2型式、B—2型式が出現する点、また弥生時代後期ではB—1型式、C—1型式などの建物少数みられる。また平面積については、第26図10を見ると1間×2間掘立は、 20m^2 以下の1系建物（中小型）は弥生時代後期においては $12\sim14\text{m}^2$ に中心をおいているが古墳時代前期では $16\sim18\text{m}^2$ 中心になり建物が大形化するとともに面積のバラツキ現象が見られる。これは、1間×1間掘立の面積傾向と一致し注目される。

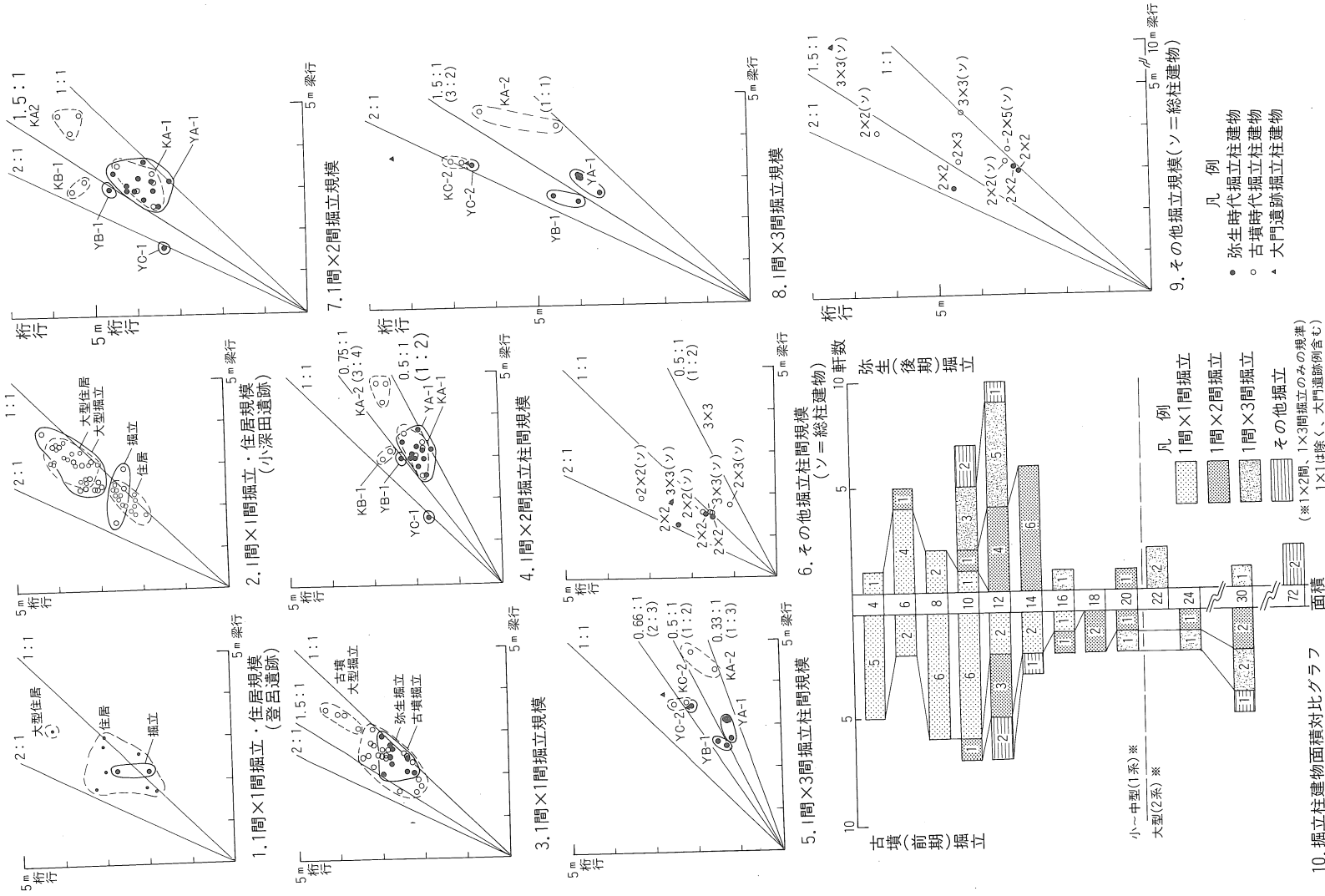
1間×3間掘立は、第26図8に示したとおり、A—1、A—2、B—1、C—2型式からなる。弥生時代後期では、A—1型式が60%の主流型式で、B—1型式30%、C—2型式10%とつづく。古墳時代前期ではA—2型式、C—2型式のみが知られ、B型式掘立は未確認である。平面積規模は、古墳時代前期には大形化する傾向が1間×2間掘立同様確認された。

以上のような型式分類を行ってみると1つの問題点が注目される。それは、梁行と桁行比率のまとまりが、1間×2間掘立と1間×3間掘立との間で間口数が異なっているが一致し型式内容が共通することである。

この点については柱穴間寸法の比率を見ながら考えてみたい。1間×2間掘立A型式は1：

*) アルファベットは設計規格、数字は平面積 20m^2 以上のものを2系建物（大型掘立）、以下のものを1系建物（中小掘立）とし型式名を与えた。また図中には、型式名の冠に弥生時代にはY、古墳時代にはKの記号を付した。

**) 原川遺跡では1間×1間掘立（小形）、1間×2間掘立A—1型式1棟、同B—1型式2棟、1間×3間掘立柱建A—1型式1棟、同B—1型式2棟、同C—1型式1棟がある。掘立柱建物のみから構成される集落で、後述する勝川遺跡、百間川今谷遺跡の対比が注目される遺跡である。



第26図 弥生(後期)～古墳時代(前期)の掘立柱建物分析図(1)

0.5～0.7（梁間：桁間以下同じ）、同B型式1：0.75～0.95、同C型式1：1～1.5の比率、1間×3間掘立A型式は1：0.33～0.46、同B型式1：0.5～0.63、同C型式1：0.6～1.5の比率になる。比率でほぼ重なり合うものは1間×2間掘立A型式と1間×3間掘立B型式である。さらに第26図4、5に示したとおり規模を含めて考えると、現状の型式設定しえた組み合せだと1間×2間掘立A—1型式と1間×3間掘立B—1型式に認められるだけである。この組み合せから考えられることは、この建物相互は梁行に対し桁行柱穴間の寸法比が同一の規模でなされていたことを意味しよう。また、この組み合せは今のところ同一遺跡内では浜松市国鉄工場内遺跡1例にかぎられ例は少ないといえる。

以上のように、1間×2間掘立と1間×3間掘立の設計規格は互いに密接に関連し合い、おそらく梁行方向ないし桁行方向寸法を基準にて全体のプランを設定し、桁行2間の建物か3間の建物を設計していたと考えられる。しかし、国鉄工場内遺跡を見ると柱穴間の寸法を参考にして規格をした可能性もある例もあるが、現状では数少ない。

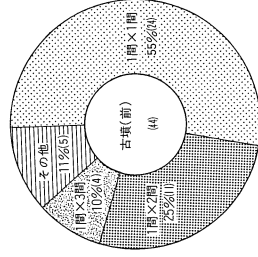
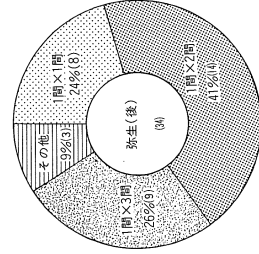
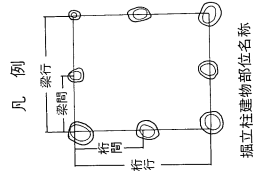
v) その他の掘立柱建物についての検討

第26図9に示したとおり、梁行1間を基本する掘立柱建物以外のものは8例（大門遺跡のはぞく）だけである。その内訳は弥生時代では2間×2間掘立3棟、古墳時代前期では2間×2間の総柱掘立2棟、2間×3間掘立1棟、3間×2間の総柱掘立1棟、3間×3間の掘立1棟が確認できた。

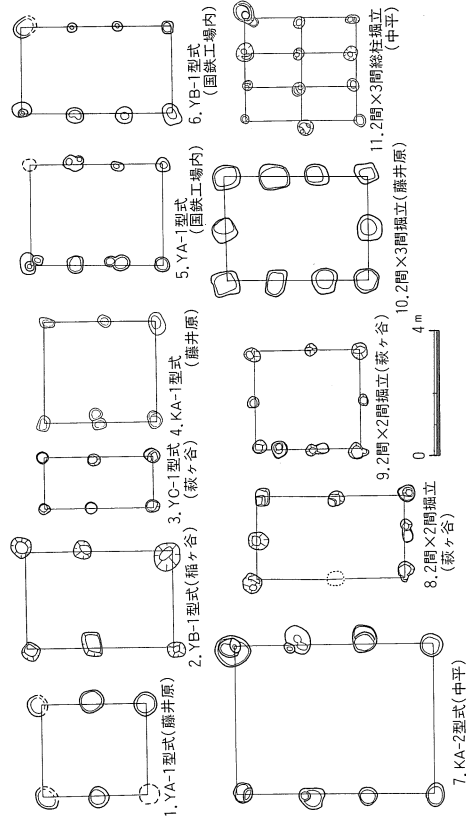
弥生時代の2間×2間掘立については、藤枝市萩ヶ谷遺跡（第27図2—8、9）同稲ヶ谷遺跡で確認されてある。この掘立柱建物については、藤枝市域の丘陵上での遺跡に分布に限られている。建物構造としては、岡山県土井遺跡（文27）や唐古遺跡出土土器に描かれた高床倉庫に見られる棟持柱を梁行にもつ高床倉庫と思われる。この梁行方向の中柱を棟持柱とすると、型的的には萩ヶ谷遺跡、稲ヶ谷遺跡の例は1間×2間掘立A—1型式と同B—1型式の棟持柱付建物といえ、1間×2間掘立の設計規格上に位置づけられる。（第26図—9）また、この棟持柱付掘立柱建物は、土井遺跡例のように梁行方向壁面より外方に棟持柱を配置するもの（Aタイプ）と萩ヶ谷遺跡例のように壁面に接するように配置するもの（Bタイプ）がある。

総柱の掘立柱建物は、浜松市小平遺跡など古墳時代前期に3棟みられる。しかし、沼津市藤井原Ⅱ号棟掘立については東列の柱のならばが悪く1間×2間掘立A—1型になる可能性が、また小平遺跡の2間×2間の掘立についても全体的に柱のならばが悪く中世掘立柱建物の可能性も指摘でき、確実な総柱例としては小平遺跡2間×3間掘立だけである。第27図2—11に示した小平遺跡2間×3間掘立は、小さな柱穴からなる掘立柱建物で規模、平面積ともあまり大きなものとはいえない。

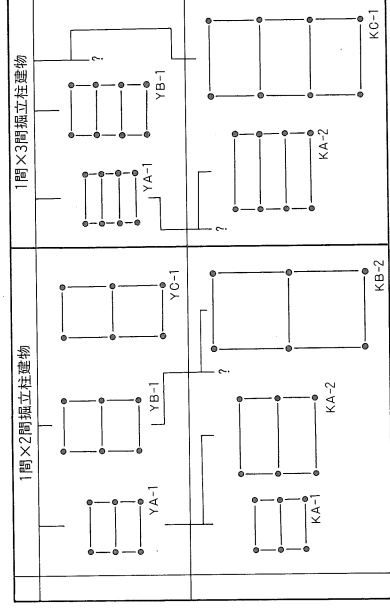
総柱建物の出現のほかに、2間×3間、3間×3間の柱間数の多い掘立柱建物が古墳時代前期に登場する。2間×3間掘立は藤井原遺跡で確認された。第27図2—10に示したとおり、この建物は弥生時代の棟持柱付建物とは異なり梁行方向中柱は、桁行方向側柱、支柱と同じ柱穴規模をもち柱の配置も梁行方向軸上にはば重なる。また、沼津市御幸町遺跡で確認された3間×3間掘立は第26図9に示したとおり、正方形に近いプランで平面積は19㎡を測る建物であ



1. 掘立柱建物時代別形態分類円グラフ(カコ内軒数大門遠跡は除外)



2. 掘立柱建物型式別集成図



時代	形式	1間×2間掘立柱建物		1間×3間掘立柱建物	
		A-1	A-2	B-1	B-2
弥生時代後期	割合	80%	10%	10%	30%
	数	(7)	(1)	(1)	(3)
古墳時代前期	割合	50%	30%	20%	50%
	数	(5)	(3)	(2)	(12)

3. 掘立柱建物形式変遷図

第27図 弥生(後期)～古墳時代(前期)の掘立柱建物分析図(2)

る。この2例は、柱穴のつくりも大きく、柱のならばも良く安定的な設計により造られた建物で、従来の弥生時代の掘立柱建物とは異なる。こうした建物は、あるいは上屋構造が入屋構造をなす高床の建物のようなものと推定され、倉庫ではなく特殊な住居と考えたい。

vi) 大門遺跡検出の掘立柱建物の検討

今回報告した大門遺跡の掘立柱建物は、1間×3間掘立2棟、3間×3間掘立2棟である。

1間×3間掘立は、前述してきたC—2型式になり、弥生時代では汐入遺跡に次いで2例目である。(第26図5) 平面積では本遺跡S B 3としたものは34㎡を測り、汐入遺跡の22㎡にくらべるとやや大形である。現状では数少なく検討の余地を残すが、前述したごとく古墳時代前期には安定的に出現しているため、いずれの時期にあてても矛盾はしないだろう。その用途については後述したい。

3間×3間掘立については、御幸町遺跡例があるが本遺跡のような総柱例はない。総柱建物については、すでに古墳時代前期に出現していた可能性を指摘しえたが、本遺跡例のような大型掘立の例はない。(第26図9) 柱穴規模だけみると、静岡市小黒遺跡などで確認される1間×3間掘立C—2型式では直径1m以上もある柱穴で、本遺跡例に見劣りするものではないが、しかし、同規模の柱穴からなる総柱建物は、県内では古墳時代前期以前にはない。

総柱建物の県内での古墳時代前期以降についての状況を見てみよう。県内例で設計規格、規模ともに安定するのは、焼津市宮ノ腰遺跡例以降のことであろう。宮ノ腰遺跡では、2間×3間の総柱建物が知られ、5世紀後半のものと考えられている。(文14) また掛川市原川遺跡、袋井市坂尻遺跡、同掛の上遺跡でも6～7世紀の2間×3間、2間×2間の総柱建物が報告されている。(文31、16、19) このように見てみると、県内例での総柱建物ははやくも古墳時代前期には出現するものの、確立し出現するのは5世紀後半で6～7世紀にはかなりの普及をみたことだろう。これらの建物の多くは竪穴住居群と併存するため高床倉庫とみられ、梁行1間の高床倉庫から総柱の高床倉庫の変革期が5世紀後半～6世紀にあったことを物語っている。

こうした、5世紀後半以降の総柱建物のなかにあって、大門遺跡の建物は県内例の多くが円形の柱穴からなるのに対し、方形の柱穴(掘り方)になること、さらに規模においても通常の集落と思われる県内例よりも規模が大きい点である。この点について県外例をあたってみよう。

県外関係では多くの資料をもち合わせていないが、近年注目された和歌山県鳴滝遺跡例(文32)を検討してみたい。鳴滝遺跡の掘立柱建物は4間×4間総柱の建物で、宮本氏らの見解(文36)によると長方形の掘り方に2本の柱が認められることや、棟持柱等の主柱穴の規模が大きい点などから高床を支える束柱と屋根を支える柱とが別々にもうけられた構造の高床倉庫と考えられた。また、さらに兵庫県松野遺跡例について床を支える束柱が別にもうけられていない型式をもつことから、鳴滝遺跡例より発達段階にあると位置づけられた。このような宮本氏の見解や、県外の総柱大型高床建物群との類似点よりすると、大門遺跡の建物については鳴滝遺跡例(5世紀前半)より新しい型式の建物で5世紀後半以降のものとして位置づけたい。

vii) まとめ

このように、県内における弥生時代～古墳時代前期における掘立柱建物のあり方と設計規格

による型式設定を行い、さらに大門遺跡の掘立柱建物の位置づけを検討してきた。こうした、型式群の掘立柱の偏年的な動向を県外例を若干ふまえたくて検討し、さらにそれらの掘立柱建物のもつ性格と歴史的な位置づけを不十分ながら試み本節のまとめとする。

梁行1間、桁行2～3間掘立について県外例をみてみよう。県外例のなかでとくに愛知県の尾張平野での動向が注目され、朝日遺跡、勝川遺跡でまとまって確認されてきている。朝日遺跡では、9棟の弥生時代中期の掘立柱建物が確認され8棟について全形が知りえた(文30)。その型式内容は1間×2間掘立C—1型式2棟(内棟持柱付Bタイプ1棟)、1間×3間掘立A—1型式2棟、同C—1型式4棟(内棟持柱付Bタイプ2棟)である。勝川遺跡では、中期末葉の掘立柱建物が確認された(文29)。型式内容は1間×1間掘立3棟、1間×2間掘立A—1型式5棟(内棟持柱付Bタイプ3棟)、同B—1型式6棟(内棟持柱付Bタイプ4棟)、同C—1型式1棟、1間×3間掘立B—1型式1棟持柱1棟(棟持柱付Bタイプ)^{*}、同C—1型式2棟(内棟持柱付Bタイプ1棟)、2間×2間掘立1棟である。

以上の型式内容から尾張平野の弥生時代中期の掘立柱建物の型式組成は、1間×2間掘立についてはB—1型式を主流となしA—1型式、C—1型式とつづく。1間×3間掘立では数少ないが、C—1型式、A—1型式が主流でB—1型式がある。また、さらに中期前葉の掘立柱建物群を検出した県内の原川遺跡とくらべると、1間×2間掘立はA—1型式、1間×3間掘立でもA—1型式の占める比率が尾張平野例が高くなっていると思われる。

以上の結果から県内弥生時代後期の型式と照らし合わせると、1間×2間掘立のA—1型式、1間×3間掘立のA—1型式の採用率の増加と、1間×2間掘立のB—1型式、C—1型式、1間×3間掘立のC—1型式の減少という編年の流れを中期～後期の間に見ることができる。

これらの建物についての機能について推定してみたい。1間×1間掘立(一部住居の可能性がある)、1間×2間掘立A—1型式、同B—1型式(梁行1に対し桁行比率1.6前後のA—1型式に近いもの)、1間×3間掘立A—1型式、同B—1型式などの桁間規模の小さいものは構造上高床式倉庫と考えたい。さて中期の掘立柱建物のみの集落内で主体をなす1間×2間掘立B—1型式(梁行1に対し桁行比率1.7～1.8をなすC—1型式に近いもの)、同C—1型式について考えてみよう。これらの掘立柱建物群を理解するうえで、萩ヶ谷遺跡A地区での遺構群のあり方が注目される(文10)。萩ヶ谷遺跡A地区では、弥生時代後期の竪穴住居2棟、焼土をとめない住居状の遺構1ヶ所にたいし、1間×1間掘立1棟、1間×2間掘立A—1型

*) 勝川遺跡苗田地区は前述した県内原川遺跡同様、掘立柱建物のみからなる集落地区で、丹羽氏によると木製品などの製作工房的な性格をそなえた建物群と推定されている。これらの建物が特殊な使われ方をした建物群であるならば、日常的な居住地区での掘立柱建物群と同一のレベルで分析することに若干の危険性は感ずるものの、異なる設計規格により建物が造られていたとも考えられない。さらにこれらの掘立柱建物群もある程度の単位群が認められる点考慮すると、日常生活を行いがらの工作集団の居住地区、あるいは掘立柱建物のみを採用する集団(竪穴住居を採用する集団とは系統が異なる)が同一集落内に包括され居住していた状況を想定しえないだろうか。

**) 勝川遺跡でとくに多く検出されたため、厳密には中期末葉に増加の画期があるかもしれない。

式（棟持柱付Bタイプ）、同B—1型式1棟（棟持柱付Bタイプ）、と同C—1型式1棟が確認された。1棟の住居跡は2棟が切り合っているため、住居跡状の遺構（あるいは1間×1間掘立も住居跡か？）も含めると、2棟前後2時期考えられる。それに対し、1間×2間掘立A—1型式とB—1型式は重複しているため2時期の型式変化をした高床倉庫の建て替え（B—1→A—1型式か？）が想定され、住居跡2棟に対し高床倉庫1棟の単位集団が設定できよう。すると、1間×2間掘立C—2型式を高床倉庫と見なすには多少の無理が生じると考えられ、この建物は高床倉庫以外の機能を考えたい。具体的に類推する見解は持ちあわせていないが、高床式の住居あるいは作業小屋と推定される^{*}。

以上の点から、梁間1間の建物については2つの型式群グループが認められ、前者のグループを高床倉庫、後者のグループを住居あるいは作業小屋と推定した。（後者の掘立柱建物は以下住居掘立とし、記述をすめる。）この機能をたとえば原川遺跡にあてはめると、住居4に対し高床倉庫2の比率になる（1間×1間掘立除く）ことから、原川遺跡では住居掘立4に対し高床倉庫2、あるいは住居掘立2に対し高床倉庫1（2時期または2単位）の単位集団が認められる。

この機能分類が、普遍的に採用しうるか具体的な資料を多くもていない。西日本において掘立柱建物が多数報告された代表的な例として岡山県百間川今谷遺跡について検討してみたい（文28）。百間川今谷遺跡では、中期後葉の竪穴住居5棟、掘立柱建物28棟が検出されている。前述したとおり28棟の掘立柱建物を型式的機能分類してみると、住居掘立20棟（大型2棟含む）高床倉庫6棟（1間×1間掘立2棟含む）になる。竪穴住居跡を含めると住居4棟に対し高床倉庫1棟、竪穴住居跡を含めないと住居掘立3棟に対し高床倉庫1棟の割合になり、単位集団が予想されそうである。また、住居掘立の中で1間×3間掘立、1間×4間掘立で、梁行1に対し、桁行比率約3.5になる大型の細長い建物がある。この種の建物は県内では認められず別型式が設定でき、さらにその地域性と1間×3間掘立C—2型式との関連も注目される。

こうした型式的機能分類が可能であるならば、弥生時代社会において倉の存在を考える意味づけがかなり異なったものになってこよう。また、県内でも藤枝市稲ヶ谷遺跡などで認められる事柄であるが、高床倉庫と竪穴住居、またそれに住居掘立を含む単位集団と、高床倉庫をもたない単位集団が見られ、同一集落内での単位集団ごとの格差が生じている。さらに、沼津市八兵衛洞遺跡で見られるが、たとえばA地区でのあり方は竪穴住居21棟に対し掘立柱建物1棟で—住居あたりの高床倉庫占有率は4%（掘立柱建物÷竪穴住居）、や前述した稲ヶ谷遺跡でも5%に占有率の低い遺跡が目立つ。それに対し、富士宮市月ノ輪上遺跡B地区では17%、登

^{*}）高床式とする構造上の根拠は乏しいが、岡山県稼山遺跡例のような地床炉を伴う例は県内ではない。しかし、屋根を地上まで置き降す切妻構造の平地式住居であった可能性もある。また床面検出の発掘調査時の技術的問題、屋外炉について、炉をもたない住居（作業小屋的な掘立）掘立の検討等について、掘立柱建物に対する厳密な機能分析が必要とされよう。

呂遺跡でも33%ぐらいの占有率をもつ遺跡が見られ、集落間格差を生じている。また、浜松市国鉄工場内遺跡のような掘立柱建物を集中的に営なまれる地域を集落内に含む遺跡や、中期の勝川遺跡、百間川今谷遺跡、原川遺跡のような掘立柱建物を主体にし集落を営む集団の性格の位置づけなど検討課題は多いが、倉庫の占有率の格差＝余剰生産占有率格差という推測が成り立つならば、単位集団ごと、集落ごとの余剰生産物をめぐっての確執が、県内弥生時代後期社会に見ることは可能であろう。

さて、この確執は、古墳時代前期にはどのような展開を見せるのであろうか。まず、1間×2間掘立A—2型式、同B—1型式、1間×3間掘立A—2型式の登場に見られる高床倉庫の大形化と1間×3間C—2型式のような大型掘立の存在、総柱建物や梁行2間以上の掘立柱建物の登場などの変化と大きな画期を見い出すことができる。(第27図3)前者は、余剰生産物の占有率の増加(生産規模の向上)、後者については新たな形式の建物の波及(古墳文化の東進)として意味づけられる。前者の点については余剰生産物の集落、単位集団ごとのますますの確執を招いたことであろう。後者の点については、前方後円墳の当地域における出現過程と一致していると考えられ、畿内型首長権の波及現象の一環としてとらえておきたい。この首長出現に関して、大型掘立の1間×3間掘立C—2型式について注目してみたい。この型式の建物は静岡市小黒遺跡、浜松市中平遺跡で見られ古墳時代前期で確立的に見られるようになる。またこの建物は、すでに静岡市汐入遺跡や大門遺跡で見られた弥生時代後期から系譜がおえる。

(近年静岡市神明原・宮川遺跡でも1間×4間?の形式の大型掘立が確認された。)この大形の建物は、大型の高床倉庫とも見られるが、同時期の高床倉庫にくらべると格段に大形化しており高度な建築技術を必要としたことであろうし、型式的機能分類の上からも高床倉庫ではなからう。この建物がいかなる機能を有していたか推測してみると、①族長会議等の共同体内部における共働行為の実行場所、②農業共同体あるいは村落内に出現した首長(畿内型首長も含む)や族長が居住した住居あるいはそれらが行なう行政的(祭祀行為も含む)行為の実行場所であった2点が考えられる。推論としては弥生時代後期には①の要素が強く、古墳時代前期には②の比重が高まった建物と考えたいが、類例も少なくまったくの推論であるため、今後の資料の増加をまたなければならない。

棟持柱付掘立柱建物は現在の県内の資料では、前述したごくBタイプのものが藤枝市稲ヶ谷遺跡、萩ヶ谷遺跡でみられた。県外では、中期になると思われる尾張平野での勝川遺跡、朝日遺跡でBタイプのものが確認された。県内の原川遺跡では棟持柱付の建物はないため、東海地方西部に中期にすでに見られ、後期になると県内にも出現するようである。関東地域においてこの建物が出現する時期を検討しうる資料はないが、横浜市北川表の上遺跡では古墳時代前期の1間×3間掘立にAタイプ、1間×2間掘立にBタイプの棟持柱付掘立柱建物が見られる。

以上の例から、この建物は東海地方～関東にかけては梁行1間の掘立柱建物に採用が見られ、特殊な平面形式の建物に認められるのではなさそうである。この建物については、東海地方以西に多く見られ、おそらく九州あるいは西日本に起源をもつものであろう。また、岡山県土井遺跡の例(文27)などを見ると、東日本には見られない1間×7間という超細長建物に採用さ

れたものなどがあることから、地域ごとに普遍的に見られる掘立柱建物に採用されたことがわかる。棟持柱の機能を考えてみよう。棟持柱をもたない建物の屋根構造は切妻屋根の場合棟を合掌造りで固定していたのに対し、棟持柱付建物は棟を別個の支え柱により固定する技術で建物構造を強固にする役割をはたしている。また勝川遺跡例で屋内にも棟持柱を設けているのもあり、丹羽氏が推定しているごとく屋根構造を強化するばかりでなく、ある種の間仕切りを施すものもある。この技術は、すでに縄文時代後期においては神奈川県池辺遺跡などでAタイプが見られるが、技術的には断絶する。現況では弥生時代に独自に発達し、おそらく前述したごとく西日本のいずれかに起源をもち、弥生文化の東方伝播とともに尾張平野では中期末葉に見られ、さらに後期～古墳時代前期には関東～東海東部の掘立柱建物に技術的導入を行なうとみている。しかし、導入時期について東海～関東地域での確認、検討例が少なためさらに遡る可能性がある。

最後に、総柱の掘立柱建物について検討したい。総柱建物は、前述したごとく確認例は少なく唯一古墳時代前期の中平遺跡1例のみで、県内においてその安定採用時期は5世紀後半とみえた。また、中平遺跡例は規模も小さく、5世紀後半以降出現する総柱建物とはおそらく起源は異にすると考えられる。また、高床倉庫の設計規格や型式変化についても、古墳時代前期においては大形化する以外何ら変化はないと考えられた。そうした古墳時代の前期の様相から、5世紀後半になると高床倉庫を総柱建物に変換される画期が見出される。この画期について考えてみると宮本氏の見解が注目される。宮本氏は鳴滝遺跡での高床倉庫群を従来見られなかった技術力によるところの所産とし、渡来系氏族の紀氏との関連を注目された。大門遺跡での3間×3間総柱高床倉庫についても前述したごとく5世紀後半以降に位置づけることを可能とした。

遺跡内での遺物の出土状況では、4世紀、7世紀、8世紀、10世紀～20世紀が見られ、また、接隣する掛の上遺跡では6世紀後半～7世紀代の2間×2間総柱、2間×4間総柱の掘立柱建物が知られている。こうした点から、大門遺跡例について6世紀後半～8世紀代の大形高床倉庫群として位置づけることが妥当とも思えるが、宮本氏らの注目点などから類推すると、大門遺跡内に存在する大門大塚古墳との関わり合いから5世紀末～6世紀前半に当地に出現した金銅装馬具、鏡などを副葬する畿内型首長によりもたらされた建物ではないかという仮説に対し魅力を感じている。どちらにしても、こうした6世紀初頭の畿内型首長の出現、須恵器の当地域における普及時期、高床倉庫の総柱建物の変換はほぼ同一に現れた画期であって、東海地方における古墳文化のあり方を示す重要な事柄であることは言うまでもなからう。

このように、弥生～古墳時代にかけての社会状況や歴史的流れを知るうえで掘立柱建物のあり方は重要な問題提起を我々に投げかけている。しかし、伴出遺物も少ないことや発掘調査の技術的限界もあり、その機能や時期決定すら疑問点を残す結果も招いているため、集落内での掘立柱建物（倉庫）と単位集団との関係のみに研究目的が終始している感がある。今後の研究の動向に注目していきたい。

第2節 大門遺跡周辺の古代～近世初頭期における歴史的動向

今回の調査にて確認しえた奈良時代以降の遺物は少量ながらも多岐にわたった。それらの遺物があるであろう歴史的景観を簡単に素描することにより、本節のまとめとする。

奈良時代の遺物については、8世紀後半を中心とした須恵器が出土している。奈良期における大門遺跡の性格を類推することは難しいが、手がかりとして江戸時代に編さんされた内山真竜の『遠江風土記伝』によると、高部、石野、宝野新田、神長、小野田、赤尾を通熊郷に比定している。(文34)通熊郷は、『和名抄流布本』によると長下郡の中に見られる。この通熊郷については、土田氏らによる浜松市立町辺を推定とする説(文24)と、原氏らの内山真竜説を再検討し袋井市愛野・高尾・豊沢付近に推定する説(文19)とがあり、長下郡域を考えるうえで重要な問題提起がなされている。仮に、内山真竜の説によると大門遺跡付近(高部)は通熊郷に比定しうるが、土田氏説を採用すると山名郡下のいずれかの郷に比定しえようが、今回の調査ではそれを決定しうる資料はえられなかった。奈良時代の遺物は明瞭にはとらえることができていないが、前節において古墳時代とした3間×3間掘立柱建物が奈良時代のものとするならば、郷における中心的な倉庫群(郷倉)として位置づけることも可能と思われる。

平安時代前～中葉期の遺物は少ないが、平安時代末葉～鎌倉時代前葉の遺構、遺物は再び増加する。これらの遺構群の歴史的な位置づけの手がかりとなる文献に、本間系図、本間氏文書がある。本間氏文書によると、建武二年(1335)、「内親王家御領遠江国高部郷地頭職内、本間山城兵衛五郎入道覚法……」とあり、(文18)14世紀の前葉期に皇族の庄園(山名庄)である高部郷の地頭職に本間氏が任官していた可能性がうかがえる。また本間系図によると本間資光が北条時盛に、またその子本間光範は北条時頼に寛元四年(1246)に遠江国内に所領を与えられていたという。(文18)今回の調査にて検出された、SB5は高床倉庫風建物で一般的な集落で検出される柱通りの悪い建物とは異なり、建物構造はしっかりしている。調査区域内がかなり削平をうけており、中世集落構造を把握することはできなかったがSB5の高床倉庫風建物を重視し、また本間氏の遠江における所領が13世紀代まで遡りうる可能性を考え合せると、大門遺跡を中心として山名庄高部郷の地頭職にあった本間氏の居館関連の施設が、13世紀にすでに存在していた点推定しえないだろうか。

さらに、時代が降って15世紀代大窯製品が目立つ。これらについての遺構はなく、多くは近世末葉に掘削された大形土坑、溝中より出土している。前述した山名庄高部郷地頭職にあった本間氏の動向はどうであろうか。本間氏は南北朝時代氏季の代に山名郷を与えられるとともに高部郷欠ノ上屋敷に居をかまえたことが本間系図に記載されている。欠ノ上屋敷は現存の高尾掛の上地内に所在していたと推定される。(文19)掛の上地内に所在する掛の上遺跡では、13世紀～15世紀にわたる陶磁器、墳墓などが知られ大門遺跡とともに有力な中世遺跡の存在が認められる。またその後の欠ノ上屋敷は、本間氏文書によると本間八郎三郎の時(元龜2年、1571)に徳川家康から小野田村とともに欠ノ上屋敷を安堵されている。さらに本間八郎三郎は天正二年(1574)に武田勝頼からも小野田村とともに欠ノ上屋敷を安堵されている。

高部郷内には、ほかに丸尾氏が居住していたと思われる丸尾氏館の推定地がある。丸尾氏について系譜を知りうる資料は少ない。『高部郷遺書物語』では、応安5年(1372)に高部にのがれてきた栄仁親王(宗良親王か?)を本間氏とともに守護したと伝えられ、14～15世紀には本間氏らとともに土着化していた可能性がある。その後、戦国期になると丸尾氏は本間氏と姻戚関係を結ぶ。前述した本間八郎三郎は嫡子のない本間五郎兵衛に対して丸尾氏からの婿養子となった人物である。丸尾義清は兄本間八郎三郎と高天神城にたてこもり、武田勝頼方に攻められて兄弟討死したという。そして、前述した武田勝頼よりの判物等により、丸尾氏も本間氏とともに徳川家康の嫌疑をうけ、家康の嫌疑より逃れるため丸尾氏一族の八郎九郎は帰農して高部に住んだといわれる。また本間氏も高天神城落城後、八郎三郎の弟氏重が勝頼方に従って甲州に行ったと伝えられている。丸尾氏は戦国期に本間氏と姻戚関係を結ぶが、それ以前も本間氏とともに今川氏代々に仕うる被官として地位を保持しており、本間氏と関係は深いものがあったと推察しえる。こうした状況からさらに推測を進めると、丸尾氏は本間氏と同一血族で14～15世紀?の時点で本間氏と分家し、高部郷内に館を構えたとも考えられる。

以上のように、南北朝から戦国時代の高部郷に関係する土着武士である丸尾氏、本間氏の動向が注目される。それらの武士が居住したであろう居館跡をただちに比定しえる考古学的資料は今回の報告、今回の報告以前でもえられなかったが、大門遺跡、掛の上遺跡を中心として、本間氏、丸尾氏らの動向を知るうえでの居館関連遺構、遺物の発見が期待される。また、今回取り上げた本間氏、丸尾氏のような土着化した小集団の武士団のあり方を解明しうる考古学的発見、調査方法が確立されていくことを希望して本節のしめくくりとする。

第3節 遠江における近世末～近代初頭における陶器生産の様相

i) はじめに

今回の調査で確認された近世末～近代の遺構については、地割溝、大型土坑がある。これらの遺構は、近世高部村のいずれかの農家屋敷付近の畑地、屋敷地であったと推定される。遺物については、陶磁器類で大半は瀬戸、美濃産で少量の肥前産磁器と在地産陶器であった。在地産陶器については志戸呂焼と水ヶ谷焼が推定されたが、これら在地産陶器については編年的にも、流通分布圏についても不明な点が多い。本節では、これら在地の陶器生産についての研究現状の提示を行ない問題点を模索してみたい。

県西部域の近世～近代前葉期の陶器窯とされるものに金谷町、島田市志戸呂焼、大須賀町水ヶ谷焼、浜松市和地山焼、細江町初山焼、瀬戸窯の5陶がある。このうち、初山焼は16世紀代

*) 高部郷(宗良親王)伝説は、『遠江国風土記伝』によると御醍醐天皇第二皇子(宗良親王)が遠州灘で難波した後高部に居住しその地で没したことから大門、御門、大裏跡、御陵(大門大塚古墳)などの地名が残ったとされ、遺跡名である大門という地名の由来を知るうえで興味深い。また、『高部郷遺書物語』に見られるように丸尾氏、本間氏と皇族との関りを強調する点、戦国期から江戸期における丸尾氏らや、その末裔の人々の思想性といったものを知るうえで注目される。

**) 元禄5年(1692)の高部村差出明細帳では石高1264石を数える有力村であった。

の製品のみを中心とするため、和地山焼は幕末～明治の陶器窯とされるが資料が少なく考古学的操作が行えないため今回は、志戸呂焼、水ヶ谷焼、瀬戸窯について触れてみたい。

ii) 志戸呂焼について

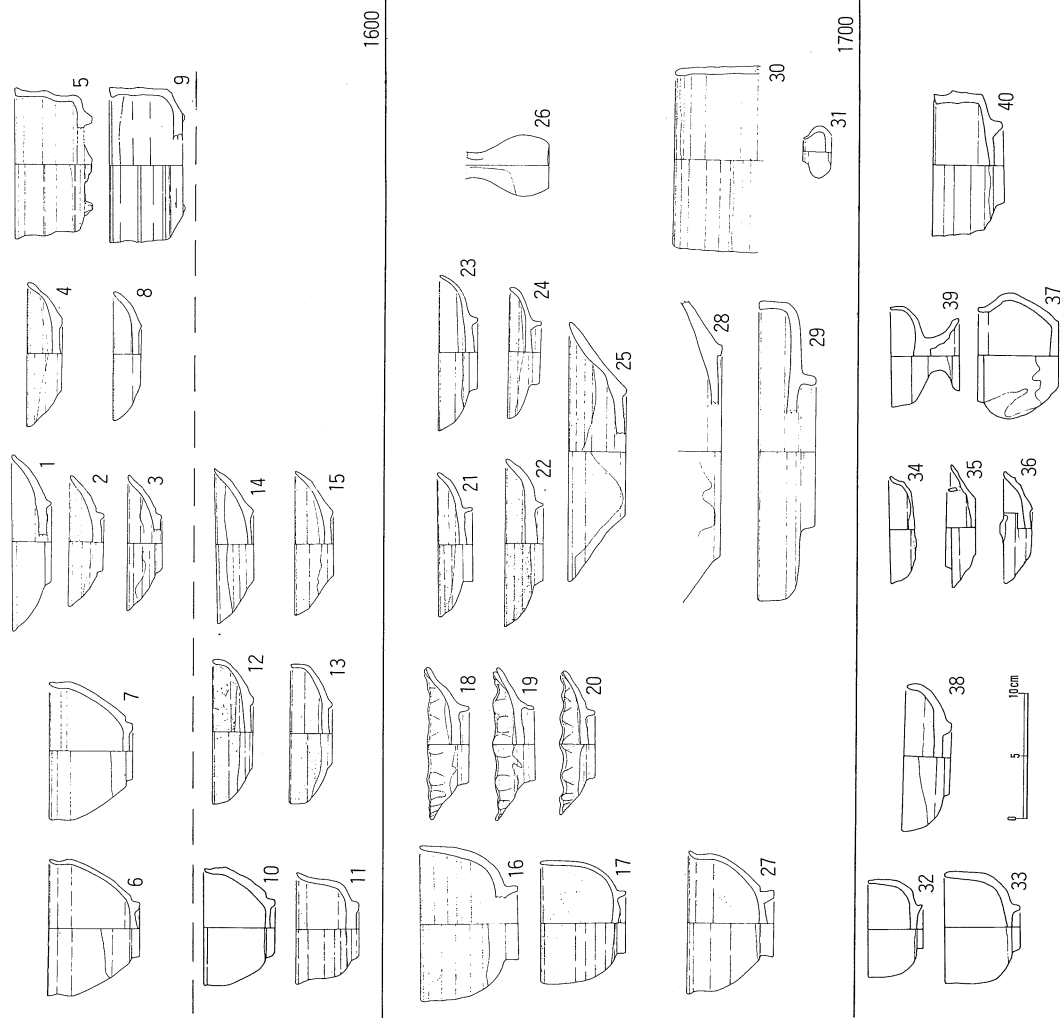
志戸呂焼については足立氏により、研究が進められてきている（文41）。足立氏は志戸呂焼に関する文献、古文書資料の分析から、成立年代を天正、慶長年間と推定した。製品変遷については、17世紀前後に美濃桃山陶の流れをくむ工人により開始され、18世紀代には茶器生産から雑器生産に移行すると示唆したが、陶器編年はされずに終わっている。

この後、窯跡調査もなく研究も停滞したが、近年島田市居倉遺跡の調査でまとまった量の志戸呂焼がえられた。この資料については、調査者の渋谷氏により分析がなされている。（文26）渋谷氏によると、出土陶器を1～7類に分類し、1～3類をそれぞれ16世紀前、中、後、4、5類を17世紀前、後の志戸呂焼編年を示した。第28図は渋谷氏の編年観を中心に、足立氏の18世紀代資料を加えまとめた図である。渋谷氏によると1～5は大窯Ⅰ期、6～8は大窯Ⅱ期に併行する製品としており、志戸呂焼の成立を足立氏が否定的とした大永年間成立説（1521～1527）以前まで遡る可能性を示唆した。これら大窯Ⅰ～Ⅱ期併行のものとして、皿は1～3の口唇部を外反させるグループ（A類）と内彎する4、8（B類）がある。皿A類は大窯Ⅰ期に見られる外反口縁の皿に比べると外反度が弱く大窯Ⅱ～Ⅲ期に降る可能性はないだろうか。皿B類については大窯Ⅱ～Ⅲ期について多く見られようになるが、4については口唇を強くする手法があり古手である。天目茶碗については大窯Ⅰ～Ⅱ期併行と思われる。5の香炉は大窯Ⅰ期～Ⅱ期、19は大窯Ⅲ期あたりの併行と思われる。

10～15は16世紀後半とされた資料で、12、13の口縁を直立させる皿（C類）の手法により唐津系陶器の影響を受けた段階としている。皿A類は14に見られるように口唇部をやや外に引き出すものがある。皿B類については不明であるが、15のように口縁を外傾させるものが特徴的である（D類）。9のような丸みを帯びた体部の丸碗は、口縁を外反させるものがあり大窯Ⅴ期併行を思わせる。

17世紀前半とされたものは16～26、後半は27～31である。皿A類は21、22のように体部が丸く、口縁の外反度も小さなもので、高台は16世紀代のものに比べると高いもの、皿B類についても体部が丸く、高台が高いものがある。特徴的な皿として18～20のひだ状口縁の皿（E類）がある。皿E類は、瀬戸・美濃系では17世紀～18世紀前半に見られる菊皿に祖形があると思われる。18～20の製品については、高台も高く作りも複雑な点、17世紀後半からあるいは18世紀前半に降る可能性もあろう。天目茶碗は27のような丸みのあるもの、また口縁を直立させる16、17のような丸碗がある。天目茶碗については17世紀後半あるいは18世紀前半、丸碗についても高い高台をもち17世紀後半のものと考えられる。ほかには大形の皿として25、28がある。29は

*) 向坂氏によると明治6年（1873）の『万国博覧会出品目録浜松県一覽表』に和地山焼の記載があることから、幕末以降には焼かれていた陶器であろうと紹介している。（文45）採集された甕の陶器片は、長石と思われる白色粒を多量に含んだ砂質の胎土で、灰色の色調をなす。今回の調査では出土していない。



第28図 志戸呂焼変遷図

(1～8、10～13は文26より、32～40は文41より転載)

浅鉢で器形としては大窯Ⅳ期からたどれるが高台が高く17世紀代のものであろう。

18世紀代の資料についてはさらに少なくなりますが、足立氏によると森町観音堂21号横穴内近世墓資料(32～37)、金谷町横岡中窯(38～40)などがある。これらは鉄釉系の32、33の丸碗、34～35のような灯明皿、39の仏飼器、40の香炉などの雑器仏器のほか、37のような茶器と思われる小壺もある。今回出土した志戸呂焼は、この段階にあたる。

志戸呂焼の終末について、文政年間に編さんされた『掛川誌稿』では、志戸呂の陶器生産が非常に少なくなった記述が見られる。今回の調査にて出土した資料や、大須賀町横須賀城、磐田市見端城の焼土壙^{*}でも見つかってきており18世紀代以降についても継続して窯が操業されていたことがわかる。なお、志戸呂焼は現在でも焼き続けられている。

以上のような志戸呂焼についての問題点をまとめてみると、①16世紀前後(大窯Ⅰ期併行)

に成立していた可能性が高い、②17世紀前後（大窯V期併行）について唐津焼の影響の有無、③それぞれの器種ごとの分析、型式変化の追求による細別段階設定、④搬出先の検討となる。いずれも解決する資料、見解ともちえていないが、④については関東地方にて志戸呂焼と思われる製品が見出されるため、既存の資料について産地分析が進むことがまたれる。

iii) 水ヶ谷焼について

水ヶ谷焼窯は現在1～3基の窯からなる窯跡群で、良好な製品が知られている。製作工人としては、加藤水療—徳兵衛—和作の名が伝わっている。また、大正4年編さんの小笠郡誌によると小笠村で陶器生産が行われていたとの記述があり大正～昭和初期まで焼かれていたらしい（文33）。今回提示しえた資料については、大正～昭和以前の窯と伝えられる窯の灰原資料である。

1～3の徳利はいずれも長石釉と思われる白色釉系が施されている。1については、緑色釉を施した後、胴部上半のみに白色釉を施している。2～3の受け口状の口縁は、瀬戸、美濃系徳利では19世紀以後にあらわれる。

4～9の香炉は、4、5の線香立形で現在使用しているものに類似している。鉄釉である。7～8は合子状に蓋のつく香炉である。いずれも19世紀以降のものと思われる。

ほかには、白色釉が施された6の仏飼器、10は鉄釉系の片口、13は肥厚した口縁でところどころに指圧を加え変化をもたせた向付がある。11～12は火鉢で11の鉄釉、12の灰釉の2種類がある。火鉢は、瀬戸・美濃産では18世紀後半からあるようだが、19世紀以後多く見られるようである。14は鉄釉の施された急須で、肥手は口よりも90度側面につくよう、19世紀以降から増加する器種である。片口についても、外傾度が強く19世紀以降と考えられる。

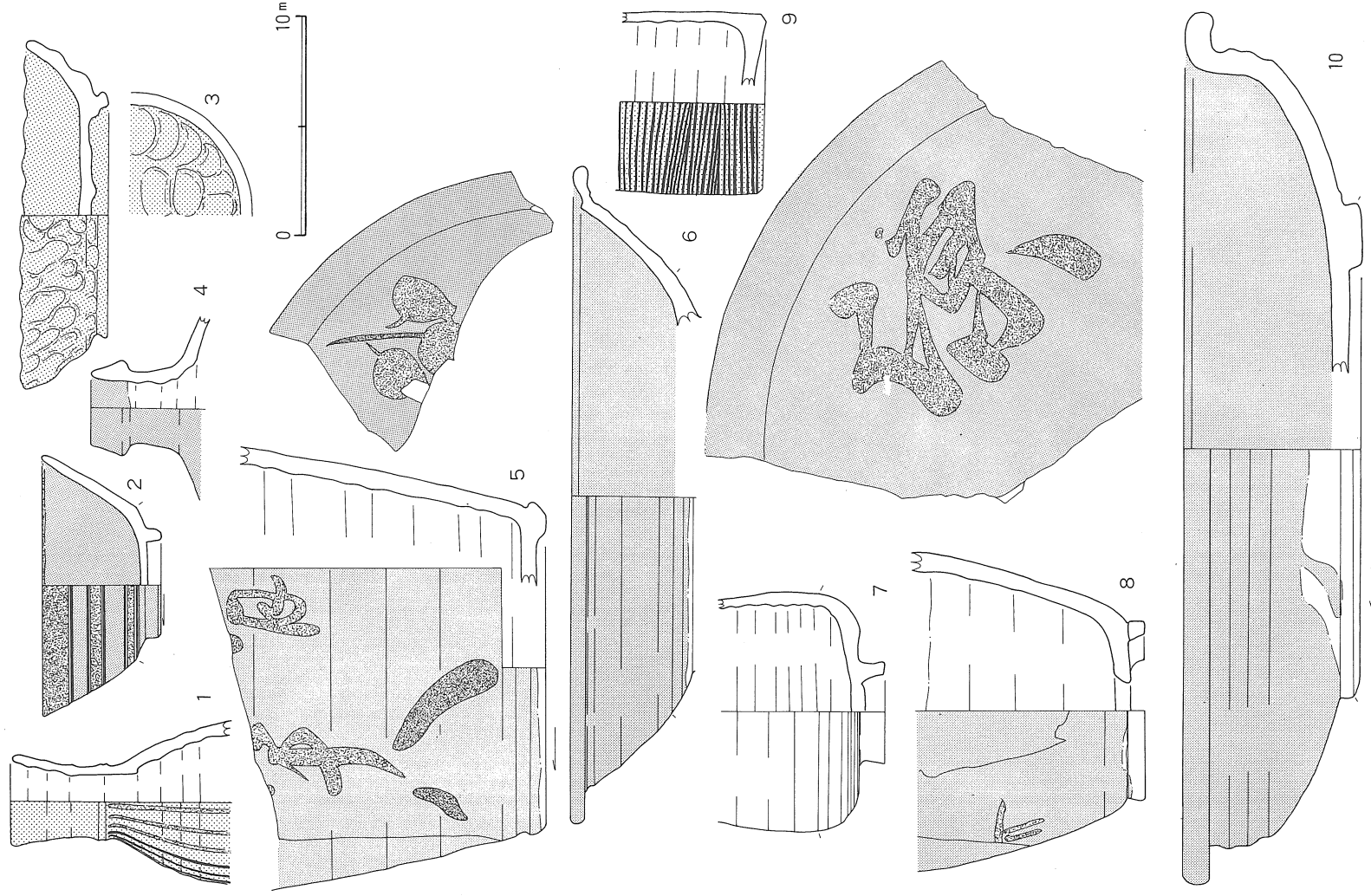
以上のような日常製品のほか、甕、スリ鉢、土師質土器、土管などの高消耗陶器製品が大量に焼かれており、生産品の80%近くを占めるようである。スリ鉢は口縁を肥厚させ1～2本の浅い沈線を施しており片口のものもある。底部は広い高台をもつ。内面は、12本前後の巾広の櫛状工具にて密に櫛目を施している。26、27の鉄釉と、28の灰釉とがある。29は小形のスリ鉢で形態は大形品と変わらない。肥厚させた口縁は18世紀代まで出回っていた備前焼スリ鉢の模倣であるが、底部が高台化しておりやはり19世紀以降のものと考えられる。

土器質土器は、小形のカワケの18～23、口縁が欠落するが長野県富田焼に類似品の見られる十能と思われる16（文42）、小形の煎り鍋のような16、17などがある。カワケは口径9.7cm、高さ2cm以内の扁平なもので、硬質な印象をうける。19世紀以降のカワケとしてよいだろう。

以上のほかには、伝世品として白色釉系の丸碗、水指、耳付手焙がある。

今回提示した水ヶ谷焼については、いずれも19世紀以降のものと思われる。18世紀代については『遠江風土記伝』では志戸呂焼の記載はあるものの、宝飯郡の清ヶ谷村の条項には水ヶ焼

*）文政年間火災時の廃棄土壇。志戸呂焼（小碗、仏飼器、灯明皿、徳利、小皿等）のほか、大量の瀬戸美濃系陶器、肥前系陶磁器が見られ18世紀～19世紀初頭期の良好な資料である。



第29図 瀬戸窯出土遺物実測図

と思われる記述はなく、おそらく幕末前後に成立した陶器と思われる。系譜としては、瀬戸、美濃系本業焼の流れをくむものであろうが、長石・灰釉糸釉薬を主に利用する点、徳利や水指などの形態に独自性がうかがえる。清費地遺跡においては、まだ資料を十分にあたっていないが、浜北市東原遺跡（文25）、溝4より18世紀～19世紀後半の瀬戸・美濃産陶磁器と、袋井市石ノ形遺跡SD1にて19世紀後半の陶磁器類と共伴している例があることから、18世紀代まで遡ることはないにしても幕末前後に操業時期を設定しても大過なからう。

水ヶ谷焼についてまとめると、①幕末前後に成立した窯によるものであること、②瀬戸・美濃系本業焼の流れをくむとも言えようが、その流通、分布圏、編年設定の可能性についてほとんど解決する資料はもち合わせておらず、多くの課題が残されている。

iv) 瀬戸窯について

瀬戸窯は大窯期と思われる初山焼窯群の一面に所在し、甕屋等の名称が伝えられ昭和期まで焼かれたとされる陶器窯である。第29図に図示した製品は浜松市博物館の月岡コレクションの資料で、ほかに窯道具がある。現地には、良好な物原が残されている。

1、4、5、9は徳利である。1は肩部から胴部にかけて呉須釉で、縦縞文様を施している。4、5の貧亡徳利は「口千八」などの酒屋の屋号らしいものが見られる。ほかに、伝世品として「小松屋」と書かれたものもある。（栗原氏御教示）

2の茶碗は、鉄釉、呉須釉、長石釉を横方向に交互に施し、横縞文様の効果を表現している。口縁は、直線的に開く。7は体部を丸く仕上げる茶碗と思われるが、無施釉である。

皿は、小形の3、大形の石皿と思われる6、10がある。3の小皿は外面、高台内部を指頭により凹凸文の効果を現わしている。内面には絹布と思われる布目痕が見られ、全体には緑色味の強い灰釉が施されている。6、10は全体的に長石釉が施され、6には鉄釉にて草花文、10は「源」の字が書かれている。6は口縁を水平に引き出し薄手の作り、10は肉厚な作りである。

8は外面長石釉を施し何らかの文様を施す植木鉢である。高台の所々を削り取っている。

これらの製品の胎土は、5、8、10の大形品は長石粒を多く含む全体的に砂質の粘土を使用しており、和地山焼と類似する。小形品については、緻密な胎土で長石粒も少ない。色調は、灰色を呈するものが多いが、露体部は茶褐色である。

陶器の系譜としては、4、5の貧亡徳利は19世紀以降の瀬戸美濃系、6の石皿は瀬戸洞窯系との関連を指摘しえるが、1、2、9などの縦、横縞文様は独得のものがある。3は、瀬戸美濃産の18世紀以降出現する挙骨茶碗との類似点が指摘しえようか。瀬戸窯の製品については、瀬戸美濃系のものも含み、それらの対比から幕末前後ぐらいに位置づけておきたい。

v) まとめ

今回提示しえた近世末葉に編年された県西部域の陶器窯は、瀬戸美濃系陶器との関連も若干指摘しえたがそれぞれ独自の作風も認められた。大きくは、志戸呂焼のような16～17世紀代より続けて作風を受けつぐものと、水ヶ谷焼、瀬戸窯のように幕末前後に開始されたものに分けられよう。今後、古文書等での陶器工人の系譜の索定や、細かな他地域との陶器編年対比が望まれるが、今回は資料の紹介にとどめ未開の近世陶器研究に向けて参考となれば幸いである。

＜参 考 文 献＞

- (1) 静岡県教育委員会 1965 「大門遺跡」『東海道新幹線静岡県内工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
- (2) 沼津市教育委員会 1981 『八兵衛洞遺跡群発掘調査報告書』
- (3) 沼津市教育委員会他 1970 『目黒身』
- (4) 沼津市教育委員会 1978 『藤井原遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- (5) 沼津市教育委員会 1981 『御幸町遺跡第Ⅲ次発掘調査概報』
- (6) 富士市教育委員会 1979 『天間沢遺跡第7次概報』
- (7) 富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
- (8) 富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群Ⅱ』
- (9) 日本考古学会 1954 『登呂』
- (10) 藤枝市教育委員会他 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
- (11) 掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡』
- (12) 焼津市教育委員会 1982 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
- (13) 焼津市教育委員会 1982 『焼津市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』(近刊)
- (14) 焼津市教育委員会 1982 『宮之腰遺跡』
- (15) 袋井市教育委員会 1980 『長者平遺跡—昭54年度緊急発掘調査概報—』
- (16) 袋井市教育委員会 1983 『一般国道袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—坂尻遺跡3次概報—』
- (17) 袋井市教育委員会 1983 『掛の上遺跡Ⅱ』
- (18) 袋井市役所 1981 『袋井市史料編Ⅰ』
- (19) 袋井市役所 1983 『袋井市史通史編』
- (20) 大須賀町教育委員会 1979 『清ヶ谷古窯跡群白山窯跡』
- (21) 浜松市教育委員会 1982 『伊場遺跡遺物編3』
- (22) 浜松市教育委員会 1982 『西鴨江中平遺跡』
- (23) 浜松市遺跡調査会 1983 『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』
- (24) 浜松市役所 1968 『浜松市史Ⅰ』
- (25) 浜北市教育委員会 1980 『浜北市東原遺跡(Ⅱ)』
- (26) 島田市教育委員会 1977 『居倉遺跡』(近刊)
- (27) 岡山県教育委員会 1982 『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』
- (28) 岡山県教育委員会 1982 『百間川兼基遺跡Ⅰ今谷遺跡Ⅰ』
- (29) 愛知県教育サービスセンター 1982 『勝川遺跡』(近刊)
- (30) 愛知県教育委員会 1982 『朝日遺跡』
- (31) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1983 『原川遺跡昭57年度発掘調査概報』
- (32) 和歌山県 1983 『和歌山県史考古資料編』
- (33) 小笠原郡役所 1915 『小笠原誌』
- (34) 内山真龍 1799 『遠江国風土記伝』図書刊行会復刊
- (35) 掛川藩 1804～1830 『掛川誌稿』名著出版復刊
- (36) 宮本長二郎 1975 「住居」『日本考古学4』岩波書店(近刊)
- (37) 平井聖 1975 「床の構造よりみた古代の住居」『家』社会思想社
- (38) 五島美術館 1983 『江戸のやきものシンポジウムレジュメ』(近刊)
- (39) 田口昭二 1976 『美濃焼』ニューサイエンス社
- (40) 樽崎彰一他 1980 『美濃古陶』
- (41) 足立順二 1980 「志戸呂焼とその周辺—静岡の近世窯—」『日本やきもの集成3』平凡社
- (42) 安藤衛 1980 「信濃のやきもの」『日本やきもの集成3』平凡社
- (43) 今井静夫 1980 「近世初頭の美濃焼」『日本やきもの集成2』平凡社
- (44) 大橋康二 1979 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館(近刊)
- (45) 向坂鋼二 1979 「小さな発見」『はぎ原』第15号 文化財調査会

付篇 第3次調査出土の遺物概要

第1節 はじめに

第2次調査終了後、公民館建設付帯工事として用地南と西側の道路についての拡張工事を行うという問題がもちあがった。すでに第2次調査前において、公民館建設予定地、駐車場部分に弥生～近世にわたる広範囲な遺跡を認める確認調査が行われていたため、拡張工事区全域を調査対象とした。調査担当は寺田義昭とし、昭和58年5月15日～同6月30日まで調査を行いこれを大門Ⅰ遺跡第3次調査とした。

発掘調査区は、南道路分については南区、西道路分については南半分については西区、北半分については北区とし調査を進めた。なお南区のうち東半分駐車場部分については、攪乱が激しく立ち合い調査とし本調査から除外した。遺構は、各調査区とも弥生時代を中心とする柱穴、土壇、住居跡と思われる竪穴状遺構が認められた。今回は、それらの遺構のうち比較的まとまった資料のえられた、南区土壇と北区拡張区土壇出土遺物を中心に報告したい。

第2節 遺物の概要

i) 縄文時代の遺物

前回の調査では、中期と思われる土器片が採集され本地区における縄文時代集落群構成について注目される資料が提供されたが、今回の調査にても第1図1に図示した石鏃1点がえられた。この石鏃は、基部がやや出ずように作られた中形の石鏃で、頁岩製重量7.2gである。

ii) 弥生時代の遺物

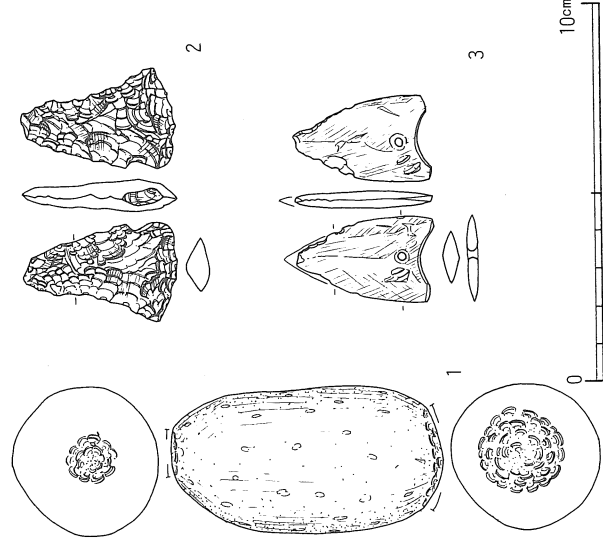
今回の調査でえられた資料も、前回同様ほとんど弥生時代のもので、土器は中期中葉～後期後葉までのものとはかに石器が2点出土した。

中期中葉（南区土壇出土土器）

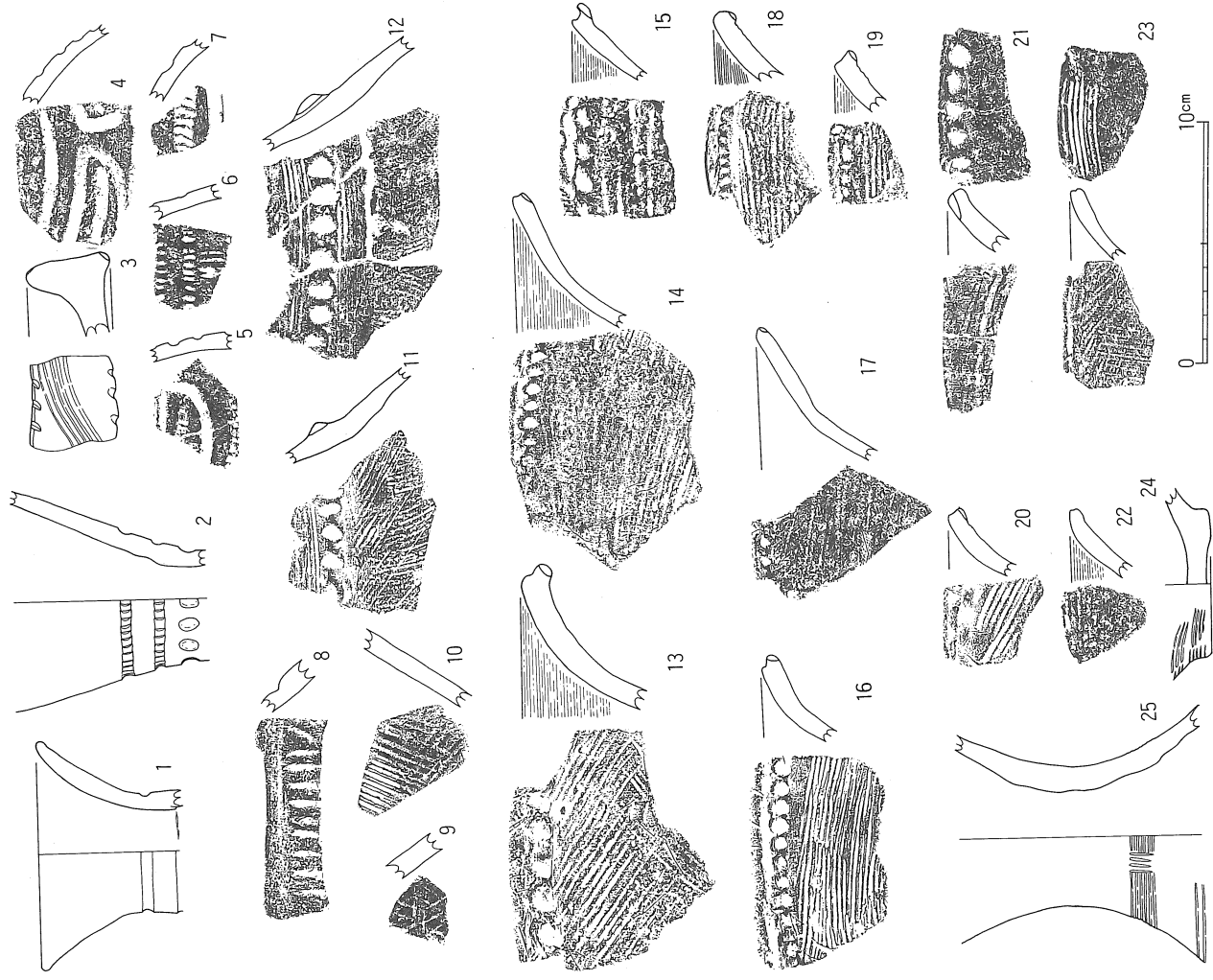
ほぼ中期中葉の嶺田式と思われる土器を一括して出土した資料で第2図に図示した。

嶺田式土器組成は近年の調査で、十分な量も出土量は増加しており、第6図に示したとおりの土器組成となりえよう。

今回出土した一括資料を第6図の土器

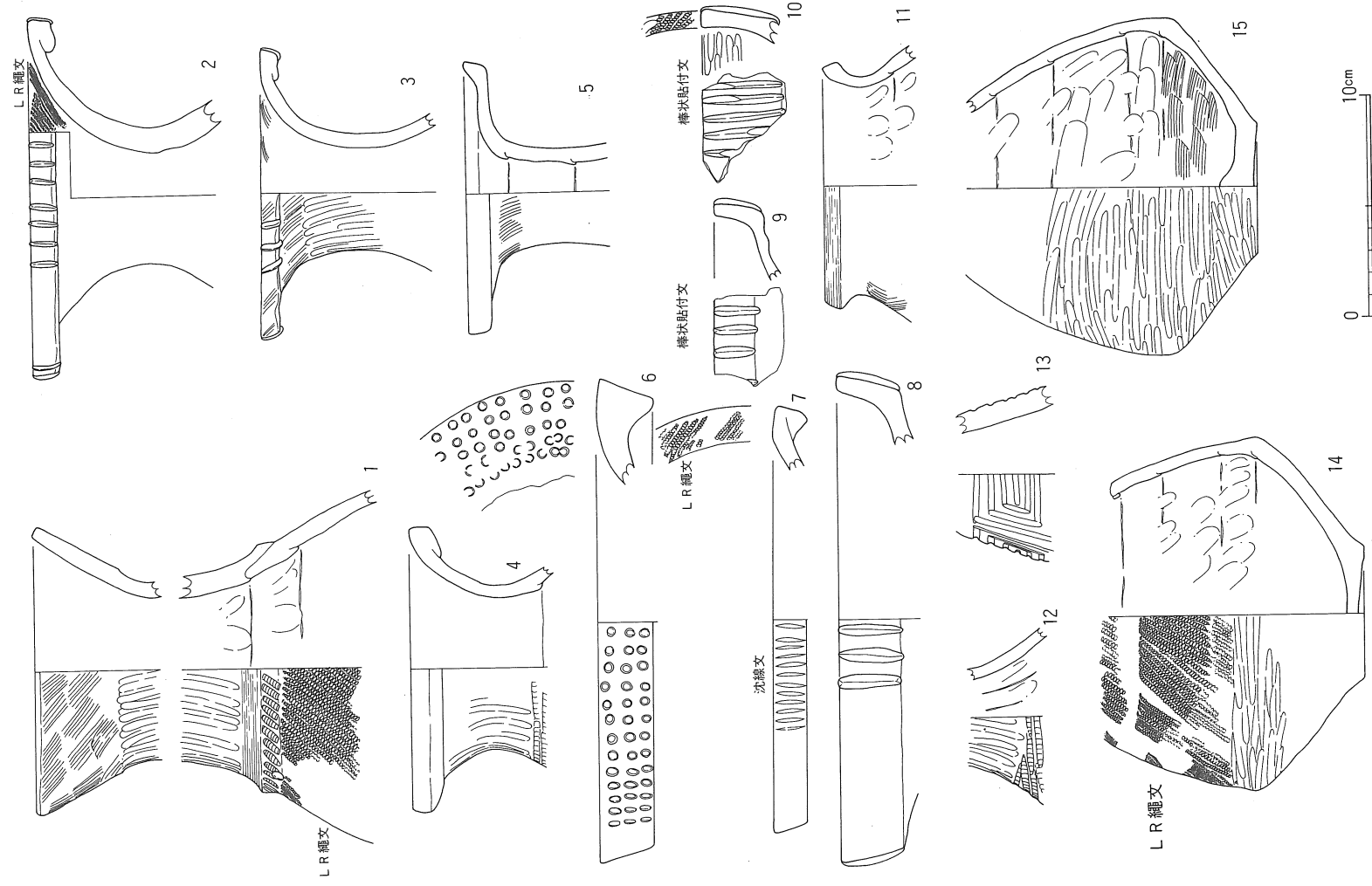


第1図 石器実測図

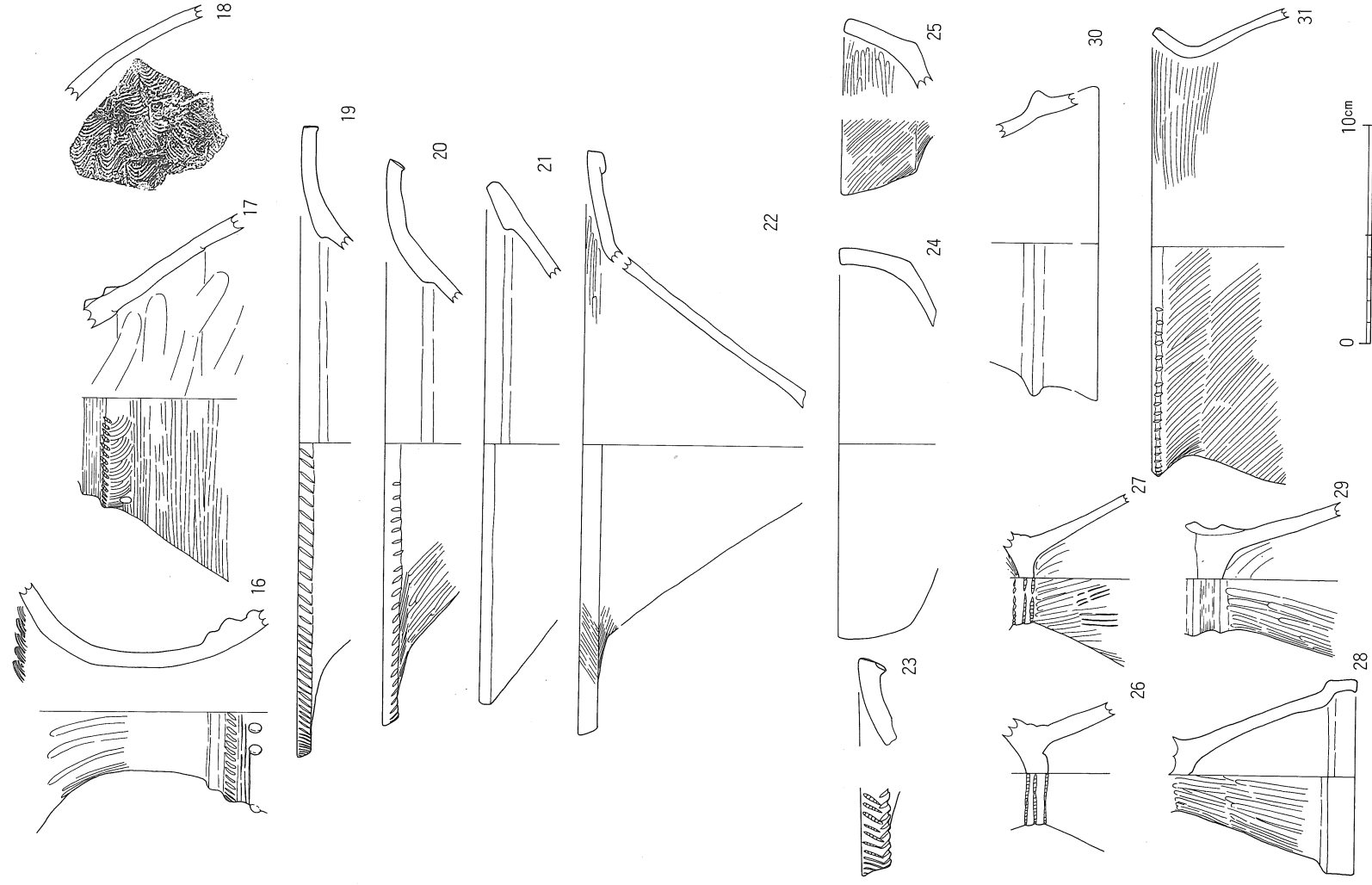


第2図 南区土壙遺物実測図

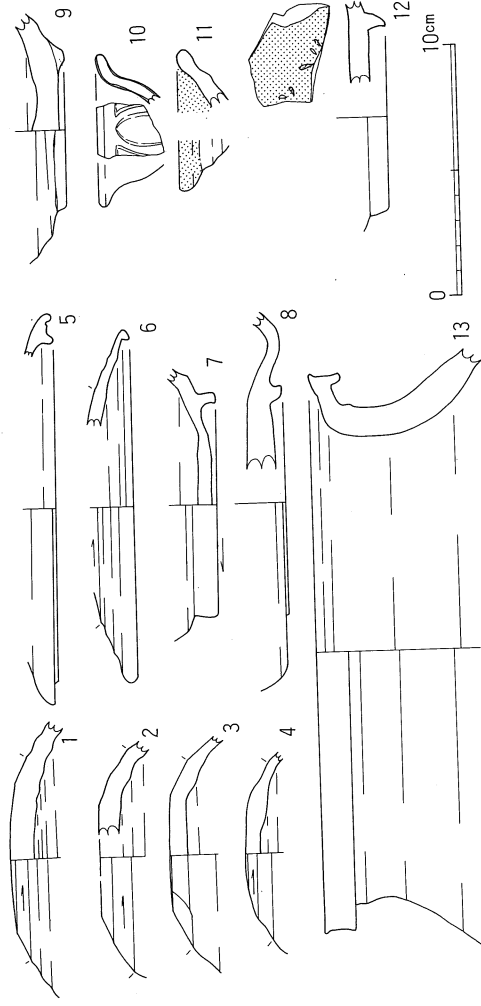
組成図にあてはめてみたい。壺形土器は、1、2の細頸壺A1類、広口壺B1類がある。肩部文様として4～8は、細頸壺A1類に通有のものだが、11、12の肩部凸帯文土器については丸子式から杵形がたどれるもので、広口壺A1類などの肩部文用として採用されると考えられ注目したい。また9の格子目文については、やや肉厚で中期後葉の白岩式土器の混入とも考えられるが、西遠地方瓜郷式の搬入品とも考えられる。



第3図 北区拓張区土壙遺物実測図



第 4 図 北区拡張区土壌遺物実測図



第5図 古墳時代～近世の遺物実測図

(2、4、5、7北区、1、2、8、6西区、9、13南区、3、10、11、12表採)

甕形土器は、13～20の甕A2類、甕A3類、22、23の甕A4類が見られた。いずれも、嶺田式甕形土器では普通的なA類を主体とするが、A1類を欠く点注目される。

25については白岩式の細頸壺である。上層出土で混入品であろう。

後期前葉（北区拡張区土壇出土土器）

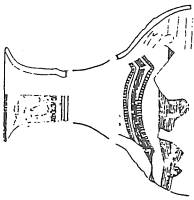
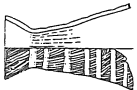
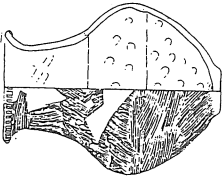
前回報告の後期前葉段階（二ノ宮式）の一括資料である。前回報告した分類（第2章第3節ii）にそって記述する。壺形土器については、1は直線的に外傾した単純口縁の広口壺で前回報告では出土していないためB1類とした。2～4の折り返し口縁の壺は広口壺A1類である。5は大きく外反させた口縁の端部を受け口状にする細頸壺A1類がある。6は、広口壺E類、8～10は受け口状口縁になる広口壺D類である。11は無頸壺、12、14、15は広口壺A1類、B1～3類のいずれかの胴部、肩部になるものと思われる。7は折り返し口縁断面形が三角形となり、あるいは広口壺E類の一種かもしれないが、広口壺A1類の後期後葉段階のものとの混入とも考えられる。13は白岩式土器である。16は三角凸帯を施す土器で、広口壺A、B類いずれかに属するであろう。17は西遠地域に分布する伊場式広口壺であるが、三角凸帯部分に扇形文を施す例は少ない。

高坏は、19～21、23のA1類、22のA2類、24、25のB類がある。脚部はA類系の26～29がある。30は伊場式高坏G類脚部に類似するが、胎土等搬入品でないことから、二ノ宮式の中に含まれる可能性がある。（C類）

甕についてはくの字状にやや外反した口縁とし、端部に面を作る31が知れるのみである。石器については北区拡張区より第1図3に図示した磨製石鏃1点と1の敲石1点が知られ、磨製石鏃は土壇付近より出土しているためおそらく後期前葉、敲石は後期のものと思われる。敲石は花崗岩製、両端使用で重量172.3g、磨製石鏃は片岩製で両面穿孔、重量3.65gである。

iii) 古墳時代～近世の遺物

古墳時代では、7世紀代の坏蓋（坏？）と思われる1～4の須恵器片が西、北区を中心とし

細頸壺 A		広口壺 A	
1		1	
2		2	
広口壺 B			
1		2	
甕 A			
1		2	
		3	
		4	
甕 B		小型甕	
5		1	

第6図 嶺田式土器組成図

て出土している。前回の調査では数少なく、7世紀代の集落が本調査地点の西方中心に広がることを示唆している。5は7世紀末の坏蓋と思われる。

奈良時代については、後半期と思われる6、8のほか、前半期に廻ると思われる7（伊場A類）がえられた。

中世の遺物は、9の13世紀代の湖西・渥美産の山茶碗、10の竜泉系と思われる輸入磁器、11の15世紀代の菅簀製品、13の13世紀後半常滑滑口壺が見られた。

近世の遺物は、12の御深井釉の施された17世紀前半の小皿がえられた。ほかに明治期以降の資料も西区を中心に若干えられたが、今回は報告しない。

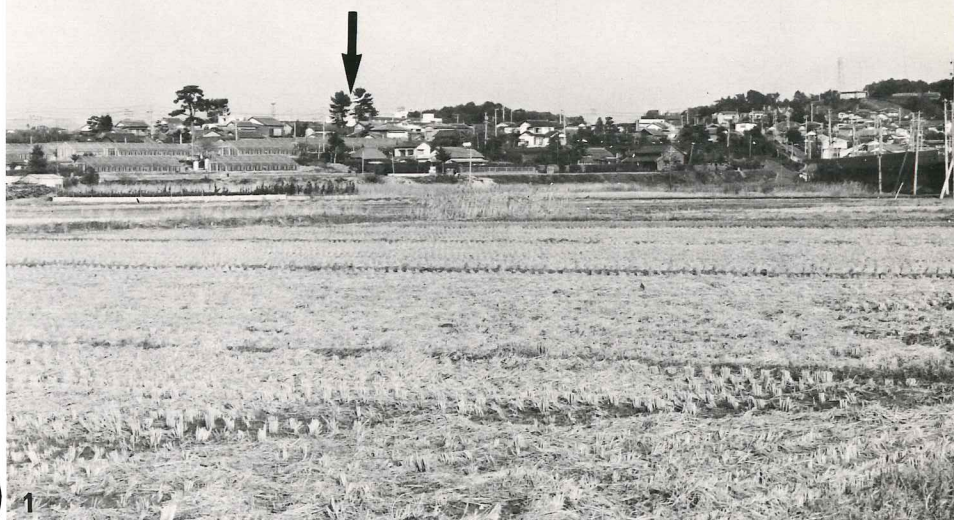
第3節 おわりに

今回の調査でも前回の調査同様の結果がえられたが、新しい発見もいくつかあった。以下列記すると、①従来あまり一括資料の少なかった嶺田式土器の組成について一部確認しえた。②袋井市内では、欠の上遺跡、鶴松遺跡に次いで3例目の摩製石鏃がえられ、時期もほぼ後期前

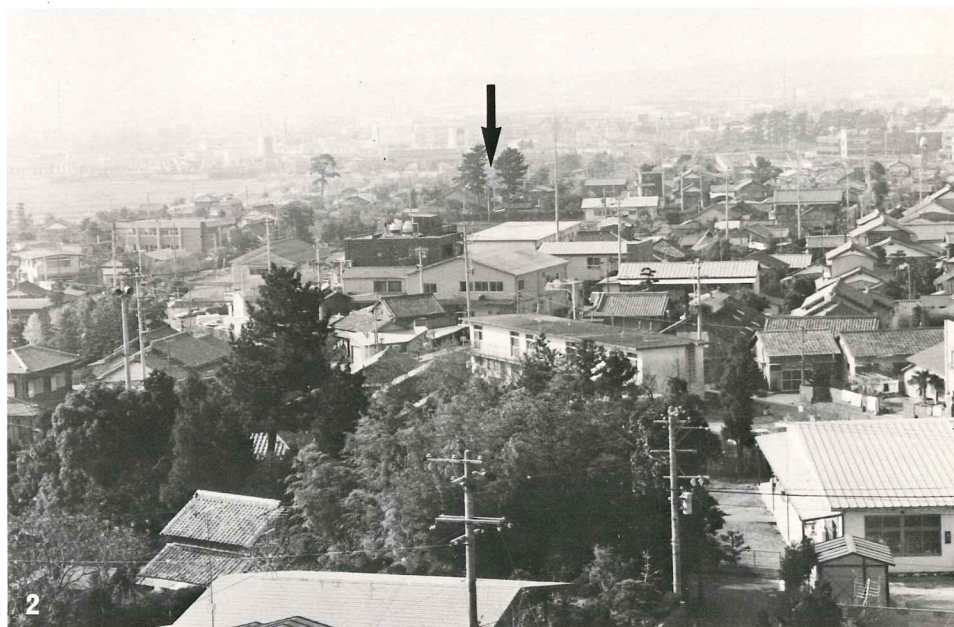
葉と考えられた。③古墳時代の集落が公民館用地よりも西側に広がること。④中世において輸入磁器、窯窯製品などが出土し一般集落ではなさそうな遺構が付近に存在しそうなことなどが確認しえた。以上の点、今後大門遺跡付近でさらに新たな発見があるであろうが、本地域では急速に宅地化が進んでおり、こうした歴史的事実を証明する遺跡の消滅も近い将来考えられ、発掘調査以前の問題点の多くを我々に投げかけた調査であった。

圖 版

1 遺跡遠景 (矢印調査地点
水田面, 南より)



2 遺跡遠景 (矢印調査地点
東より)



3 調査前状況 (確認調査時)





1 完掘状況（東より）



2 完掘状況（西より）



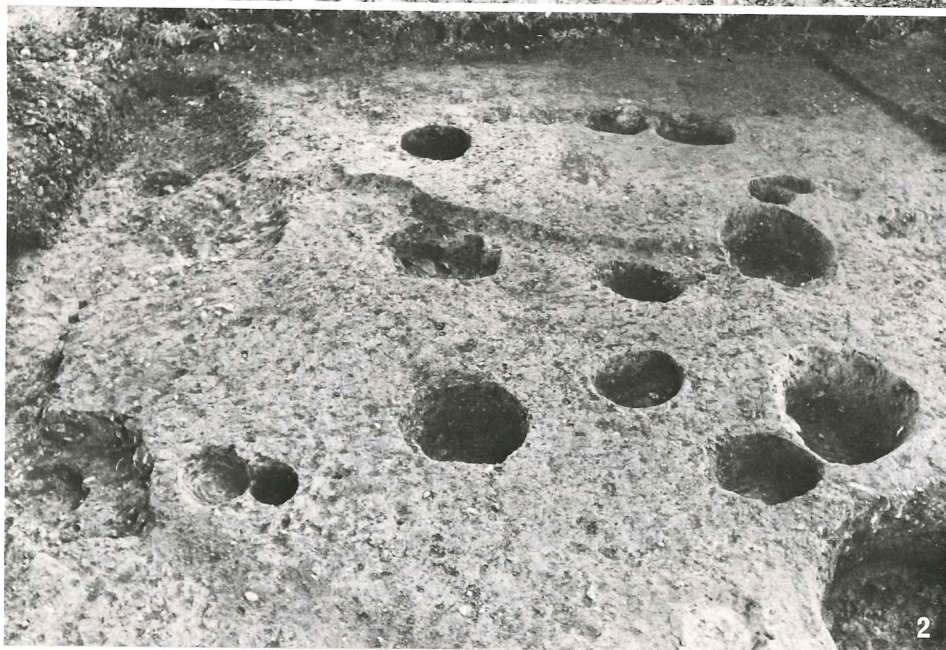
1 S B 1.2 (手前 S B 1 奥 S B 2)
東より

2 S B 1 (東より)

3 S B 2.3.4 (S B 3.4 と重複)
北より



1 S B 1-P 1 (太い柱痕)



2 S B 5 (中世掘立、北より)



3 S B 6 (中世掘立東より)

1 S I 1.2 (東より) 1

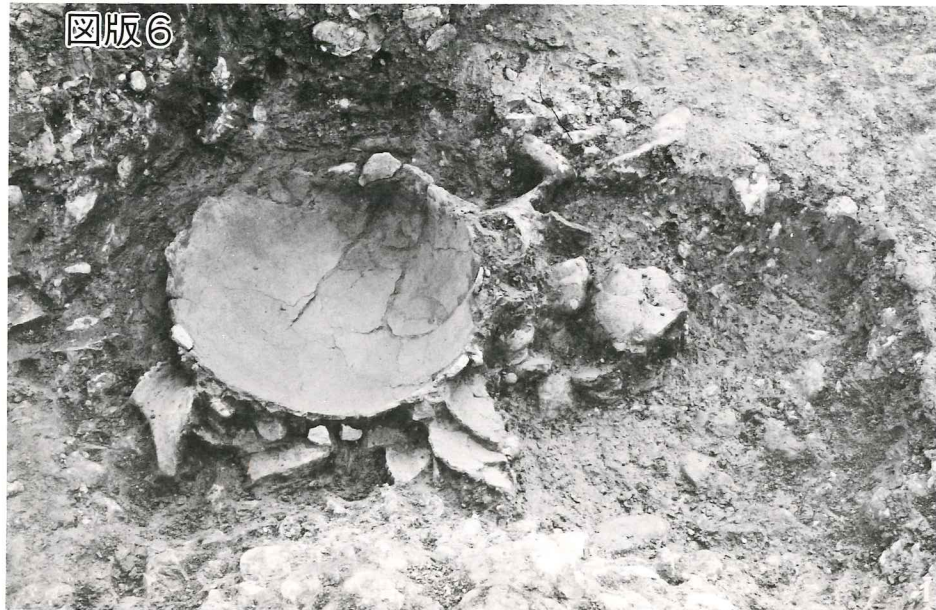


2 S I 3.4 (北より) 2



3 S X 1 (東より)

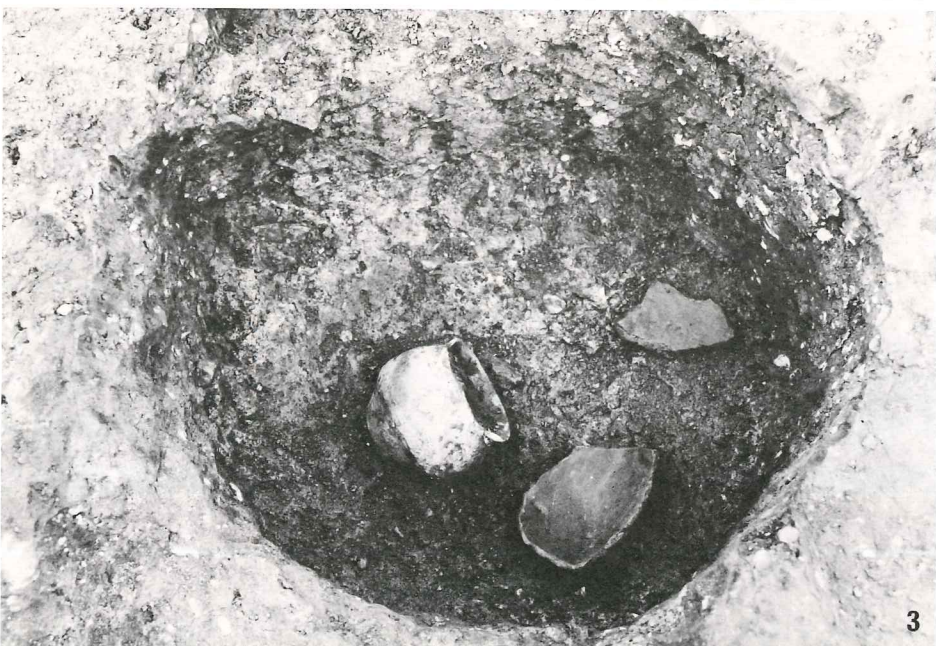




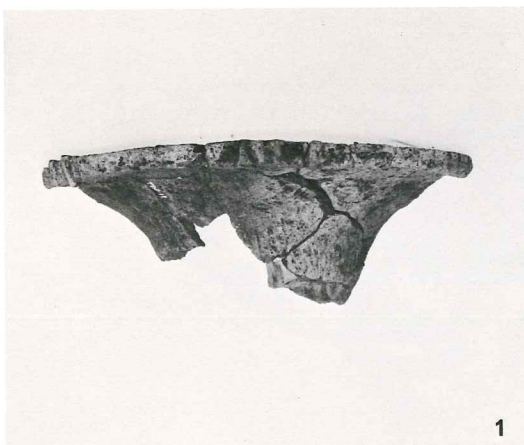
1 S K 9 (土器棺第17图)



2 S K 9 内土器 (第17图)



3 P 100 (貯藏穴?)



1



2



3



4



5



6

1 ~ 5 SK 1 出土土器

6 SK 9 出土土器



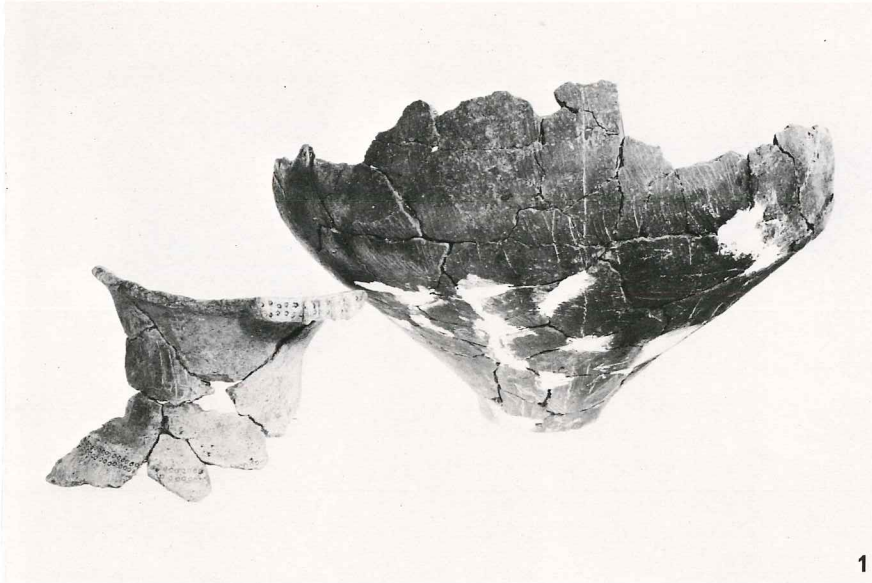
7



8

7 P 157 出土土器

8 P 100 出土土器



1 1 S K 9 出土土器 (第17図)



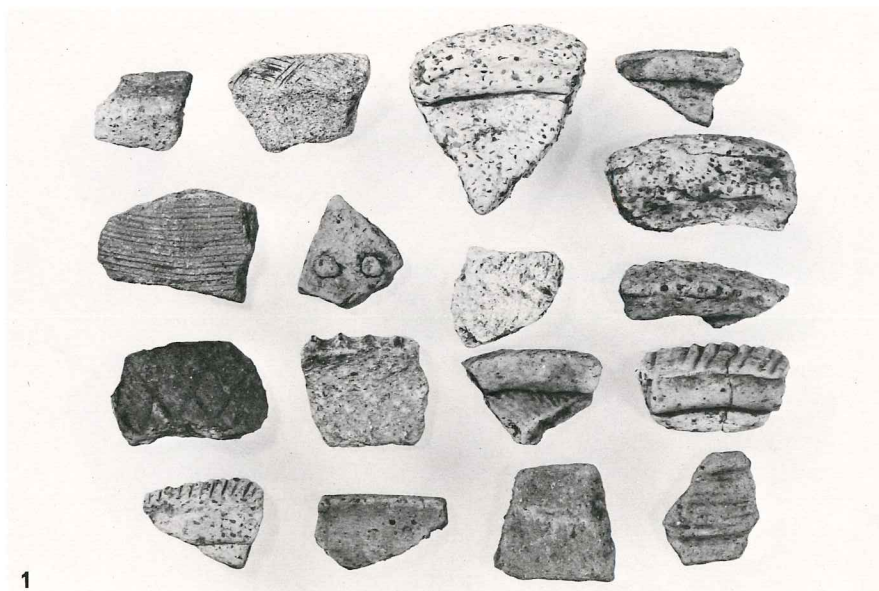
2 2 採集土器 (第15図)



3 第1次調査出土土器 (第15図)

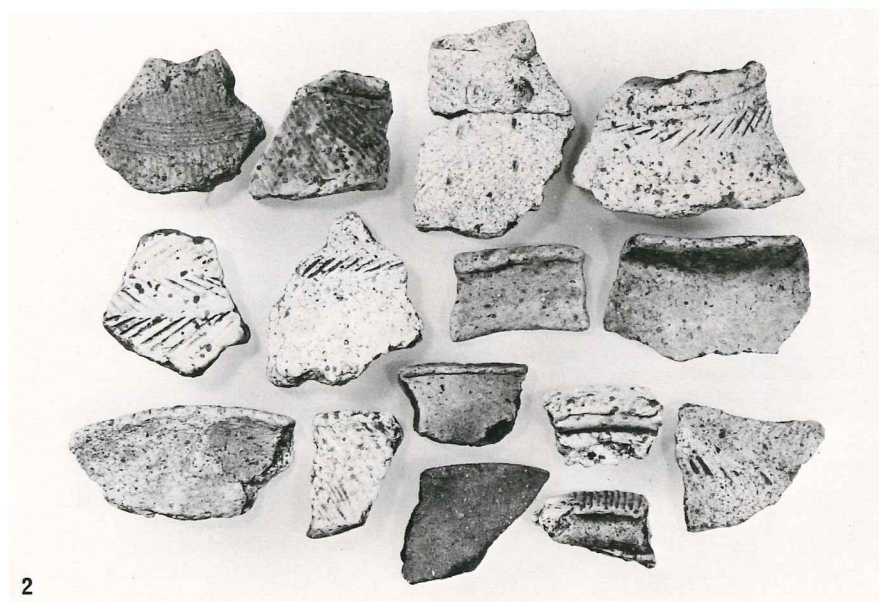
1 S B 1.2出土遺物 (第18図)

1



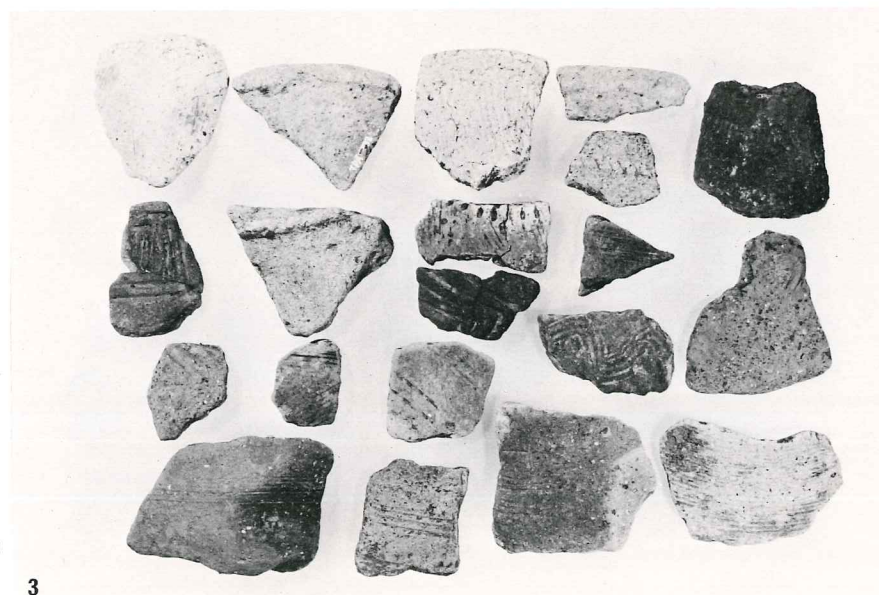
2 S B 2.3.4出土遺物 (第18図)

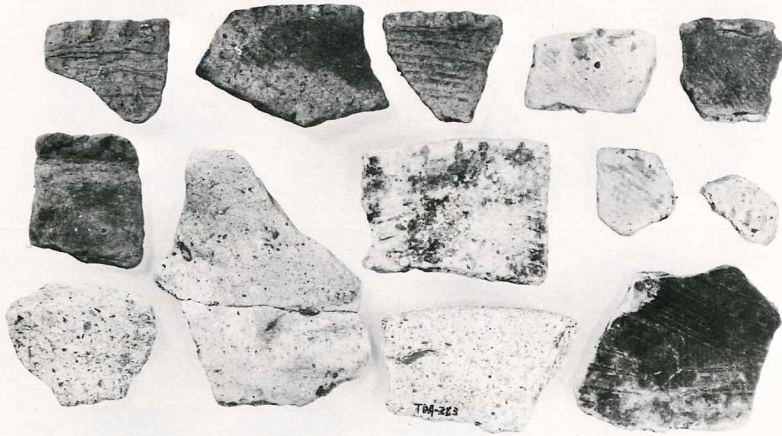
2



3 S I 1出土遺物 (第18図)

3

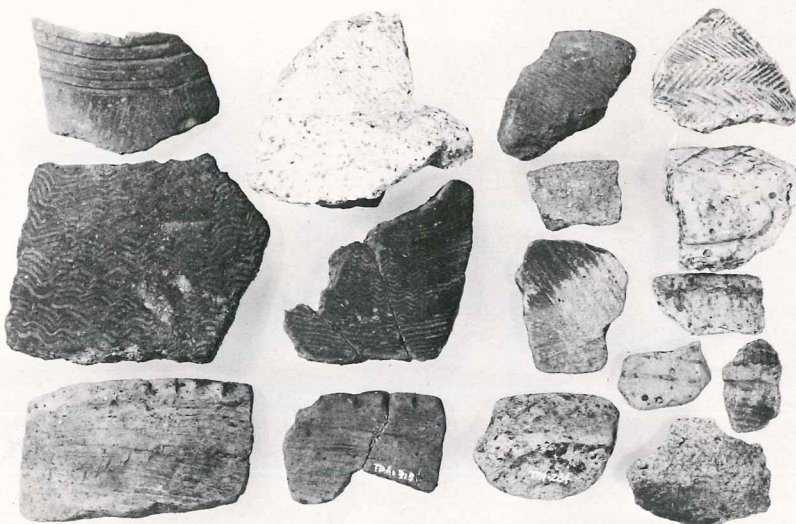




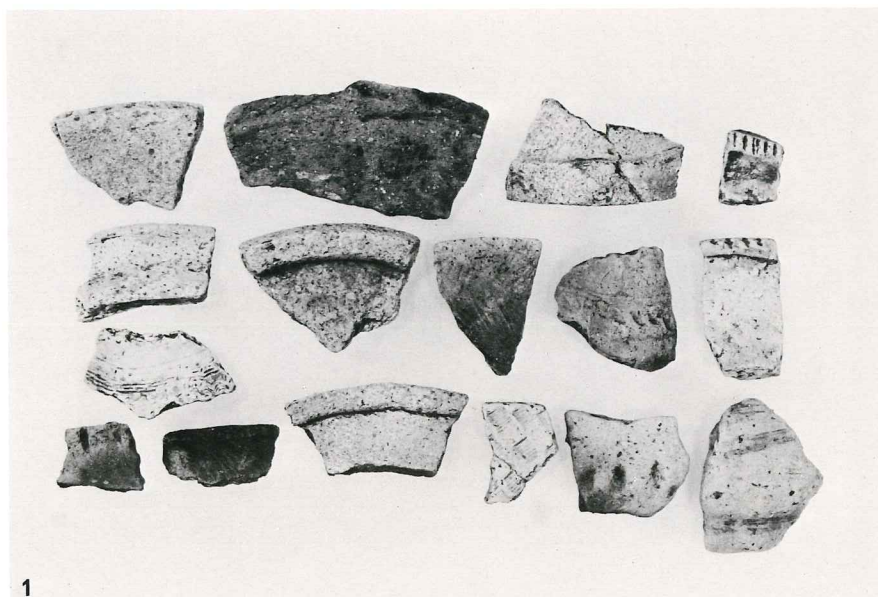
1 豎穴状(S I)遺構出土遺物
(第19図)



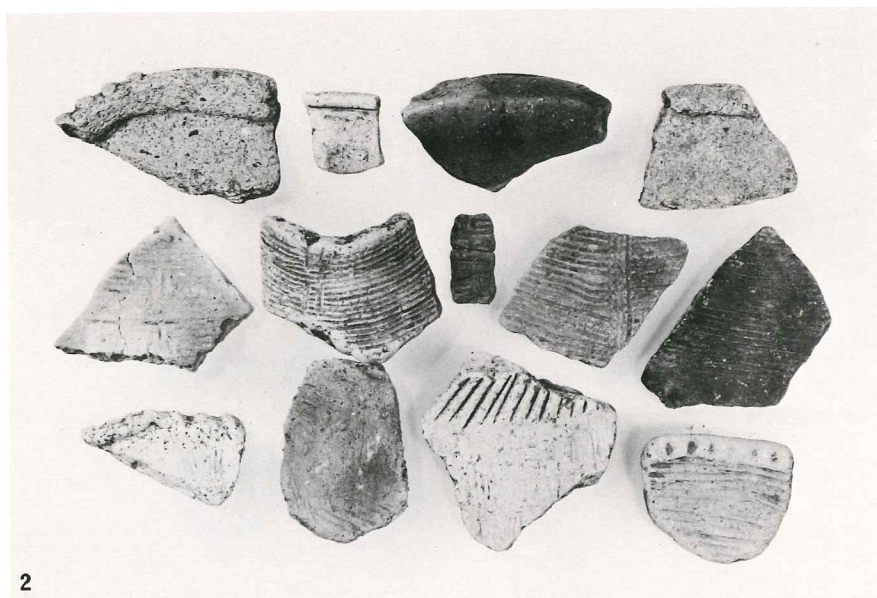
2 方形周溝基・土壇(S K)
出土遺物 (第19図)



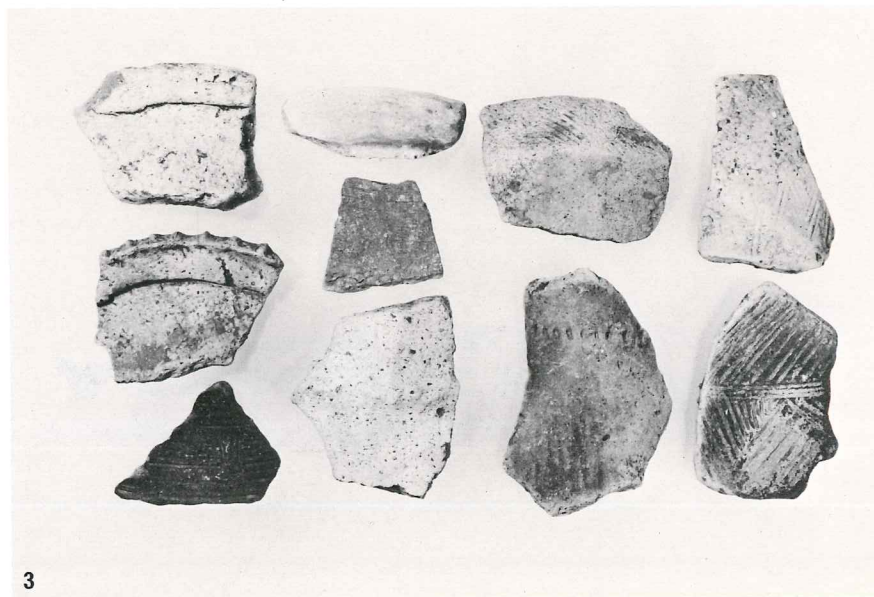
3 土壇(S K)・溝状遺構(S D)
出土遺物 (第19図)



1 小穴(Pit)表採出土遺物
(第19図) 1



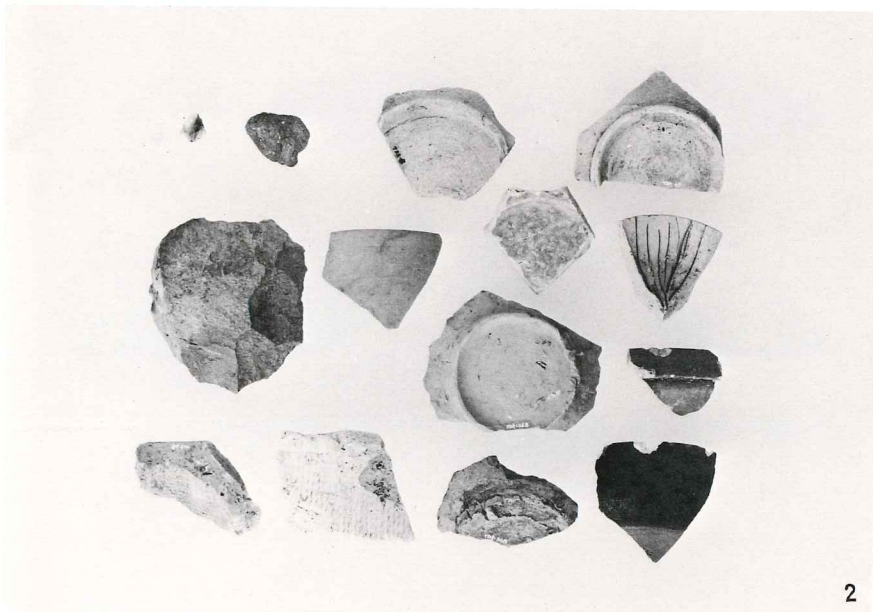
2 確認調査出土遺物(1)
(第20図) 2



3 確認調査出土遺物(2)
(第20図) 3



1 確認調査出土遺物(3) (第20図)



2 縄文時代・奈良～中世遺物
(第14図・第21図)



3 近世末～近代遺物
(瀬戸・肥前系陶磁器) (第22・23図)

大 門 遺 跡

—大門 I 遺跡第 2 次発掘調査報告—

1983年 3 月 20 日

発 行 静岡県袋井市教育委員会

〒437 袋井市国本 3070—1

印 刷 株式会社 開 明 堂

〒430 浜松市中沢町 1—1